

鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（52）

一般国道220号鹿屋バイパス建設に伴う発掘調査報告書（Ⅲ）

**中ノ原遺跡(Ⅱ)
中原山野遺跡
西原掩体壕跡
(第5分冊)**

1990.3

鹿児島県教育委員会

序 文

この報告書は、鹿児島県教育委員会が国道220号鹿屋バイパス建設に先だって、昭和60年度から昭和63年度にかけて実施した中ノ原・中原山野・前畠遺跡の発掘調査の記録です。

これらの遺跡からは、縄文・弥生時代から中・近世にわたる時期の遺物・遺構をはじめ、太平洋戦争における掩体壕等の戦跡遺構など、地域的特色を示す数多くの遺物・遺構が発見され、多大の成果を収めました。

本書は、南九州の歴史を明らかにするうえで貴重な手掛かりを提供するものと考えており、地域の歴史的研究や文化財保護のために活用していただければ幸いです。

終わりに、この発掘調査に御協力くださった建設省九州建設局大隅工事事務所や地元の方々に心から感謝いたします。

平成2年3月

鹿児島県教育委員会
教育長 濱 里 忠 宣

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至るまでの経過

昭和53年、建設省九州地方建設局により一般国道 220号鹿屋バイパス建設が計画されたことに伴ない、鹿児島県教育委員会は、建設省九州地方建設局大隅工事事務所の依頼を受けて、昭和54年11月、工事予定地内の遺跡分布調査を実施した。

その結果、笠ノ原～祓川地区については王子遺跡をはじめ4遺跡が発見され、昭和56年度から昭和59年度にかけて県教育委員会によって発掘調査が実施された。

大浦・郷之原地区については、昭和59年4月、第二次調査として分布調査を実施し、7地点の遺物散布地が確認された。

分布調査の結果、7地点の確認調査が必要となり、建設省大隅工事事務所と鹿児島県教育委員会との協議に基づき、建設省大隅工事事務所と鹿児島県知事との間で委託契約が結ばれ確認調査が実施されることとなった。

第2節 確認調査

委託契約に基づき、確認調査は昭和60年度4月22日～5月25日に実施した。確認調査の結果、第6地点では遺跡は確認されなかったが、他の6地点では遺跡の存在が確認され本調査が必要となった。さらに、確認調査時の詳細分布調査において、新たに第8地点が発見された。

第3節 発掘調査

本調査は、建設省九州建設局大隅工事事務所と鹿児島県教育委員会文化課の協議に基づき建設省九州建設局大隅工事事務所と鹿児島県知事との間で委託契約が締結され実施の運びとなった。

本調査は、確認調査が散布地点の遺跡の有無を確認するだけのものであったので、建設予定地内の遺跡の範囲を限定する調査（二次確認調査）を実施しながら全面調査に移行するという方法で行った。さらに、工事が長期にわたる橋梁部分などについては、その部分を先行して本調査を実施することで協議が整った。

一般国道 220号鹿屋バイパス道路は、高隈山地から南方向にのびる遺跡の立地する台地に対してほぼ東西方向から横切る計画である。各遺跡の調査ではこのバイパス道路の中心杭の二点を使用して調査区画を設定した。なお、中心杭を調査区画の主軸（基準）に設定したのは、この中心杭より南側が、今回のバイパス工事が計画されている部分であり、かつ今回の調査対象地でもあるためである。また、この中心杭より北側は緑地帯が計画され、今回のバイパス工事

からは除外されている。ただし、川ノ上遺跡については、遺跡の性格上、調査区画（グリッド）の設定は上記の方法とは別にした。調査区画（グリッド）は、中心杭の二点を主軸に調査対象区間を10m×10mのグリッドに分割した。そして各遺跡の立地のうえから東側から或は西側から道路進行方向に向かって1区、～10区とし、南側から北側へA区、～D区とした。従って場所の指定は、B 5区等というかたちとなる。

各種遺跡の年次ごとの調査は、以下のとおりである。

【昭和60年度の調査】

《中ノ原遺跡の発掘調査》	昭和60年10月7日～昭和61年3月17日
《中ノ丸遺跡の発掘調査》	昭和61年2月12日～昭和61年3月17日

【昭和61年度の調査】

《榎田下遺跡の発掘調査》	昭和61年5月7日～6月24日
《中ノ原遺跡の発掘調査》	昭和61年6月23日～7月17日、10月3日～昭和62年3月4日
《川ノ上遺跡の発掘調査》	昭和61年9月16日～10月15日

【昭和62年度の調査】

《中原山野遺跡の発掘調査》	昭和62年6月15日～7月14日、10月19日～昭和63年1月26日
《前畠遺跡の発掘調査》	昭和62年6月19日～昭和63年3月9日

【昭和63年度の調査】

《中原山野遺跡の発掘調査》	昭和63年4月27日～8月31日
《前畠遺跡の発掘調査》	昭和63年4月19日～9月2日

第4節 報告書の作成

発掘調査の本格的な整理作業は、昭和63年9月から実施した。昭和63年度の発掘調査報告書は、概要編(第1分冊)、榎田下遺跡(第2分冊)、中ノ丸遺跡・川ノ上遺跡(第3分冊)、中ノ原(Ⅰ)遺跡(第4分冊)を鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(48)として刊行した。

平成元年度は、中ノ原(Ⅱ)遺跡、中原山野遺跡、前畠遺跡、西原掩体壕跡及び誘導路跡の整理作業を実施した。本報告書が平成元年度分の発掘調査報告書である。

第5節 調査の組織

発掘調査は、建設省九州建設局大隅工事事務所と鹿児島県知事との委託契約に則り、鹿児島

県教育委員会文化課が担当した。調査の組織は次の通りである。

調査主体者	鹿児島県教育委員会	教育長	山田 克穂（昭和60年度・61年度）
タ	タ	タ	濱里 忠宣（昭和62～平成元年度）
調査責任者	鹿児島県教育庁	文化課 課長	桑原 一廣（昭和60年度・61年度）
タ	タ	タ	吉井 浩一（昭和62～平成元年度）
調査企画者	タ	課長補佐	坂口 雄（昭和60年度）
タ	タ	タ	川畑 栄造（昭和61年度・62年度）
タ	タ	タ	奥園 義則（昭和63～平成元年度）
タ	タ	主 幹	中村 文夫（昭和60年度・61年度）
タ	タ	タ	森田 齊（昭和62年度）
タ	タ	タ	立園多賀生（昭和63～平成元年度）
タ	タ	主任文化財研究員	向山 勝貞（昭和60年度）
タ	タ	主任文化財研究員兼 埋蔵文化財係長	立園多賀生（昭和61年度・62年度）
タ	タ	文化財研究員兼 埋蔵文化財係長	吉元 正幸（昭和63年度）
タ	タ	主任文化財研究員兼 埋蔵文化財係長	吉元 正幸（平成元年度）
調査事務担当者	タ	主幹兼管理係長	寺園 晃（昭和60年度）
タ	タ	企画助成係長	浜松 巍（昭和61年度・62年度）
タ	タ	タ	京田 秀允（昭和63～平成元年度）
タ	タ	主 察	浜松 巍（昭和60年度）
タ	タ	タ	京田 秀允（昭和61年度・62年度）
タ	タ	タ	平山 章（昭和63～平成元年度）
タ	タ	主 事	田中 孝子（昭和60年度）
タ	タ	タ	川畑由紀子（昭和61年度・62年度）
タ	タ	タ	植木園 均（昭和62年度）
タ	タ	タ	末永 郁代（昭和63～平成元年度）
調査担当者	タ	主 察	新東 晃一（昭和60～平成元年度）
タ	タ	主 事	井ノ上秀文（昭和60年度）
タ	タ	タ	宮田 栄二（昭和60年度）
タ	タ	文化財調査員	前追 亮一（昭和60～62年度）
タ	タ	タ	上田 耕（昭和61年度）
タ	タ	タ	山畑 泰子（昭和62年度）

調査担当者	鹿児島県教育庁	文化財調査員	梅北 浩一（昭和63年度） 八木澤一郎（昭和63～平成元年度） 中村 和美（昭和53年度） 間 一之（平成元年度） 知花 一正（平成元年度）
♦	♦	♦	
♦	♦	♦	
♦	♦	♦	
♦	♦	♦	

調査指導者	奈良国立文化財研究所造構調査室長	宮本長二郎（集落造構）
♦	鹿児島県文化財保護審議会委員	河口 貞徳（考古学）
♦	南九州古石塔研究会副会長	河野 治雄（古石塔）
♦	鹿児島大学歴史学部教授	小片 丘彦（人類学）
♦	鹿児島大学法文学部教授	上村 優雄（考古学）
♦	愛媛大学法文学部教授	下條 信行（考古学）
♦	北九州市立考古博物館副館長	武末 純一（考古学）
♦	九州帝京短期大学経済学部講師	櫻木 晋一（経済学）
♦	鹿児島大学法文学部助手	本田 道輝（考古学）
♦	鹿児島玉龍高校教諭	成尾 英仁（地質学）

尚、調査中、次の方々から指導助言を頂いた。記して感謝の意を表したい。（敬称略）

川路則友・峰和治・山本美代子・岡元満子（鹿児島大学歴史学部）渡辺誠（名古屋大学教授）泉拓良（奈良大学助教授）新田栄治（鹿児島大学助教授）宮本一夫（愛媛大学助教授）西健一郎（九州大学助手）中村恵（沖縄国際大学助手）岸本義彦・島袋洋（沖縄県教育委員会）松永幸男・坪根伸也（鹿児島大学）瀬戸口望（志布志町文化財保護委員）米元史郎（志布志町教育委員会）兩宮瑞生・金貞姫（筑波大学大学院）松園政男（鹿児島県考古学会員）青崎和憲・弥栄久志（霧島青年の家）峰崎幸清・鈴木順一（国分市教育委員会）中島哲郎・長谷川順一（川内市歴史資料館）松下重信（鹿児島県考古学会員）

工事主体者	建設省九州建設局大隅工事事務所	所長	吉田 三郎（昭和60年度～62年度） 板垣 治（昭和63～平成元年度）
♦	♦	♦	藤原栄吉郎（昭和60年度）
♦	♦	♦	上山 秋男（昭和61～平成元年度）
♦	♦	♦	重水 治雄（平成元年度）
♦	♦	課長	内田 界（昭和60年度・61年度）
♦	♦	♦	松木 威（昭和62～平成元年度）
♦	♦	♦	犬童 正夫（平成元年度）
♦	道路調査係長	江崎 嘉男	（昭和60年度）

工事主体者 建設省九州建設局大隅工事事務所 道路調査係長 富安 文夫（昭和61年度・62年度）
 * * * * * 山崎 千昭（昭和63～平成元年度）
 * * * * * 主 任 丸久 哲郎（昭和63～平成元年度）
 * * * * * 技 師 吉川 丈次（昭和60・61年度）
 * * * * * * 丸久 哲郎（昭和62年度）

発掘調査作業員

【昭和60～61年度の発掘調査】

確認調査・横田下遺跡・中ノ原遺跡・中ノ丸遺跡・川ノ上遺跡の発掘調査
 連絡・調整者 大浦町振興会々長 牧迫正夫（昭和60年度） 新地 宏（昭和61年度）

【大浦地区】 立元清志・立元操・西ノ原一則・本白水重成・内田利用・清水良雄・新地辰夫・西門功・藤追幸雄・村上政義・岸元ハツエ・岩元フミ子・岩元フジエ・内田ツル子・内田マツ子・岡元キミエ・岡元ミエ子・岡元ミツ・尾追サツ子・尾追サヨ子・大須イネ・川井田チエ子・倉狩米子・藏ヶ崎ミエ子・新地サダ子・新地スエ子・新地フキ子・新地ハツエ・新地美代子・立元和子・永吉キヨ子・中村陽子・西門エミ子・西門ヒサ子・西ノ原ムツ子・西ノ原のり子・牧迫フミエ・牧迫ミル・的場キミ子・的場春子・藤追フミエ・本白水フジエ

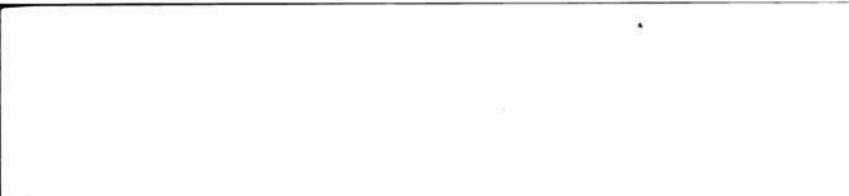
【昭和62～63年度の発掘調査】

前畠遺跡・中原山野遺跡の発掘
 連絡・調整者 郷之原町振興会々長 郷原益雄（昭和62～63年度）

【郷之原地区】 奥村丈夫・東正春・森山芳夫・森山幸男・森山幸雄・山口益夫・郷原恒男・吉元盛幸・奥村タエ子・奥村和子・奥村ハギエ・郷原キヨ子・郷原多美子・郷原キヨ・郷原マス子・郷原カズ子・郷原カズ子・郷原フミエ・郷原ナル・郷原サチ子・郷原ハル・郷原圭子・郷原フミ・郷原ハツエ・郷原ノブ子・郷原ヨシエ・郷原ヨシミ・郷原陸子・郷原スギ・郷原フミ子・郷原ヨシミ・前ノ原康江・前ノ原キクエ・前ノ原千代子・前ノ原ユリエ・森山サエ子・森山キヨ・森山マサエ・吉元キクエ・吉元順子・吉元美代子・吉元マツ子・山口タミエ・東トヨ子・東キヌ子・原田ユキミ 【大浦地区】 川井田智栄子・新地美代子・大須イネ・西門サキ子・藏ヶ崎美江子・西門エミ子・西門ナミエ・的場フジ子・的場春子・的場喜美子・西ノ原ムツ子・尾追サツ子・尾追サヨ子・岡元ミス子・内田カズ子

【昭和61～平成元年度の整理作業】 鹿児島県教育庁文化課埋蔵文化財収蔵庫整理作業員
 前之園俊子・中原己美子・脇田美律江・臼井鏡子・岩坪千枝子・喜入カツ子・有留理美・野口久子・宮岡雪子・高倉晴美・永野香代子・木田安枝・岡村典子・川畠恵子・四九久美子・浜田幸江・山下治子・東しづ子・徳永美喜子・本多直子・下畠節子・鳥巣のり子・前田まさ子・有満和子・安永一葉・志和地和恵・杉森和子・杉森敏子・岩爪美津子・上野智恵子

中ノ原遺跡(Ⅱ)



例　　言

1. この報告書は、一般国道220号鹿屋バイパス建設に伴う大浦・郷之原地区の「中ノ原遺跡」の発掘調査報告書である。
2. この報告書は、鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(52)の「中ノ原遺跡(Ⅱ)」(第5分冊)である。
なお、第4分冊「中ノ原遺跡」(1)の続編である。
3. 中ノ原遺跡は、鹿屋市大浦町(旧字名中ノ原)に所在する。
4. 発掘調査は、建設省九州建設局大隅工事事務所からの受託事業として鹿児島県教育委員会が実施した。
5. 発掘調査は、昭和60年10月7日～昭和61年3月17日と昭和61年6月22日～昭和63年3月4日に実施した。整理作業は、昭和63年度と平成元年度に実施した。
6. 発掘調査に当たっては、鹿屋市教育委員会や大浦町内会の協力・援助を得た。
7. 本書で用いたレベル数値は、すべて海拔高である。
8. 現地調査に関する実測及び写真撮影は、調査担当者(新東晃一・前迫亮一・上田耕)で行った。
出土遺物の実測・製図は八木澤一郎・前迫・新東が行ない、本書の執筆は、新東が担当した。
9. 本書の編集は、鹿児島県教育庁文化課で行い、新東がこれを担当した。

本文目次

第Ⅰ章 はじめに.....	1
第1節 調査に至るまでの経過.....	1
第2節 確認調査.....	1
第3節 発掘調査.....	1
第4節 報告書の作成.....	2
第5節 調査の組織.....	2
第Ⅱ章 中ノ原遺跡の概要.....	1
第1節 調査の経緯.....	1
第2節 発掘調査の経過.....	1
第3節 発掘調査の概要.....	3
第Ⅲ章 弥生時代の調査.....	7
第1節 調査の概要.....	7
第2節 造構.....	7
第3節 出土遺物.....	17
第Ⅳ章 歴史時代の調査.....	33
第1節 調査の概要.....	33
第2節 造構.....	33
第Ⅴ章 発掘調査のまとめ.....	43

挿 図 目 次

第1図	Ⅲ層遺構配置図及び遺物分布図	5
第2図	遺物出土状況図	7
第3図	1号住居址遺物分布図	8
第4図	1号住居址遺物出土状況図	9
第5図	1号住居址実測図	10
第6図	1号住居址出土遺物実測図(1)	11
第7図	1号住居址出土遺物実測図(2)	11
第8図	2号住居址実測図	12
第9図	3号住居址遺物分布図	13
第10図	3号住居址遺物出土状況図	14
第11図	3号住居址実測図	15
第12図	3号住居址出土遺物実測図	16
第13図	Ⅲ層出土遺物実測図(1)	18
第14図	Ⅲ層出土遺物実測図(2)	19
第15図	Ⅲ層出土遺物実測図(3)	20
第16図	Ⅲ層出土遺物実測図(4)	22
第17図	Ⅲ層出土遺物実測図(5)	23
第18図	Ⅲ層出土遺物実測図(6)	24
第19図	Ⅲ層出土遺物実測図(7)	25
第20図	Ⅲ層出土遺物実測図(8)	26
第21図	Ⅲ層出土遺物実測図(9)	27
第22図	中～近世遺構配置図	34
第23図	古道路実測図	35
第24図	溝状遺構実測図	35
第25図	1号掘立柱建物実測図	37
第26図	2号掘立柱建物実測図	38
第27図	2号・3号掘立柱建物配置図	40
第28図	3号掘立柱建物実測図	41
第29図	土師器出土状態	42
第30図	土師器実測図	42

表 目 次

第1表 出土遺物一覧表(1)	28
第2表 出土遺物一覧表(2)	29
表3表 出土遺物一覧表(3)	30
第4表 出土遺物一覧表(4)	31
第5表 出土遺物一覧表(5)	32
第6表 1号掘立柱建物跡一覧表.....	37
第7表 2号掘立柱建物跡一覧表.....	38
第8表 3号掘立柱建物跡一覧表.....	40

図 版 目 次

図版1	1. C D 1・2区Ⅲ層の発掘調査風景	45
	2. 1号住居址検出状況（北から）	
図版2	1. 検出状況（北から） 2. 掘り下げ状況（東から）	46
	3. 埋土状況（北から） 4. 埋土状況（東から）	
	5. 1号住居址検出状況（東から）	
図版3	1. 1号住居址全景（北から）	47
	2. 1号住居址全景（北から）	
図版4	1. 1号住居址出土遺物（土器）	48
	2. 1号住居址出土遺物（石器）	
図版5	1. 2号住居址全景（東から）	49
	2. 3号住居址検出状況（東から）	
図版6	1. 3号住居址全景（東から）	50
	2. 3号住居址出土遺物	
	3. 完形土器出土状況（149）	
図版7	1. 弥生土器（1） 2. 弥生土器（2）	51
図版8	1. 弥生土器（3） 2. 弥生土器（4）	52
図版9	1. 弥生土器（5）	53
図版10	1. 弥生土器（6）	54
図版11	1. 弥生土器（7） 2. 弥生土器（8）	55
図版12	1. 弥生土器（9）	56
図版13	1. 弥生土器（11）	57
図版14	1. 弥生土器（12）	58
図版15	1. 弥生土器（13）	59
図版16	1. 弥生土器（14）	60
図版17	1. 1号掘立柱建物検出状況	61
	2. 1号掘立柱建物全景	
図版18	1. 2号・3号掘立柱建物全景	62
	2. 土師器出土状況（柱穴） 3. 土師器出土状況（柱穴）	
	4. 出土土師器（内面） 5. 出土土師器（底面）	

第Ⅱ章 中ノ原遺跡の概要

第1節 調査の経緯

中ノ原遺跡は、大浦町のはば中央の台地に立地し、この台地上に遺物が広く散布している。昭和59年の分布調査の結果に基づき、この中ノ原台地の西方寄りの散布地を第3地点とし、中央付近を第7地点とした。建設省大隅工事事務所と鹿児島県教育委員会文化課との協議の結果、昭和60年度4月に確認調査を実施し、その後昭和60年10月以降に本調査を実施することになった。確認調査の結果、第3地点は分布調査地域のはば全域に遺跡の存在が確認された。第7地点は、第3地点寄りに遺跡が存在するが、東方に向けては谷状の凹地となり遺跡の可能性は無いことが判明した。第3地点と第7地点は、確認調査の結果や遺物の散布状況や地形からみて一連の遺跡であることが考えられ、後には二地点併せて中ノ原遺跡とすることになった。

第2節 発掘調査の方法と経過

発掘調査は、昭和60年度と昭和61年度の二年度にわたって実施した。

昭和60年度は、昭和60年10月7日から昭和61年3月17日の間に実施した。昭和60年度の発掘調査は、構梁部分の工事が早く発注されるため、その部分にあたる台地西側部分を中心に行つた。昭和61年度は、他の地点の発掘調査との関係で昭和61年6月22日から7月17日の間と昭和61年10月3日から昭和62年3月4日の間の二期にわたって実施した。昭和61年度の発掘調査は、昭和60年度の残りと第3地点から第7地点までを実施し、中ノ原遺跡の調査は完了した。

発掘調査は、工事用センター杭No.354とNo.360を基準に10m×10mのグリッド網を調査対象区域に被せ実施した。そして、グリッドは西端から1～44区と南からA～I区として、各グリッドはA 1区、……A 44区、D 1区……D 10区などと呼称することにした。

【昭和60年度の調査】 昭和60年10月7日～昭和61年3月17日

10月は、発掘調査の準備および調査の開始。調査事務所等を建設し、伐採作業と調査区の設定を行い、構梁部分に關する7区以西の調査を手掛けた。表土下には中世の包含層と弥生時代の包含層が存在するが、区域によって残存度に濃淡がある。D 7区には早くも弥生時代に該当する竪穴住居址等の遺構が検出され中世・弥生時代・縄文時代の遺物等が出土。遺構の検出とA～C 7区以西の表土剥ぎ作業を中心に行う。

11月は、表土剥ぎ作業を継続しながら、遺構検出を並行して行う。新たにC 1区～C 3区にかけての谷の凹地の調査にも入る。この部分は上の台地の遺物が流堆積した状態で弥生時代の遺物が集中する。中世の溝状遺構等の検出作業が続く。端部の遺構・遺物の少ないところは、処理を終え、下層確認のためのトレンチを設定し断面図を作成する。

12月は、F 7区以西の一部、端部の残り部分の伐採作業や表土剥ぎ作業等を行い調査区全体の調整につとめる。一方では、縄文時代後期の遺構・遺物の検出作業を行い、実測作業等で遺物の取り上げ処理等を行う。24日、河口貞徳県文化財保護審議会委員の発掘調査指導。27日で年末の作業は終了。

昭和61年1月は、6日から作業開始。前日からの大雪のため午前中は発掘調査は中止。C 1区・C 2区付近の谷部の遺物包含層は、大量に遺物が出土し作業難行。D 7区の整穴住居址(1号)の掘り下げ開始。C 5区～D 5区にかけて掘立柱建物跡検出。時期は中世。2間×4間の間取り。他の調査区は縄文時代後期の検出作業。住居址や掘立柱建物跡等の遺構の調査は少人数で行うため、新たにD14区～16区の表土剥ぎ作業に入る。

2月は1号住居址掘り下げ続行。消失家屋で炭化木多量検出のため作業難行。C 5区、C・D 6区など縄文時代後期層まで終了したところは下層確認のため深掘り作業。12日から2パーティに分かれ中ノ丸遺跡も調査にかかる。住居址1号を中心にD 7区以西の仕上げ。15日にG 2区に花弁状の間仕切りをもつ円形住居址検出。21日、F 2区に縄文時代晚期住居址検出。

3月は、弥生時代住居址(3基)および縄文時代住居址の発掘作業に終始。各住居址の実測・清掃・写真撮影作業。4日、河口県文化財保護審議会委員の発掘調査指導。17日、橋梁建設に係わる部分の中ノ原遺跡の調査終了。

【昭和61年度の調査】 昭和61年6月23日～7月17日、10月3日～昭和62年3月4日

6月23日から第7地点(後に中ノ原遺跡に含めた)の確認調査に入る。D25区～D29区は東側の確認トレンチ調査を開始。6月末まで確認調査続行。

7月は、それ以東の30区～44区について盛土を重機で旧耕作土まで排土し、東西方向に5m毎にトレンチ設定。この部分には遺構・遺物は検出されず。これで第7地点つまり中ノ原遺跡の東端はD29区までと確認される。続いて昭和60年度の延長部の調査に入る。F 5区～F 7区の元事務所付近に入る。一日毎に悪天候のため足場の良いB10区以東の表土剥ぎを並行して進める。F 6区、F 7区に掘立柱建物跡を検出。17日、中ノ丸遺跡の調査が急ぐため中ノ原遺跡の発掘調査を一時中断。

10月3日から再び中ノ原遺跡の発掘調査開始。東端の29区～24区付近とD 6区・F 7区付近の掘立柱建物跡の調査に分かれて入る。D24区付近は縄文時代後期該当土器出土。25日、高校歴史部会の中ノ原遺跡の現地見学。縄文時代後期層の検出・写真撮影・実測終了後、遺物取り上げ作業。終了地点は深掘りトレンチで下層確認調査。

11月は、1週がD29区～D24区付近の深掘り作業続行。縄文時代早期該当層には、遺物は確認されない。D23区～D20区の表土剥ぎから後期包含層掘り下げ作業に入る。続いてD18区・D19区に入る。順次縄文時代後期包含層の掘り下げ作業続行。

12月は、C D 8区以東とC D17区以西の両方から弥生時代包含層と縄文時代後期包含層の検出作業継続。C D12区～C D13区付近には弥生土器もかなり出土。包含層の処理の済んだところ

ろは順次下層確認の深掘りトレンチ掘り下げを実施。26日で年末は終了。

1月は、6日から調査開始。DC12区・DC13区付近で市来式土器が多量出土。18日、DC10区付近にほぼ一體分の縄文時代晚期土器の集中する箇所検出。22日、DC18区～DC19区の深掘りトレンチで縄文時代早期包含層検出。早期包含層の平面調査開始。貝殻文系円筒土器が二個体分程度出土。

2月は、DC9区～DC14区にかけて後期包含層の掘り下げ作業と実測作業継続。EF6区～EF7区付近の掘立柱建物跡の再検出とその周辺の検出作業。F6区に弥生土器完形品の出土。掘立柱建物跡の柱穴から土師器の完形品出土。写真・実測。DC7区の住居址1号の切斷とその下層の調査。この付近は取り付け道路が入るため現道路下も調査に入る。

3月は、DE6区～DE7区のアカホヤ火山灰下層に縄文時代早期包含層を検出。平面調査を開始。土器の細片が出土。最後の深掘りトレンチの実測作業。中ノ原遺跡の調査終了。

第3節 発掘調査の概要

昭和60年度の発掘調査は、台地西端部のA～I1～7区を行った。その結果、近世～中世、弥生時代中期、縄文時代晚期～前期の数時期の遺構・遺物が出土した。

近世～中世の遺構は、古道・溝状遺構・掘立柱建物跡等がある。古道は、F～G5区に南北方向に検出され、幅1.5mを測る比較的しっかりした道路跡である。おそらく、この時期のこの地域の幹線道と考えられる。そのほか断片的に溝状遺構が確認されている。農地整備や開畠のため途中が削平を受けているが、小道としての機能があるものと考えられる。掘立柱建物跡は、C5区・D5区・C6区にかけて検出された。略東西方向に2間×4間の掘立柱建物跡であるが、東西に延びる平行は南側は一つ飛の2間となっている。車庫状の特殊な柱間を持つ掘立柱建物跡であり注目される。

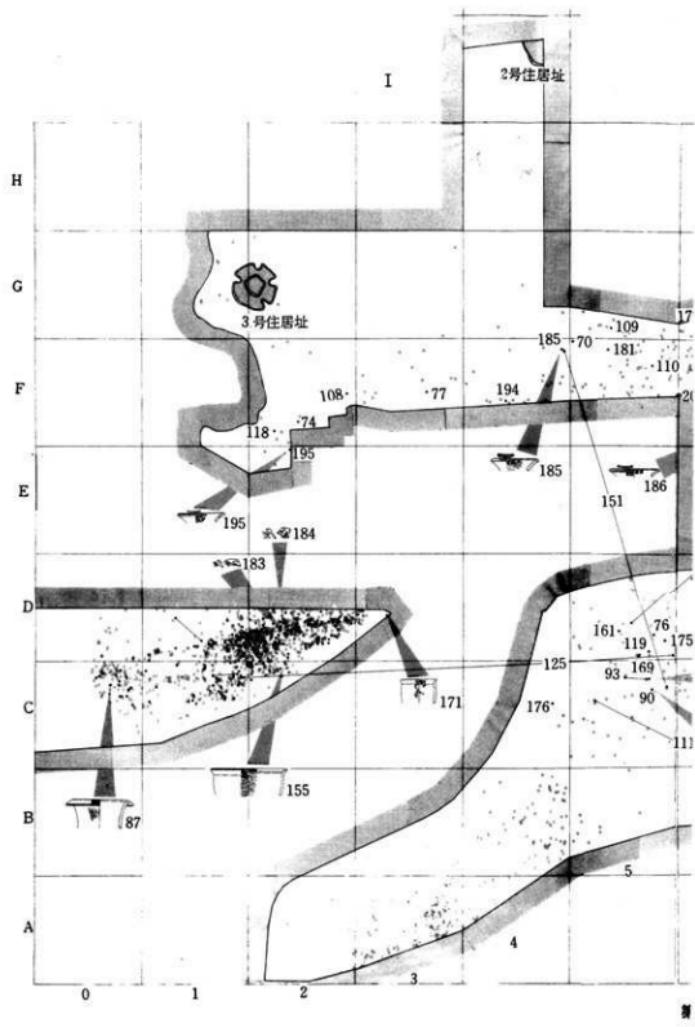
弥生時代の遺構は、竪穴住居址が3基検出された。緑地帯保存部分と現道によって削平されて全体像の把握は困難であるが、まとまりのある集落の存在が想定される。住居址の時期は、いずれも弥生時代中期から後期初頭の山ノ口式系の土器を伴なう。1号住居址はD7区に検出され、約5m×4.5mの方形プランを呈し東南隅に張り出しを付した形態のものである。中央部が一段低くなりその四隅に四本柱を持つタイプである。2号住居址は、14区に住居址の4分の1が検出され、主体は用地外に延びるものである。住居址の形態は不明である。3号住居址は、G1区・G2区に検出され直径約4.5mの円形を基調とする住居址である。住居址内には四ヶ所の花弁状の間仕切りを持ち、中央が一段低くなるタイプの住居址である。CD1～3区は凹地となり、この部分に弥生土器を大量に含む包含層が形成されている。

縄文時代の遺構としては、竪穴住居址と集石遺構が検出された。住居址は、直径2.7mの円形を呈するタイプでF2区に検出された。住居址は縄文時代晚期前半期の土器を伴なう時期である。集石遺構は、3基検出された。1号集石はA2区に、2号集石はA4区に、3号集石は

F 2 区に、いずれも台地の先端近くに検出されている。確実な年代は不明であるが、1号集石・2号集石の近辺には縄文時代前期の轟式土器系統の条痕文土器が出土しており、ほぼこの時期に属することが想定される。

昭和61年度の発掘調査は、昭和60年度の残部と第7地点にかけての確認調査と本調査を実施した。E～G 6 区付近から A B 29区にかけてが本調査であり、A B 30区から A B 44区にかけては確認調査である。その結果、中世や弥生時代中期終末～後期初、縄文時代晩期～前期及び早期の遺構・遺物が出土した。中世では、E F 6 区付近に 2 棟の掘立柱建物跡が検出された。建物跡は重複しており、1 棟の建物の柱穴には土師器の环の完形品が 2 個埋納された注目すべき事実も得られた。そのほか、弥生時代中期の遺物包含層及び縄文時代後期を中心として晩期から前期の遺物包含層を調査しきらに、D E 6 区付近と D E 18区付近には、X 層中から縄文時代早期の土器片の検出もあった。

なお、縄文時代については、鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(48)「中ノ原遺跡(Ⅰ)」において報告した。



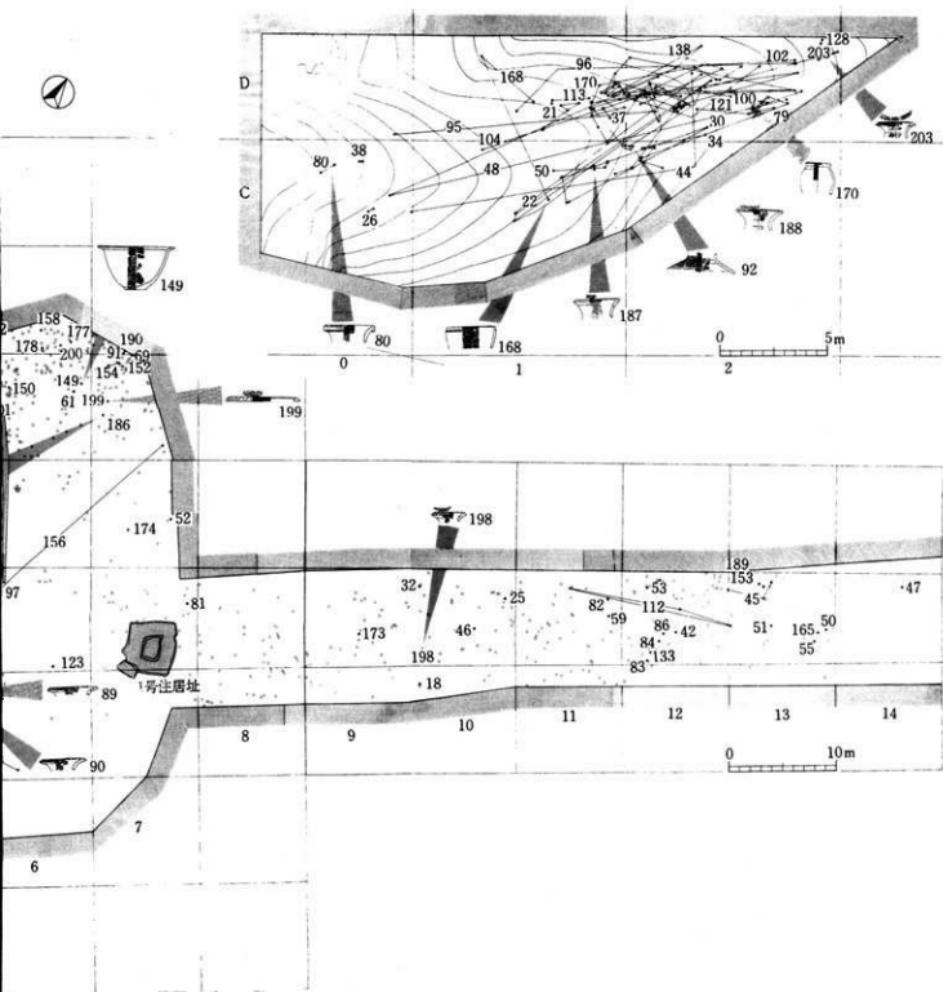


図 III層構造配置図及び遺物分布図

第Ⅲ章 弥生時代の調査

第1節 調査の概要

今回の発掘調査においては、緑地帯保存部分や農道によって削平された部分が多くて弥生時代の遺跡の全体像を把握することは困難ではあった。しかし、遺跡の分布や遺構の配置から、遺跡は広範囲におよぶことが想定される。

弥生時代の遺構は、豊穴住居址が3基検出された。住居址は、いずれもⅣ層からⅧ層を基盤に構築されている。豊穴住居址の時期は、いずれも弥生時代中期から後期初頭に位置付けられる山ノ口式系土器を伴う時期に該当している。3基の住居址は、それぞれが約30m～60m離れて検出されている。しかも、1号住居址は、方形プランを呈し東南隅に張り出し部を持つタイプで、3号住居址は花弁型の間仕切りを備えた円形住居址であり、形態上の違いも大きい（2号住居址は用地外へ延びるため形態は不明である）。

C～D 1～3区付近は遺跡の所在する台地の傾斜地にあたり、この傾斜地には大量に弥生土器を含む遺物包含層が形成されている。

平坦地の包含層には、出土遺物は以外と少ない。第2図は、F 6区に出土した唯一完形の弥生土器である。土器は若干斜めに検出されたが、原位置をとどめていると考えられる。しかし、その性格は不明であった。

弥生時代の遺跡の範囲は、遺物の分布や遺構の広がりからこの西側の傾斜地付近からD 9区付近までに想定される。

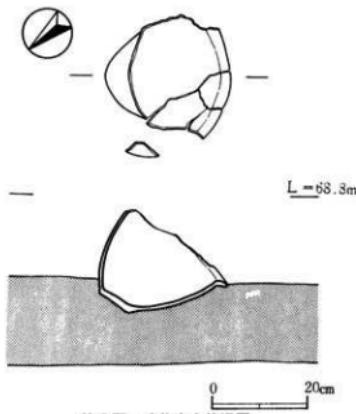
第2節 遺構

1 豊穴住居址

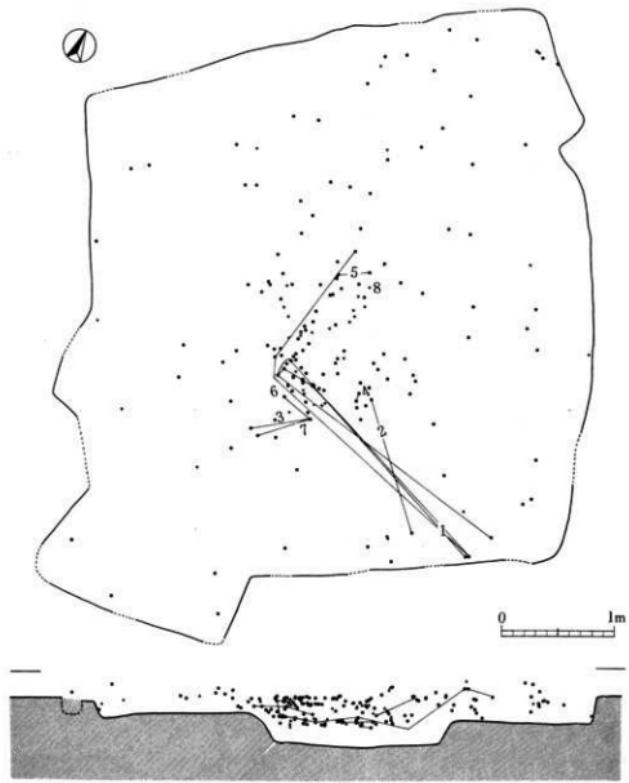
中ノ原遺跡のⅨ層検出の遺構は、豊穴住居址が3基発見された以外には他の遺構は検出されていない。1号住居址はD 7区に、2号住居址は14区に、3号住居址はG 1区・G 2区間にそれぞれ検出された。

(1) 1号住居址（第3図～第7図）

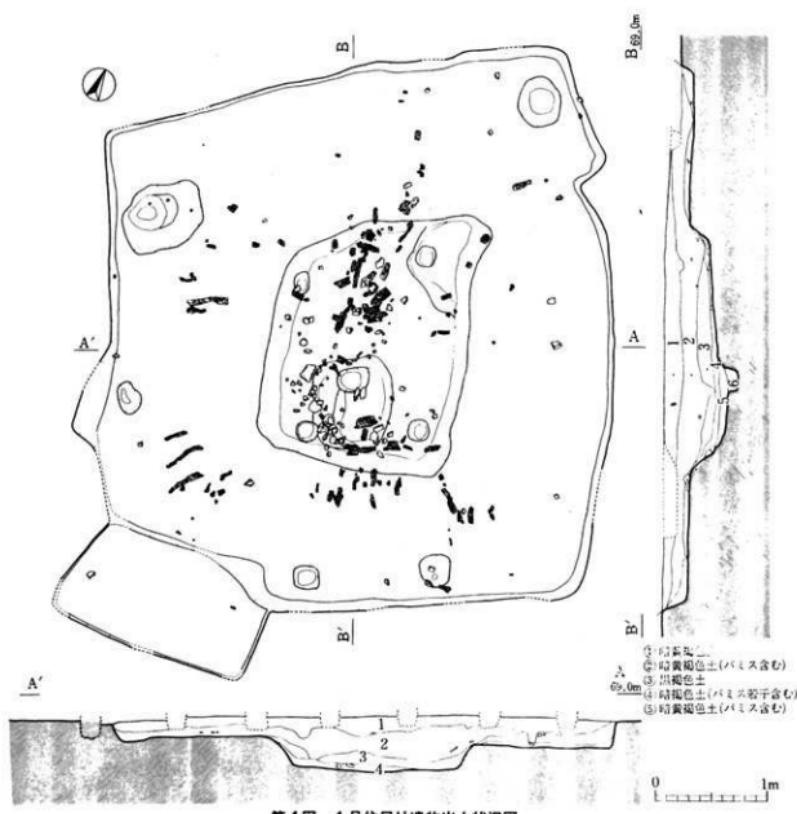
1号住居址は、B 7区に検出された。住居址はⅣ層からⅧ層の火山灰に掘り込まれ、住居址の床面はⅧ層下部を利用している。ほぼ



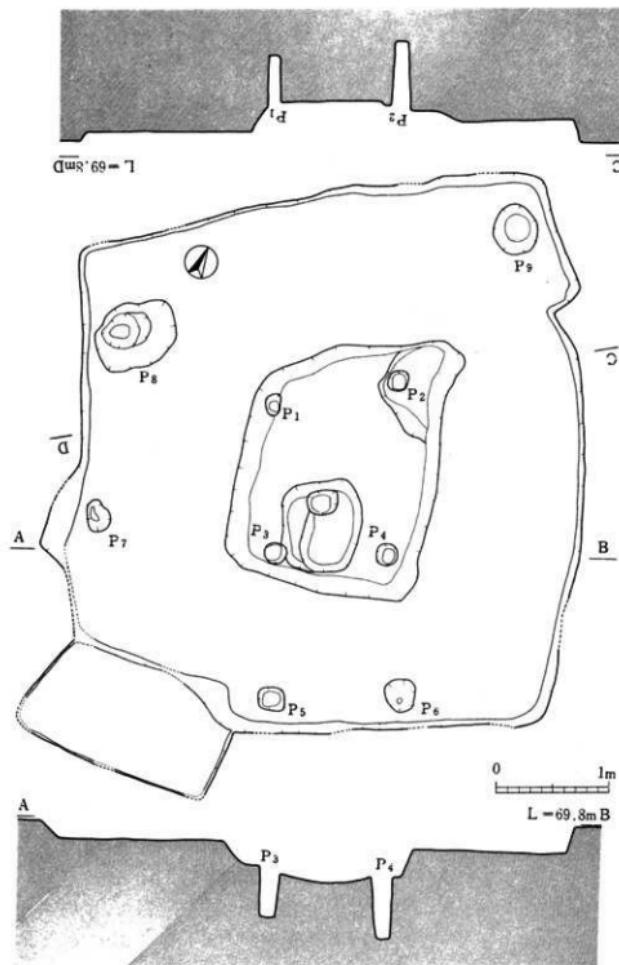
第2図 遺物出土状況図



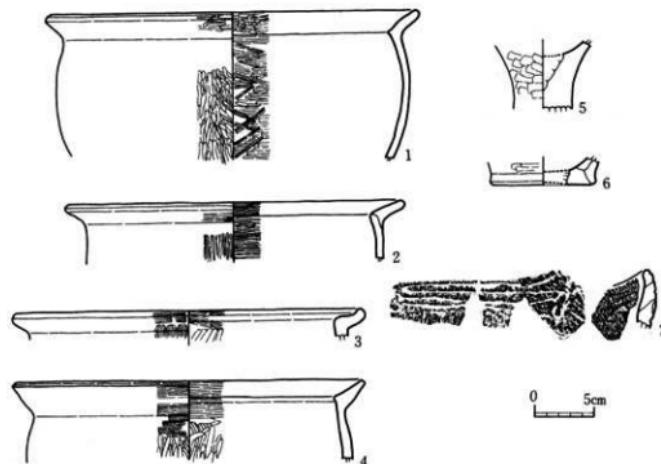
第3図 1号住居址遺物分布図



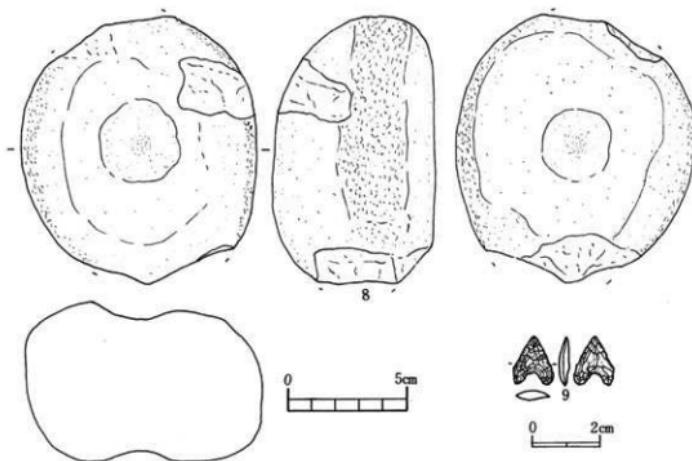
第4図 1号住居址遺物出土状況図



第5図 1号住居址実測図



第6図 1号住居址出土遺物実測図（1）



第7図 1号住居址出土遺物実測図（2）

方形プランを呈する住居址で、検出面での平面規模は、東西 4.5m × 約 5.0m を測る。検出面から床面の深さは、約30cmを測る。床面の中央部は、一段深く掘り下げられて掘りコタツ状になる。床面からは、さらに約30cm深くなる。この中央の床面の一段低い面の四隅に、4個の柱穴が検出された。住居址の主柱と考えられる。柱穴の直径は20~15cmと小さいが、深さは40~50cmを測る。柱間は、東西は約1.05m、南北は1.55mを測る。なお、南西隅に、幅 1.0m × 長さ 1.8m の張り出し部を備えている。側壁付近に浅いピットが検出されるが、柱穴の可能性は少ない。また、北西隅に径70cmで深さ80cmを測る大形のピットが検出されたが、埋土が異なり住居址に付属するものかは不明である。

住居址内には出土遺物は少ないが、炭化木が中央部に集中して検出された。削平のためか、炭化木は側壁付近にはみられない。さらに、この炭化木は、中央部に向かって放射状に検出されており、その形状から焼失家屋と考えられる。

住居址内からは、総数153点の遺物が出土している。しかし、土器片はいずれも細片で形態の明らかなものは少ない。1~5は、弥生土器である。1と4は、口縁部は「く」字に外反し脣部は丸味をもって張り出した鉢状の器形を呈する。ハラミがき整形の堅模な仕上げがみられる。2・3は、斐庭土器の口縁部である。5は、斐庭土器の脚部である。6は、縄文晚期の底部で、7は後期の口縁部片である。縄文期のものが混入したのであろう。

石器は、2点出土した。8は石鎌で、表面は細かな二次的剝離面でおおわれ、裏面は比較的大きな剝離面からなる。えぐりが深く、すびまりの全形を呈している。本遺跡では1号住居址の周辺の下層は縄文期の包含層がみられるところから、縄文期の混入と考えられる。9は、凹石である。表面がやや滑らかで、周辺部にあらい平坦面をもつ円錐であり、表面に大きなくぼみを有する。

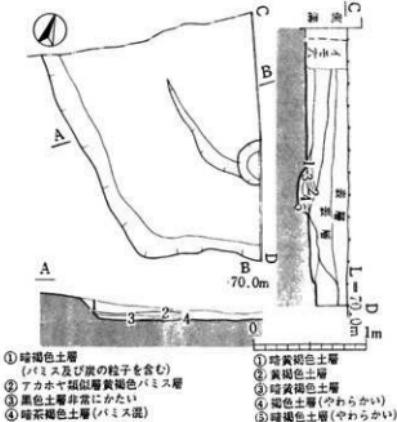
(2) 2号住居址 (第8図)

2号住居址は、14区に所在する。住居址のコーナー部分がほぼ4分の1程度検出されたもので、主体は用地外に延びる。張り床面らしき状態とピットが検出されたが、住居址の形態はほとんど不明である。出土遺物は5点と少なく、形態の判明するものはない。

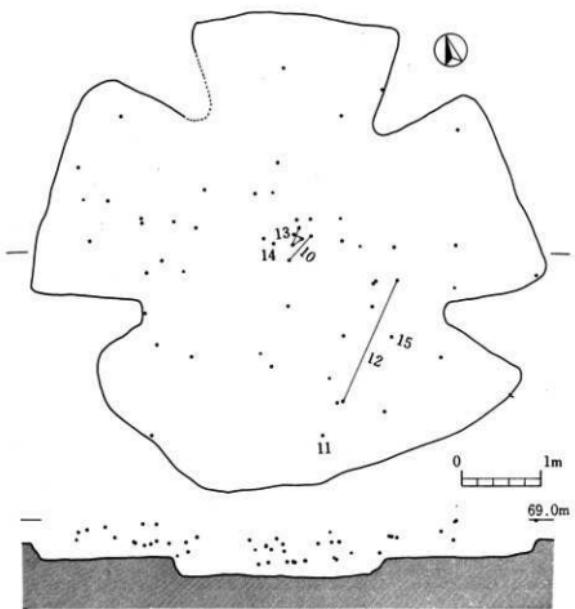
(3) 3号住居址

(第9図~第12図)

3号住居址は、G1区とG2区間に検出された。住居址は、Ⅴ層からⅡ層



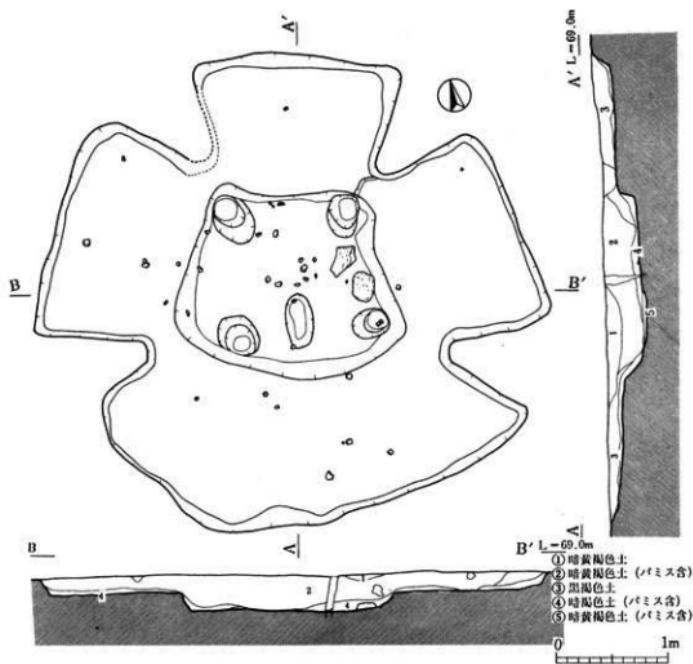
第8図 2号住居址実測図



第9図 3号住居址遺物分布図

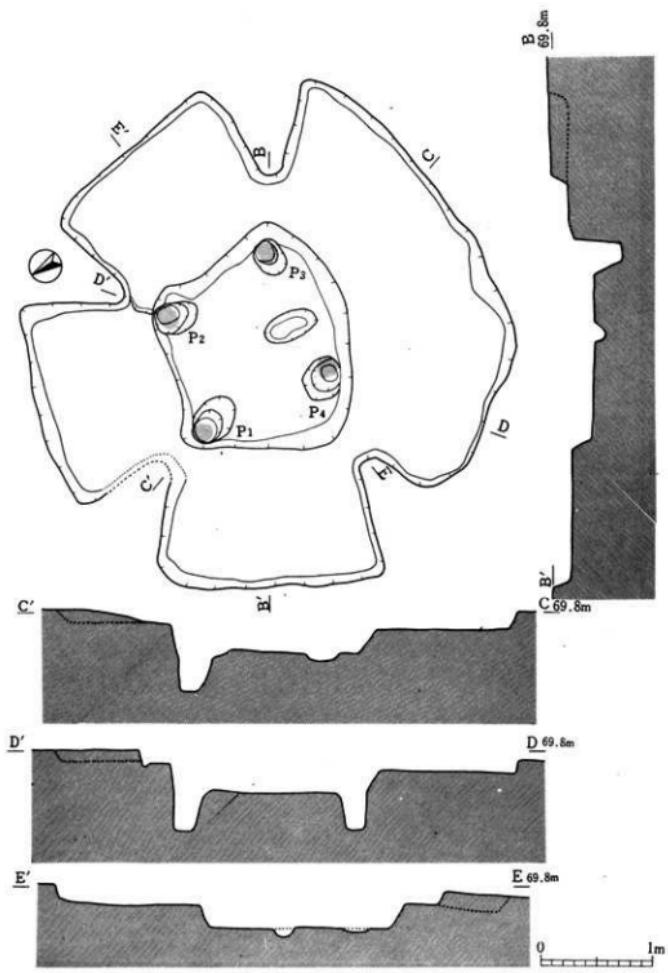
の火山灰に掘り込まれ、床面は瓦層下面に位置している。住居址は、4つの間仕切りをもつついわゆる花弁形の平面プランを呈す。住居址内部に飛び出す間仕切り部以外の周壁は、直径約4.5mの円形プランを基調としている。検出面から床面の深さは浅く、約20cmを測る。住居址の中央部は、1号住居址同様に掘りゴタツ状に方形に一段深くつくる。住居址の主柱は、この方形のほぼ四隅に位置している。柱穴は、中央に飛び出す間仕切りに対応している。柱間は約110cmで、ほぼ正方形に配置している。

住居址内からは、総数36点の遺物が出土している。しかし、土器片はいずれも細片で形態の明らかなものは少ない。10は、口縁部に凹線文を施した土器である。細片のため器形は定かではないが、壺形土器では外反を呈する。11・13は、縄文晩期の土器である。11は屈曲をもつ胴部片である。12は、口縁部が肥厚し外反する。13は胴部の下半部の破片で、これも晩期の可能

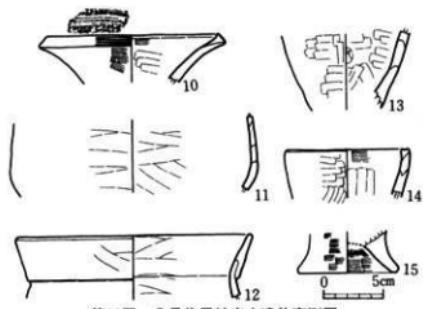


第10図 3号住居址遺物出土状況図

性が高い。縄文晩期については、住居址周辺から住居址を始め多数の遺物が出土しており、住居址埋土に混在したことが考えられる。14は、口縁部片で、鉢状の器形を呈する。口唇部は平坦におさめ、若干凹面をつくる。15は、らっぽ状を呈する底部片である。



第11図 3号住居址実測図



第12図 3号住居址出土遺物実測図

第3節 出土遺物

中ノ原遺跡の弥生時代の出土遺物は、CD1・2区に集中して発見され、弥生期の純粹な包含層はこの区付近だけである。住居址の検出される平坦地では、弥生時代の包含層が純粹に形成される部分は少なく、縄文時代晚期あるいは後期の包含層と重複する部分が多い。

出土遺物は、土器がほとんどである。石器は、凹石や敲石など、弥生期にもみられるものについては時期の判別が難しく縄文期に包括して既に説明した(第4分冊)。磨製石器など明らかに弥生期に該当する器種は出土していない。

1 土器

土器は、大きく壺形土器、壺形土器、鉢形土器、特殊土器に分けられる。

1) 壺形土器 (第13図～第15図-16～79)

壺形土器は、大型の壺と一般的な壺形土器に分かれる。大壺は、器形が一般的に大きく口縁部直下に太い突帯を一条巡らす。そして、底部は平底を呈する。一般的な壺は、口径が30cm前後が普通で、高さも30cm程度のものである。肩部から頸部近くには数条の貼付突帯文を巡らせる。底部は、充実した脚台である。両者は、形態的には大きく異なっている。

16～18は、大型の壺に属す。16は、口径47cmを測る大型の壺形土器である。口縁部は直線的に大きく「く」字状に外反し、口縁部直下の頸部付近には台形状に大きく拡張した貼付突帯を巡らせる。突帯文の端部平坦面には、凹線文状の凹みをつける。外面は、口縁部と貼付突帯文に横位の丁寧な刷毛ナデ整形が施され、それ以外はヘラ磨き状の整形がみられる。

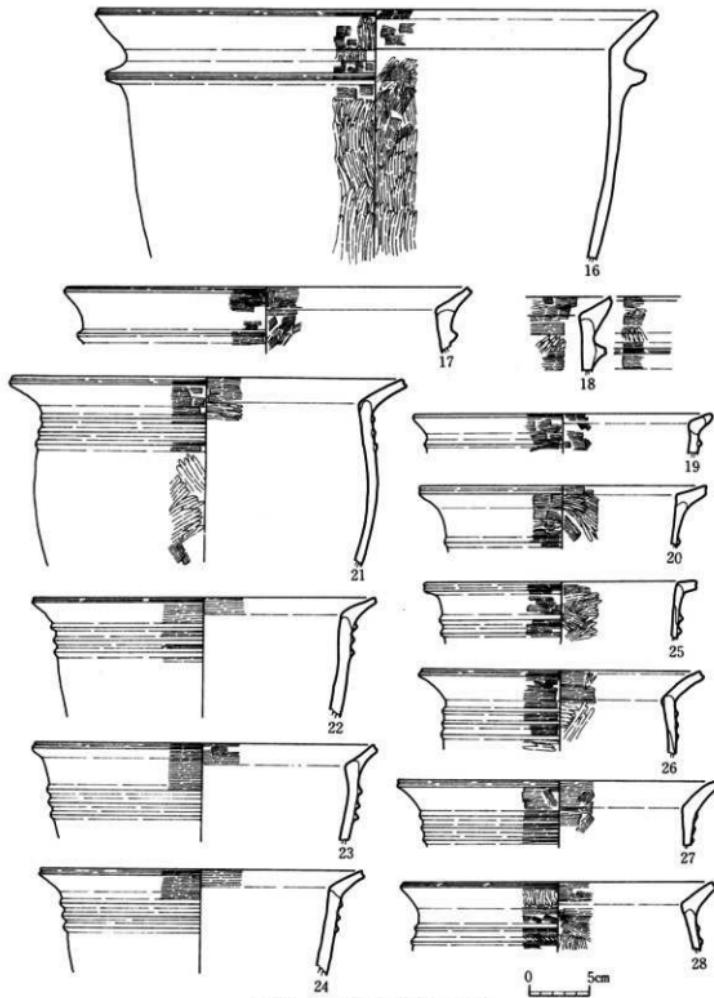
19～79は、一般的な壺形土器である。21～41は、壺形土器の口縁部から頸部付近である。ほとんどが「く」字状に外反するタイプであるが、端部には細かなバリエーションが多い。

21は、口径33.4cmを測る口縁部である。口縁部は大きく「く」字状に外反し、口縁内面にはシャープな稜をつくる。口縁端部の平坦面には、凹線文状の凹みをつける。口縁直下で口縁部が外反してできる屈曲部(頸部)から下には、三条の突帯文を巡らせる。この貼付突帯文は、この頸部直下から巡らせるもの(19・21～24・26・30・35など)と、頸部の直下に少し隙間を置いてから突帯文を巡らせるもの(20・29・31・32など)がある。

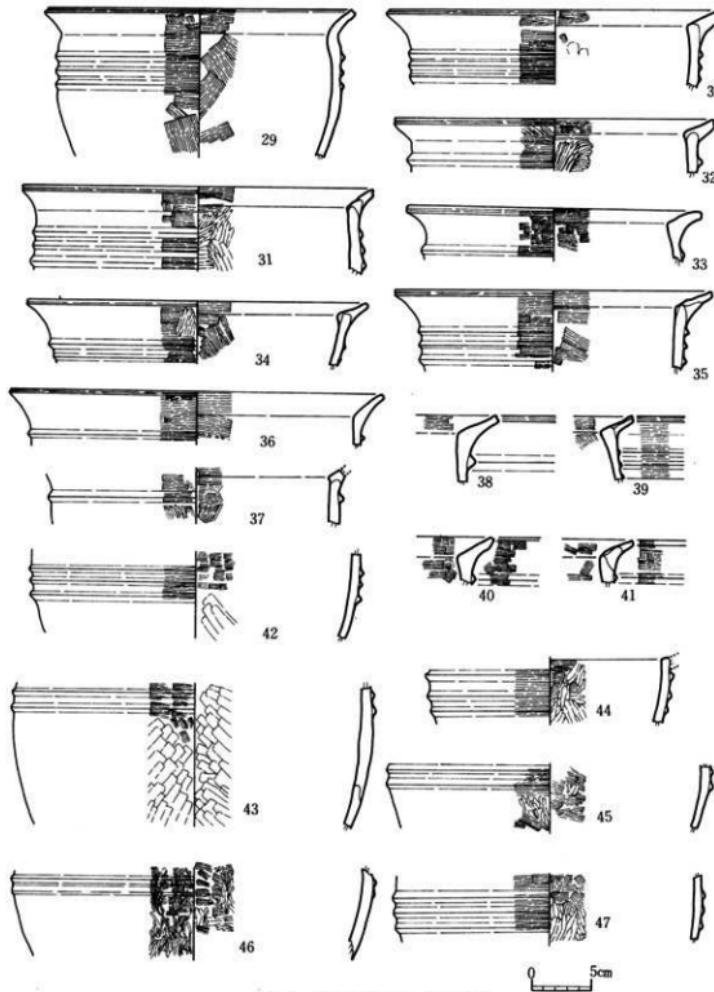
頸部は、球状に僅かに膨らむのが一般的であるが、24のように直線的なものもある。口縁部付近と貼付突帯文付近は、横位の丁寧な刷毛ナデ状の整形で仕上げられるが、そのほかの部分は刷手目が施される。28のように頸部下半では、ヘラ磨き状の整形で仕上げるものもある。

54～79は、壺形土器の底部である。壺形土器の底部は、裾部が若干広がり、底面が充実した脚台である。底部裾部の端部は、面取りがおこなわれ、その上に凹線状の凹みが施される。しかし、64・65・69・70のように面取りをおこなわず丸味をもって仕上げるものもある。

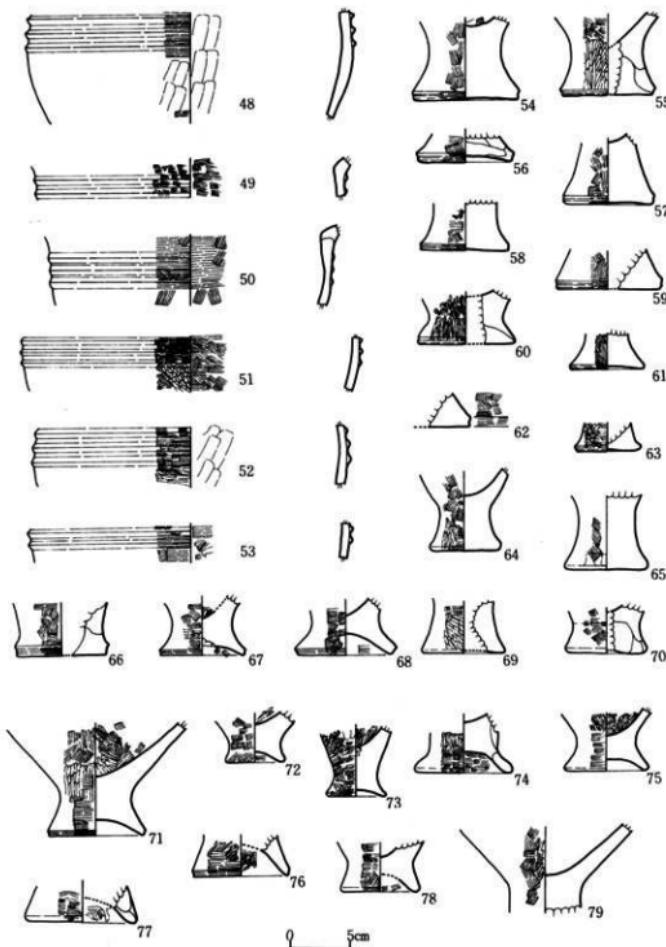
一般的には、底面は平坦な平底を呈する。しかし、56・57・61・67のように、底面が上げ底



第13図 Ⅲ層出土遺物実測図（1）



第14図 Ⅲ層出土遺物実測図（2）



第15図 Ⅲ層出土遺物実測図（3）

状にわずかに凹面をつくるものもある。

68・71～78は、脚部がラッパ状に大きく上げ底を呈するタイプである。71・76のように、脚の裾部が壺形土器の脚部と同様な仕上げが施されるが、底面は平坦ではなくラッパ状に上げ底になるものもある。68・71～78などは細片で器形が不明な点が多いが、胴部から口縁部の器形は壺形土器ではなく、鉢形土器などの別な器形になる可能性もある。

2) 壺形土器 (第16図～第18図-80～148)

壺形土器は、口縁部の形態に細かなバリエーションが多くみられる。口縁部には、大きく次の三種類があり、さらに小型の壺形土器がある。

- ① 口縁部が直線的に外反して口唇部側面直下に台形状の突帯を貼付して巡らせて口縁の拡張部とするタイプ (80～85)

口径は11cm～18cmと小さく、比較的短頸の口縁部をつくる。口唇部側面直下に突帯を巡らし口縁部を幅広くしており、強固な口縁部をつくる。84・85は同様な口縁部のつくりがみられるが、口縁部の器形は若干異なる。壺形土器以外の器種が考えられる。86も同様な突帯の付け方がみられるが、頸部から口縁部の立ち上がりが異なる。

- ② 口縁部端部が逆「L」字状で若干垂れ下がり気味に外反するタイプ (87・88)

口縁端部は幅広く垂れ下がる華麗な口縁部のつくりで、整形手法も丁寧である。

- ③ 口縁部は大きく外反し口縁端部下面に粘土板を貼付け口唇部を二重にした二又状口縁のタイプ (89・90)

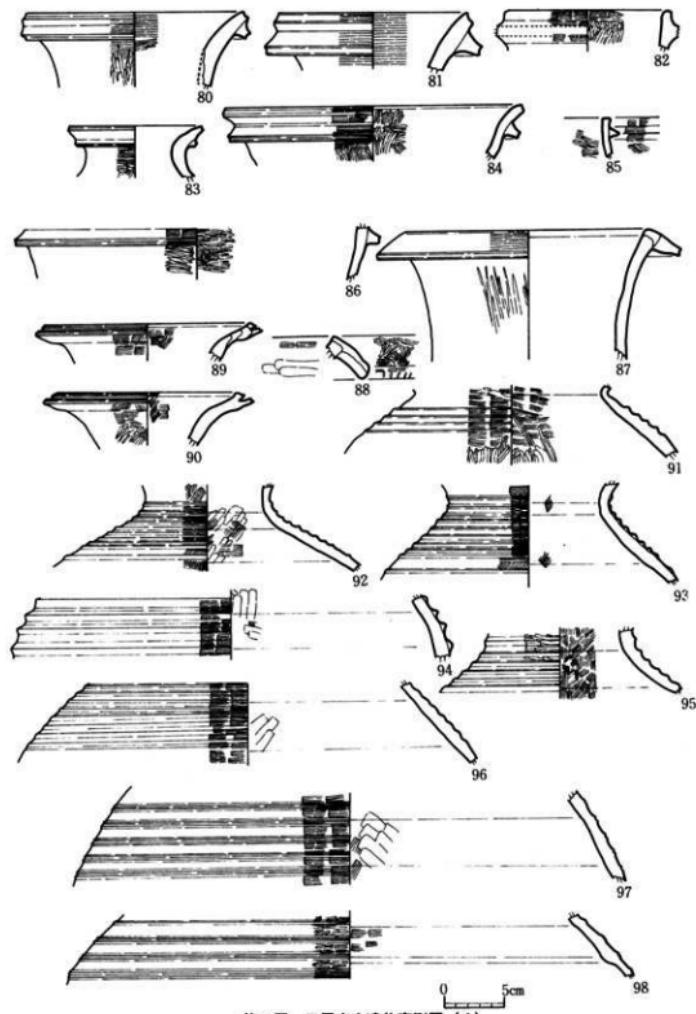
口唇部を二重にした二又状口縁の複雑な口縁部をつくる。非常に丁寧な整形手法で、特殊な壺形土器の可能性も考えられる。

- ④ 細片のため定かでないが、口縁部が短く外反するだけの単調なつくりで、比較的口径の小さい小型の壺が想定されるタイプ (105～123)

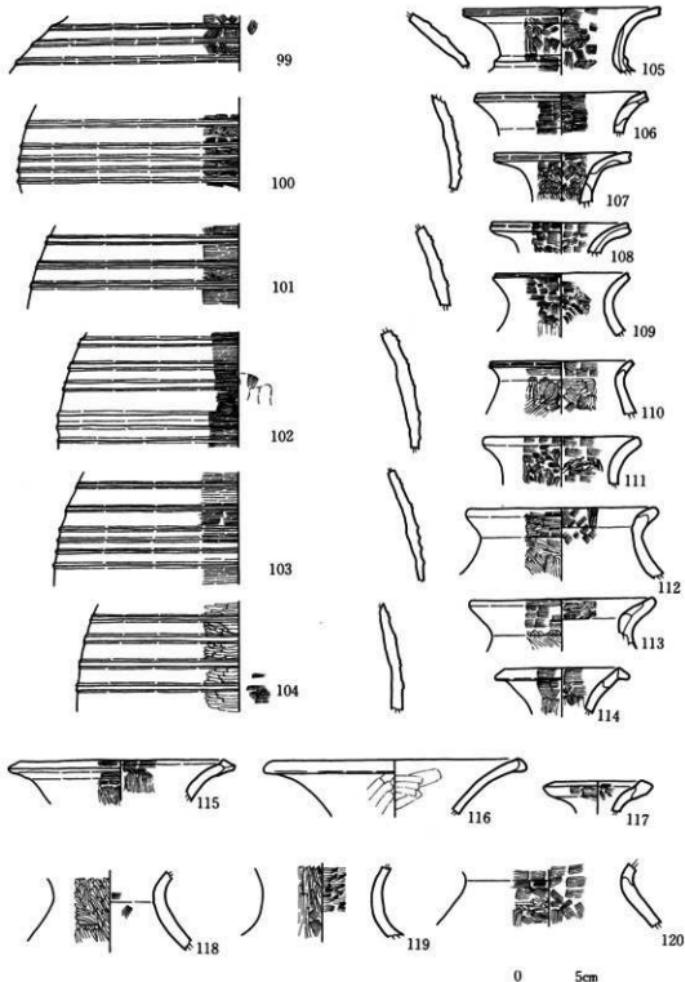
105のように、口唇部平坦面に凹線状の凹みをつけ頸部に突帯を巡らすものもある。

92～104は、頸部から肩部・胴部である。91～93のように、頸部から肩部にかけて多条の三角突帯を密に貼付するものもある。97・104のように口唇状突帯を巡らせるものもある。これららの整形は非常に丁寧で、焼成は堅緻である。

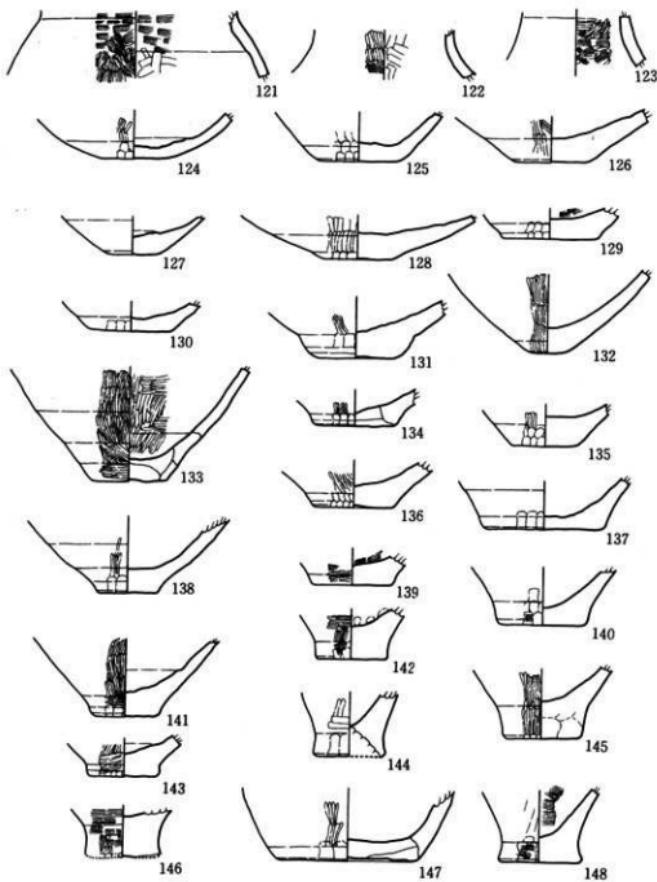
125・148は、壺形土器の底部である。底部は平底を呈するが、底部の形態にもバリエーションが多くみられる。小さい平底の底部から大きく外反して胴部に立ち上がるタイプ(124～130)や底部の円盤の上面から胴部へ立ち上がるタイプ(131)や底部側面が若干張り出すタイプ(144～148)などがある。



第16図 Ⅲ層出土遺物実測図(4)



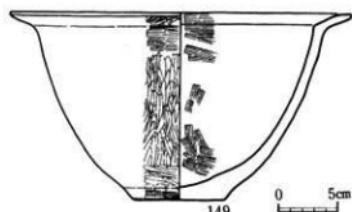
第17図 Ⅲ層出土遺物実測図（5）



第18図 III層出土遺物実測図（6）

3) 鉢形土器 (第19図～第21図—149～172)

鉢形土器は、149のように大形のものから169のように小形のものまである。また器形および口縁部のつくりも様々である。149は、唯一完形で出土した變形土器である。口縁部は「く」字状に大きく外反し、底部は平底を呈する。口径は28.4cmで、高さは15.8cmを測る。口径が広く高さの低い、いわゆるヘルメット状の器形である。口縁部付近は丁寧な横位の刷毛ナデ整形が



第19図 III層出土遺物実測図 (7)

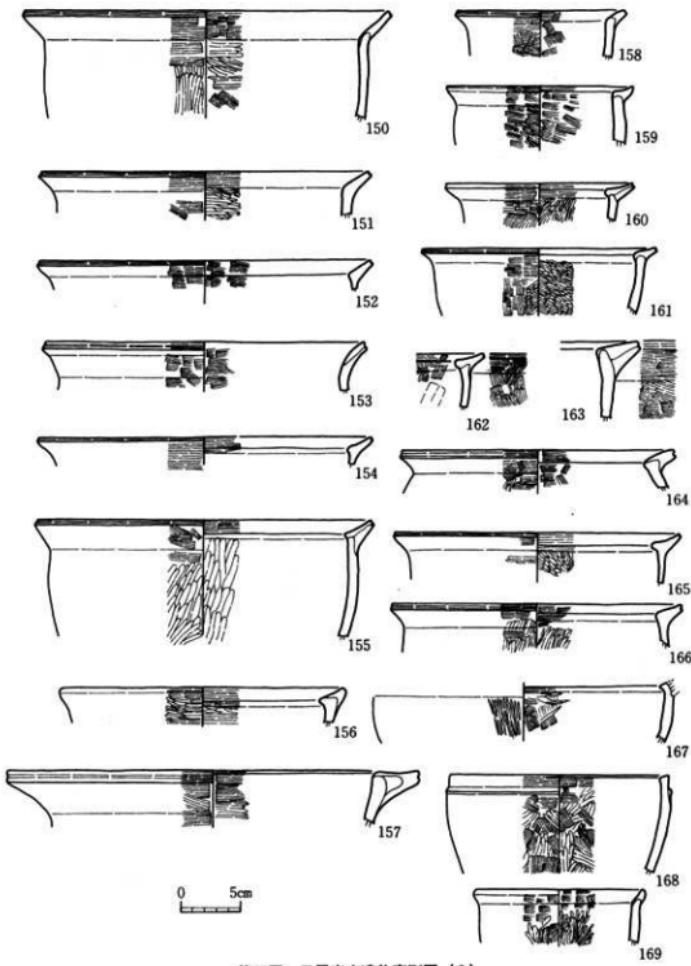
施され、胴部から底部へはヘラ磨きの整形が看取される。149のように、變形土器と同様に口縁部を「く」字状に外反するタイプが一般的に多い。このタイプの鉢形土器の場合は、頭部や胴部は突帯文などは貼付されず、無文のままの場合が多い。168は、口縁部は内湾気味に直行した口縁部を呈し、口縁外面に一条の突帯文を巡らす特殊なタイプである。また、170は、胴部は球状に張り、頭部で締まり、口縁部はわずかに外反する。広口の小臺の可能性も考えられる。

4) 特殊土器 (第21図—173～203)

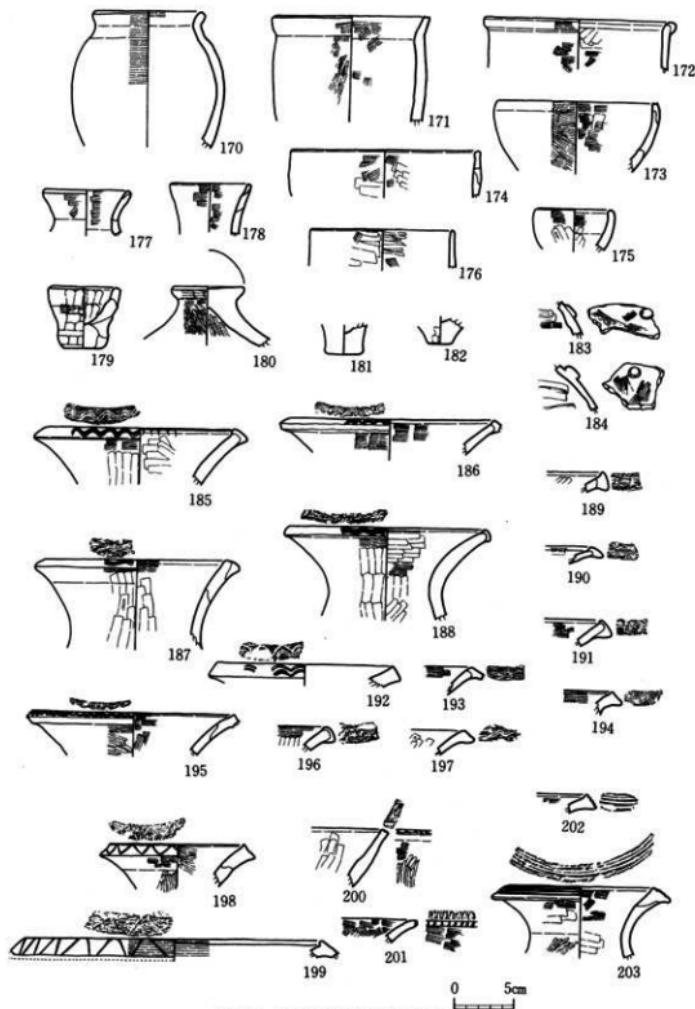
特殊な器形や特殊な紋様をもつものをここに一括した。

173・175は球状に丸味をもって張った胴部から口縁部では若干内湾しておさめる。ワン状の器形を呈するものである。174・176は広口の直行口縁で、177・178は狭口の直行口縁である。179は、口径6cmで高さ5.2cmの小形の手捏土器である。180は、約6cmのつまみを備えた大形の蓋形土器である。181・182は非常に小形の底部でミニチュア土器の底部と考えられる。183・184は、肩部付近と考えられる部分に、特徴的な円形の浮文を貼付した破片である。

185～203は、口縁口唇部の平坦部に特殊な紋様を施したものである。いずれも胎土はきめ細かく、丁寧な整形が看取される。細片のため、器形は定かでないものも存在する。185～197は、壺形土器の口縁口唇部に櫛描きの波状文を施した類である。櫛描波状文は、比較的狭い口唇平坦部に丁寧に描かれている。198・199は、壺形土器の口縁口唇部に沈線で据文を描くものである。200・201は、外反する口縁部の薄い口唇部に刻目を施すもので、202・203は、外反した壺形土器の口縁部の若干拡張した平坦な口唇部に丁寧な凹線文を施す。



第20図 Ⅲ層出土遺物実測図 (8)



第21図 Ⅲ層出土遺物実測図(9)

第1表 遺跡出土遺物一覧表

番号	種別	標高	区・層	基標	部位	法量(径・高・幅)	地 質	調 整	焼成	色 調	備 考	
1	陶	68.49	地	D-7	住1	林 1層部 11 径 30.6	石英・長石 質砂	約±2.0	良好	青磁系褐色		
2	+	68.51	地	*	*	費 11 径 27.8	*	*	*	青磁系褐色		
3	+	68.77	*	*	*	費 11 径 28.6	*	約ハサードナダ ル	*	青磁系褐色		
4	+	68.39	地	*	*	林 11 径 28.9	*	約ハサードナダ ル	*	青磁系褐色		
5	+	68.44	地	*	*	費 底 部 基 4.8	*	約±2.0	普通	青磁系褐色	外側削落	
6	+	68.74	*	*	*	費 底 部 基 8.8	石英・長石 質砂	約ハサードナダ ル	良好	青磁系褐色		
7	鐵	68.65	*	*	*	1層部 費壁厚 0.7~1.3	石英・長石 質砂	*	*	青磁系褐色		
10	陶	68.48	地	住3	*	11 径 14.4	石英・長石 質砂	約±2.0	青磁系褐色	青磁系褐色	四瓣文	
11	+	68.70	*	*	*	1層部 費 21.0	石英・長石 質砂	約±2.0	青磁系褐色	青磁系褐色		
12	+	68.725	*	*	*	1層部 11 径 19.6	石英・長石 質砂	約±2.0	青磁系褐色	青磁系褐色	又々付着	
13	+	68.475	地	*	*	1層部 費 10.9	*	*	*	青磁系褐色		
14	+	68.475	*	*	*	1層部 11 径 9.2	石英・長石 質砂	約ハサードナダ ル	*	青磁系褐色		
15	+	67.79	*	*	*	底 部 基 8.6	石英・長石 質砂	約ハサードナダ ル	*	青磁系褐色		
16	+	64.16	地	C-D-2	II	1層部 11 径 47.0	石英・長石 質砂	約±2.0	青磁系褐色	青磁系褐色		
17	+	64.465	*	*	*	1層部 *	33.6	石英・長石 質砂	約±2.0	青磁系褐色		
18	+	70.26	C-10	*	*	費壁厚 1.1	石英・長石 質砂	約±2.0	青磁系褐色	青磁系褐色		
19	+	64.46	C-D-2	II	*	11 径 24.6	石英・長石 質砂	約±2.0	青磁系褐色	青磁系褐色		
20	+	64.85	*	II F	*	*	23.8	石英・長石 質砂	約±2.0	青磁系褐色		
21	+	63.575	地	D-1	*	1層部 *	33.4	石英・長石 質砂	*	青磁系褐色		
22	+	64.24	地	*	II	1層部 *	28.6	石英・長石 質砂	約±2.0	青磁系褐色		
23	+	68.54	C-1	II	*	*	28.4	石英・長石 質砂	約±2.0	青磁系褐色	内側削 落	
24	+	64.065	地	C-2	II	*	27.0	石英・長石 質砂	約±2.0	青磁系褐色		
25	+	70.21	D-10	II	*	*	22.0	*	青磁系褐色	又々付着		
26	+	62.695	地	C-0	II	*	*	23.2	*	青磁系褐色	又々付着	
27	+	64.07	C-D-2	*	*	*	26.8	石英・長石 質砂	約±2.0	青磁系褐色	青磁系褐色	
28	+	71.97	F-24	*	*	*	26.0	*	*	青磁系褐色		
29	+	64.145	地	C-D-2	*	1層部	25.4	石英・長石 質砂	約±2.0	青磁系褐色		
30	+	63.82	地	C-1	II F	1層部	26.4	石英・長石 質砂	約±2.0	青磁系褐色		
31	+	69.105	*	*	*	*	29.2	石英・長石 質砂	約±2.0	青磁系褐色		
32	+	70.01	D-10	*	*	*	26.6	*	*	青磁系褐色		
33	+	64.73	C-D-2	II F	*	*	24.5	石英・長石 質砂	約±2.0	青磁系褐色		
34	+	64.48	地	*	*	*	28.4	*	約±2.0	青磁系褐色		
35	+	63.735	D-1	II	*	*	26.4	石英・長石 質砂	約±2.0	青磁系褐色		
36	+	64.09	C-D-2	*	*	*	31.0	*	約±2.0	青磁系褐色		
37	+	63.85	地	C-D-1	*	1層部 費 底 部	24.4	石英・長石 質砂	約±2.0	青磁系褐色		
38	+	62.65	地	C-0	*	1層部 費壁厚 0.7~1.5	石英・長石 質砂	約±2.0	青磁系褐色	内側削 落		
39	+	64.19	C-D-2	*	*	*	0.8~1.5	石英・長石 質砂	*	青磁系褐色	内側削 落	
40	+	64.185	*	II F	*	*	0.8~1.5	*	青磁系褐色	内側削 落		
41	+	64.185	*	II	*	*	0.4~1.5	*	青磁系褐色	内側削 落		
42	+	70.6	D-12	II	*	1層部 費 27.6	石英・長石 質砂	*	青磁系褐色	内側削 落		
43	+	63.915	C-1	II F	*	*	30.0	*	*	青磁系褐色		

第2表 遺跡出土遺物一覧表

番号	類別	標高	I.C. -	解説	部品	法規(性・高・幅)	地 上	調 整	機成	色 調	備考
44	舟	69.20	C-1	II	■	斜 面	斜 面	20.2	石 英 長 板	白 色 無 光	好 好
45	*	70.565	他	D-12	II	*	*	27.0	石 英 長 板	白 色 無 光	好 好
46	*	70.15	D-10	II	*	*	30.4	石 英 長 板	白 色 無 光	好 好	
47	*	70.885	D-14	II	*	*	25.6	石 英 長 板	白 色 無 光	好 好	
48	*	62.81	他	C-1	II	*	*	27.4	石 英 長 板	白 色 無 光	好 好
49	*	64.685	C,D-2	III	*	*	26.6	石 英 長 板	白 色 無 光	好 好	
50	*	63.84	C-1	II	F	*	11種類 付 近	24.8	石 英 長 板	白 色 無 光	普通
51	*	70.78	D-13	II	*	時 期	時 期	26.4	石 英 長 板	白 色 無 光	好 好
52	*	67.94	E-7	II	*	*	26.8	石 英 長 板	白 色 無 光	好 好	
53	*	70.66	他	D-12	II	*	*	27.4	石 英 長 板	白 色 無 光	好 好
54	*		I,T	II	*	底 盤	底 盤	9.0	石 英 長 板	白 色 無 光	好 好
55	*	70.99	D-13	II	*	*	8.0	石 英 長 板	白 色 無 光	好 好	
56	*	64.47	C,D-2	III	*	*	8.0	石 英 長 板	白 色 無 光	好 好	
57	*	64.275	*	II	*	*	7.8	石 英 長 板	白 色 無 光	好 好	
58	*	70.885	D-13	II	*	*	7.4	石 英 長 板	白 色 無 光	好 好	
59	*	63.79	C-1	II	F	*	*	9.0	石 英 長 板	白 色 無 光	好 好
60	*	70.085	*	II	F	*	*	8.4	石 英 長 板	白 色 無 光	好 好
61	*	68.645	F-6	II	*	*	6.3	石 英 長 板	白 色 無 光	好 好	
62	*	70.845	D-12	II	*	*	7.4	石 英 長 板	白 色 無 光	好 好	
63	*	64.255	C,D-2	III	*	*	5.7	石 英 長 板	白 色 無 光	好 好	
64	*	*	C-2	II	F	*	*	6.0	石 英 長 板	白 色 無 光	好 好
65	*	62.84	C-0	II	*	*	6.8	石 英 長 板	白 色 無 光	好 好	
66	*	62.445	*	II	*	*	7.6	石 英 長 板	白 色 無 光	好 好	
67	*	64.175	C,D-2	III	*	*	7.2	石 英 長 板	白 色 無 光	好 好	
68	*	64.10	D-1	II	*	*	8.5	石 英 長 板	白 色 無 光	好 好	
69	*	69.87	F-7	II	*	*	7.0	石 英 長 板	白 色 無 光	好 好	
70	*	68.92	F-5	II	*	*	*	石 英 長 板	白 色 無 光	好 好	
71	*	63.755	C-1	II	F	*	*	8.2	石 英 長 板	白 色 無 光	好 好
72	*	64.19	C,D-2	III	*	*	5.0	石 英 長 板	白 色 無 光	好 好	
73	*	64.22	*	*	*	*	*	石 英 長 板	白 色 無 光	好 好	
74	*	64.08	C,D-1	*	*	*	8.2	石 英 長 板	白 色 無 光	好 好	
75	*	63.66	D-1	II	*	*	7.2	石 英 長 板	白 色 無 光	好 好	
76	*	68.47	D-5	II	*	*	8.0	石 英 長 板	白 色 無 光	好 好	
77	*	68.8	F-3	II	*	*	9.4	石 英 長 板	白 色 無 光	好 好	
78	*	70.995	H	D-13	II	*	*	6.6	石 英 長 板	白 色 無 光	好 好
79	*	64.81	他	C,D-2	II	F	*	6.0	石 英 長 板	白 色 無 光	好 好
80	*	62.145	他	C-0	II	金 屬	11種類	18.8	石 英 長 板	白 色 無 光	好 好
81	*	68.795	D-7	II	*	*	16.0	石 英 長 板	白 色 無 光	好 好	
82	*	70.34	D-11	II	*	*	13.0	石 英 長 板	白 色 無 光	好 好	
83	*	70.655	他	D-12	II	*	*	10.8	石 英 長 板	白 色 無 光	好 好
84	*	70.67	*	*	*	*	24.6	石 英 長 板	白 色 無 光	好 好	

第3表 遺跡出土遺物一覧表

番号	類別	標高	区	層	断面	部位	法量(径・高・厚)	施土	調	織成	色	圖	備考	
85	骨	70.245	C-10	II	直	LII種部	直径 0.6	石 斧・長 石 直削面・砂粒	内斜 内斜	良好	黎明系褐色			
86	+	70.59	D-12	II	-	-	口 径 30.7	小 幅	内斜 内斜	*	黎明系褐色		二叉口縫	
87	+	62.33	C-0	II	-	-	19.8	石 斧・長 石 直削面・砂粒	内斜 内斜	*	黎明系褐色			
88	+	F-3 イモ穴	-	-	-	厚壁厚 1.3	-	-	*	*	黎明系褐色			
89	+	68.625	C-5	II	上	-	口 径 17.2	石 斧・長 石 直削面・砂粒	内斜 内斜	*	黎明系褐色			
90	+	68.63	-	II	-	-	15.0	*	内斜 内斜	*	黎明系褐色		内部若干 内斜	
91	+	69.79	G-7	II	-	直削部	直 壁 14.6	*	内斜 内斜	*	黎明系褐色			
92	+	64.07	他	C-D-2	II	-	+	10.6	-	*	黎明系褐色			
93	+	68.605	他	C-5	II	上	+	13.9	*	内斜 内斜	*	黎明系褐色		
94	+	68.52	他	F-2	II	上	解 断	36.4	*	*	黎明系褐色			
95	+	62.73	他	C-1	II	-	+	20.4	*	内斜 内斜	*	黎明系褐色		
96	+	68.94	他	C-D-2	II	-	+	38.4	石 斧・長 石 直削面・小槽	内斜 内斜	*	黎明系褐色		
97	+	68.36	D-6	II	上	-	+	45.0	石 斧・長 石 直削面・砂粒	内斜 内斜	*	黎明系褐色		
98	+	64.25	C-D-2	II	-	-	47.2	*	内斜 内斜	*	黎明系褐色			
99	+	64.195	C-D-2	II	下	-	+	38.0	石 斧・長 石 直 壁	内斜 内斜	*	黎明系褐色～所産褐色		
100	+	64.055	他	C-D-2	II	-	+	37.0	*	内斜 内斜	*	黎明系褐色		内部剥落
101	+	69.39	D-1	II	F	-	+	35.4	*	内斜 内斜	*	黎明系褐色		
102	+	64.49	他	C-D-2	II	-	+	30.4	*	内斜 内斜	*	黎明系褐色		
103	+	64.135	他	-	-	-	+	31.0	*	内斜 内斜	普通	黎明系褐色～暗系褐色	内部剥落	
104	+	64.1	他	C-1	II	-	+	27.4	*	内斜 内斜	*	黎明系褐色		
105	+	64.14	C-D-2	II	-	直削部	II 壁 16.4	*	内斜 内斜	内斜 内斜	*	黎明系褐色～暗系褐色		
106	+	64.08	C-2	II	F	-	+	13.8	*	内斜 内斜	*	黎明系褐色		
107	+	64.42	-	II	-	-	+	11.4	*	内斜 内斜	*	黎明系褐色		
108	+	68.825	F-2	II	F	-	+	11.0	*	内斜 内斜	*	黎明系褐色～暗系褐色		
109	+	69.00	G-5	II	-	-	+	+	石 斧・長 石 直削面	内斜 内斜	*	黎明系褐色～暗系褐色		暗文
110	+	68.735	F-5	II	-	-	+	11.9	*	内斜 内斜	*	黎明系褐色		
111	+	68.96	C-5	II	上	-	+	12.6	*	内斜 内斜	*	黎明系褐色		
112	+	70.58	D-12	II	-	-	+	15.4	石 斧・長 石 直削面	内斜 内斜	*	黎明系褐色		
113	+	68.84	他	C-1	II	-	+	15.2	石 斧・長 石 直削面	内斜 内斜	*	黎明系褐色		
114	+	-	他	D-2	II	-	+	9.5	石 斧・長 石 直削面	内斜 内斜	*	黎明系褐色		
115	+	64.46	C-D-2	II	-	-	+	17.2	石 斧・長 石 直削面・小槽	内斜 内斜	*	黎明系褐色		
116	+	64.82	-	II	F	-	+	20.4	石 斧・長 石 直削面・小槽	内斜 内斜	*	黎明系褐色		内部若干 内斜
117	+	-	G-3 イモ穴	-	-	-	+	7.2	石 斧・長 石 直削面	内斜 内斜	*	黎明系褐色		
118	+	68.62	F-2	II	-	直削部	直 壁 9.6	*	*	*	*	*		
119	+	68.50	D-2	II	F	-	+	10.0	石 斧・長 石 直削面・砂粒	内斜 内斜	*	黎明系褐色		
120	+	63.855	C-D-1	II	F	-	+	13.9	*	内斜 内斜	*	黎明系褐色		
121	+	64.46	他	-	II	解 断	17.4	石 斧・長 石 直削面・砂粒	内斜 内斜	*	黎明系褐色			
122	+	64.05	-	II	-	-	+	11.6	石 斧・長 石 直削面・砂粒	内斜 内斜	*	黎明系褐色		
123	+	68.86	D-6	II	-	-	+	10.0	石 斧・長 石 直削面・砂粒	内斜 内斜	*	黎明系褐色～暗系褐色		
124	+	64.245	C-D-2	II	-	底	径 7.8	石 斧・長 石 直削面	内斜 内斜	*	黎明系褐色			
125	+	63.775	他	C-1	E	F	+	7.0	石 斧・長 石 直削面・小槽	内斜 内斜	*	黎明系褐色		内部剥落

第4表 遺跡出土遺物一覧表

番号	類別	標高	区・層	器種	部位	法算(径・高・厚) cm	胎土	調査	焼成	色調	備考	
126	兜	63.735	C-1	壺	底	部	底径 6.4 高さ 1.7	砂ハケーナダ 石英・長石 黑雲母・砂粒	普通	外輪茶褐色～暗茶褐色	内面剥落	
127	*	63.825	C-1	壺	F	*	*	5.0	砂	砂	*	
128	*	64.685	CD-2	壺	*	*	*	6.0	砂	砂	*	
129	*	64.13	*	*	*	*	8.0	砂	砂ハケーナダ 石英・長石 黑雲母・砂粒	良好		
130	*	63.78	C-1	壺	*	*	*	7.0	砂	砂	*	
131	*	64.19	CD-2	壺	*	*	*	7.0	砂	砂	*	
132	*	64.02	瓶	*	*	*	*	3.0	砂ハガキ 砂ハケーナダ	良好	外輪茶褐色～暗茶褐色	
133	*	70.64	D-12	壺	*	*	*	6.2	砂	砂ハガキ 砂	*	
134	*	64.225	C-1	壺	F	*	*	6.6	砂	砂ハケーナダ 石英・長石 黑雲母・砂粒	*	
135	*	68.485	C-1	壺	*	*	*	5.4	砂	砂	四 又文付	
136	*	62.575	C-0	壺	*	*	*	6.4	砂	砂	*	
137	*	64.345	C-2	壺	F	*	*	9.0	砂	砂ハケーナダ 石英・長石 黑雲母・砂粒	良好	
138	*	64.28	瓶	CD-2	壺	*	*	5.2	砂	砂ハガキ 砂	*	
139	*	64.525	*	*	*	*	*	6.6	砂	砂ハケーナダ～1万年 石英・長石 黑雲母・砂粒	外輪茶褐色～明褐色	
140	*	64.245	D-2	壺	F	*	*	7.2	砂	砂ハケーナダ 石英・長石 黑雲母・砂粒	外輪茶褐色	
141	*	65.21	瓶	CD-3	壺	*	*	5.0	砂	砂ハガキ 砂	外茶褐色 砂	
142	*	64.24	*	*	*	*	*	6.0	砂	砂	外輪茶褐色～暗茶褐色	
143	*	64.455	*	*	*	*	*	5.6	砂	砂ハガキ 砂	外輪茶褐色～茶褐色	
144	*	64.05	*	下	*	*	*	5.4	砂	砂ハケーナダ 石英・長石 黑雲母・砂粒	外輪茶褐色	
145	*	63.865	D-1	壺	*	*	*	5.8	砂	砂ハガキ 砂	外茶褐色 砂	
146	*	63.666	*	*	*	*	*	6.2	砂	砂ハケーナダ 石英・長石 黑雲母・砂粒	外輪茶褐色	
147	*	65.04	CD-2	壺	F	*	*	12.0	砂	砂	外茶褐色	
148	*	63.795	C-1	壺	*	*	*	6.4	砂	砂ハケーナダ 石英・長石 黑雲母・砂粒	外輪茶褐色～茶褐色	
149	*	69.57	F-6	壺	突	形	II 径 28.4 高さ 15.8	*	砂ハケーナダ 石英・長石 黑雲母・砂粒	外輪茶褐色～暗茶褐色	外輪茶褐色～暗茶褐色	
150	*	64.37	*	下	甕	11時間部	II 径 31.0 高さ 15.8	砂	砂ハガキ 砂ハケーナダ 石英・長石 黑雲母・砂粒	外輪茶褐色	外輪茶褐色	
151	*	68.595	瓶	C-5	壺	*	*	27.2	砂	砂ハケーナダ 石英・長石 黑雲母・砂粒	外輪茶褐色～暗茶褐色	又文付
152	*	69.71	F-7	壺	*	*	*	27.7	砂	砂ハケーナダ 石英・長石 黑雲母・砂粒	外輪茶褐色	外輪茶褐色
153	*	70.585	D-13	壺	*	*	*	26.8	砂	砂	外輪茶褐色	
154	*	69.7	F-7	壺	*	*	*	28.0	砂	砂	外輪茶褐色	
155	*	64.33	CD-2	壺	F	*	*	27.6	砂	砂ハガキ 砂ハケーナダ 石英・長石 黑雲母・砂粒	外輪茶褐色 外茶褐色	
156	*	70.145	F-7	壺	*	*	*	23.5	砂	砂	外輪茶褐色 外輪茶褐色	
157	*	F-2	壺	*	*	*	*	32.0	砂	砂ハケーナダ 石英・長石 黑雲母・砂粒	外輪茶褐色	
158	*	70.035	G-6	壺	*	*	*	13.8	砂	砂ハガキ 砂ハケーナダ 石英・長石 黑雲母・砂粒	外輪茶褐色～暗茶褐色 外輪茶褐色	
159	*	70.43	D-11	壺	*	*	*	15.6	砂	砂	外輪茶褐色	
160	*	D-14. 15表	*	*	*	*	*	15.6	砂	砂	外輪茶褐色 外輪茶褐色	
161	*	68.365	D-5	壺	*	*	*	19.7	砂	砂	外輪茶褐色～暗茶褐色	
162	*	D-14. 15表	*	*	器壁	0.45-0.6	砂	砂	砂	外輪茶褐色 外輪茶褐色	*	
163	*	68.795	D-1	壺	*	*	*	0.85	砂	砂	外輪茶褐色～暗茶褐色	又文付
164	*	64.115	CD-2	壺	*	*	*	11 径 22.6	砂	砂	外茶褐色 外輪茶褐色	
165	*	70.985	D-13	壺	*	*	*	23.6	砂	砂	外輪茶褐色 外輪茶褐色	
166	*	68.7	D-1	壺	*	*	*	24.0	砂	砂ハケーナダ 砂	外輪茶褐色 砂	

第5表 遺跡出土遺物一覧表

番号	類別	標 高	区・層	器種	部 位	法量(径・高・厚)	地 上	調 査	性 質	色 調	備 考
167	斧	64.32	C D-2	II	鍔	口縫部	II 径 24.0	石 斧・錐 石 頭・身	セイガキ セハナダ	良材	有明海褐色 錐形真面
168	*	69.105	D-1	II	*	*	18.8	*	*	*	有明海褐色
169	*	68.465	D-5	II F	*	*	14.4	石 斧・錐 石 頭・身・細枝	*	*	有明海褐色～暗褐色 錐形真面
170	*	63.96	施	C D-2	II	小型斧	口縫部	II 径 8.8 幅 12.8	*	*	有明海褐色
171	*	64.915	D-3	II F	鍔	口縫部	II 径 12.2	石 斧・錐 石 頭・身	セハナダ	良材	有明海褐色～暗褐色 錐形真面
172	*	69.97	G-6	II	*	*	15.4	*	*	*	有明海褐色 錐形真面
173	*	70.08	D-9	II	鍔	*	13.0	*	セイガキ セハナダ	*	有明海褐色～暗褐色 錐形真面
174	*	69.565	E-7	II	小型斧	*	15.5	*	*	*	有明海褐色 錐形真面
175	*	*	D-5	II	小型斧	*	6.1	*	セイガキ セハナダ	*	有明海褐色 錐形真面
176	*	68.145	C-4	Ⅳ上	鍔	*	11.6	*	セハナダ	*	有明海褐色～暗褐色 錐形真面
177	*	69.905	G-6	II	小型斧	*	7.0	石 斧・錐 石 頭・身	*	*	有明海褐色 錐形真面
178	*	69.77	*	円筒形	*	*	6.3	石 斧・錐 石 頭・身	セイガキ セハナダ	*	有明海褐色 錐形真面
179	*	*	C-3	青	手取山 土器	完 形	II 径 5.3 高 8.5	石 斧・錐 石 頭・身	セイガキ セハナダ	*	有明海褐色 錐形真面
180	*	63.92	C D-1	II F	鍔	*	6.1	*	*	*	有明海褐色 錐形真面
181	*	68.87	F-5	II	鍔	底 部	底 径 3.0	*	*	*	有明海褐色 錐形真面
182	*	72.485	C-24	青	*	*	2.0	石 斧・錐 石 頭・身	*	*	有明海褐色 錐形真面
183	*	64.195	C D-2	II F	身	鋸部	鋸壁厚 0.7	*	セイガキ セハナダ	*	有明海褐色 錐形真面
184	*	64.295	*	II	*	*	0.5	*	*	*	有明海褐色 錐形真面
185	*	68.96	F-4	II	*	口縫部	II 径 15.8	石 斧・錐 石 頭・身・細枝	*	*	有明海褐色 錐形真面
186	*	70.6	F-7	II	*	*	17.2	*	セハナダ	*	有明海褐色～暗褐色 錐形真面
187	*	63.98	施	C D-2	II	*	15.6	*	セハナダ	*	普通
188	*	64.28	施	*	*	*	16.4	*	セイガキ セハナダ	*	良材
189	*	70.71	D-13	II	*	*	鋸壁厚 0.7	*	セハナダ	*	有明海褐色 錐形真面
190	*	69.98	G-7	II	*	*	0.4	*	*	*	有明海褐色 錐形真面
191	*	63.855	D-1	II F	*	*	0.7	*	*	*	有明海褐色 錐形真面
192	*	64.73	C D-2	II F	*	*	II 径 14.6	*	*	*	有明海褐色 錐形真面
193	*	64.20	D-2	II	*	*	鋸壁厚 0.6	*	*	*	有明海褐色 錐形真面
194	*	68.74	F-4	Ⅳ上	*	*	0.8	*	*	*	有明海褐色 錐形真面
195	*	68.475	E-2	II F	*	*	II 径 17.0	*	セイガキ セハナダ	*	有明海褐色 錐形真面
196	*	64.035	C D-2	II F	*	*	鋸壁厚 0.9	*	セハナダ	*	有明海褐色 錐形真面
197	*	*	I-4	青	*	*	0.7	*	セハナダ	*	有明海褐色 錐形真面
198	*	70.21	D-10	II	*	*	1.15	石 斧・錐 石 頭・身	セイガキ セハナダ	*	有明海褐色 錐形真面
199	*	68.69	F-7	II	*	*	0.9	石 斧・錐 石 頭・身・細枝	*	*	有明海褐色 錐形真面
200	*	69.85	G-6	II	*	*	0.7-1.1	石 斧・錐 石 頭・身	セイガキ セハナダ	*	有明海褐色 錐形真面
201	*	68.60	F-6	II	*	*	0.75	石 斧・錐 石 頭・身・細枝	セイガキ セハナダ	*	有明海褐色 錐形真面
202	*	64.135	C D-1	II	*	*	0.8	石 斧・錐 石 頭・身・細枝	*	*	有明海褐色 錐形真面
203	*	64.815	*	*	*	*	II 径 12.0	*	セイガキ セハナダ	*	有明海褐色 錐形真面
204	土	F-6 中空柱穴	土器	完 形	6.1	*	径 8.5	*	ナダ	*	黄茶褐色
205	*	*	*	*	*	*	高 9.5 底 1.8	*	*	*	*

第Ⅳ章 中・近世の調査

第1節 調査の概要

近世から中世に該当する遺構・遺物は、縄文時代などに比較すると非常に少なく断片的であり、機能や時期が不明なものが多い。

近世から中世に該当する遺構は、古道・溝状遺構・掘立柱建物等が検出された。

古道は、F～G 5区付近に南北方向に検出され、幅約1.5mを測る比較的のしっかりした道路跡である。おそらく、この地域のこの時期の幹線道路と想定される。そのほかに、溝状遺構が検出されている。農地整備や開拓のため途中が削平を受け断片的な残存であるが、小道としての機能を考えられる。

掘立柱建物は、3棟検出された。2間×4間（1号掘立柱建物跡）の規模のものと、2間×3間（2号・3号掘立柱建物跡）に庇がつくタイプがある。2号と3号掘立柱建物跡は、柱穴などの直接の切り合いはみられないが、同場所に重複して検出されている。また、2号掘立柱建物跡のP20からは、土師器の完形品が2個重なって出土している。儀礼的なものか、注目される資料である。

第2節 遺構

近世から中世に該当する遺構は、古道・溝状遺構・掘立柱建物等が検出された。いずれも、時期は定かではないが、中・近世のいすれかに該当するものである。

(1) 古道（第23図）

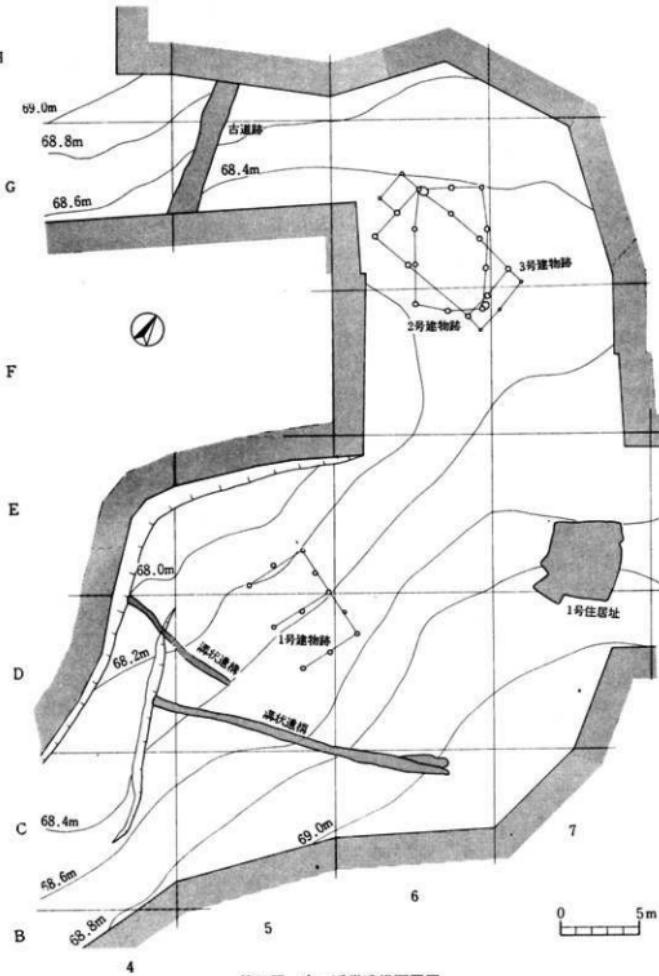
古道は、F～G 5区に南北に向いた方向で検出されている。埋土には、表土下のⅡ層（黒色土層）が混入している。幅約1.5mを測る比較的のしっかりした道路跡である。おそらく、この地域のこの時期の幹線道路と想定される。

(2) 溝状遺構（第24図）

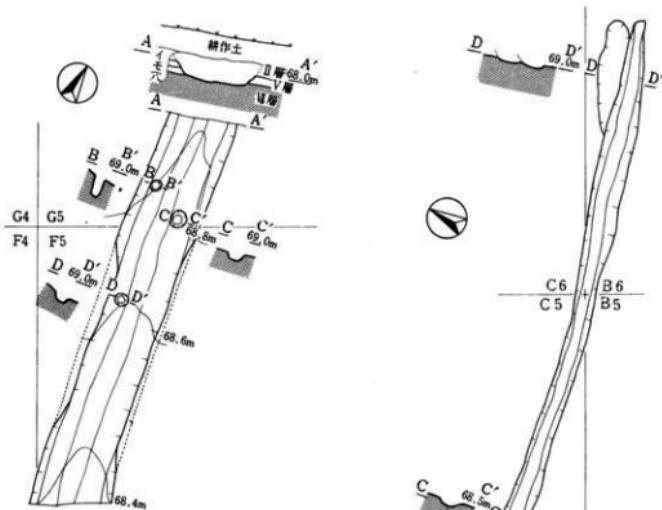
溝状遺構は、CD 5～6区にかけて検出されている。埋土には、Ⅱ層（黒色土層）が混入している。幅40cm～80cmの幅狭い溝状の落ち込みであるが、小道として利用されていた可能性も考えられる。しかし、開拓や農地整備のため途中が削平を受け断片的な残存である。

(3) 掘立柱建物跡

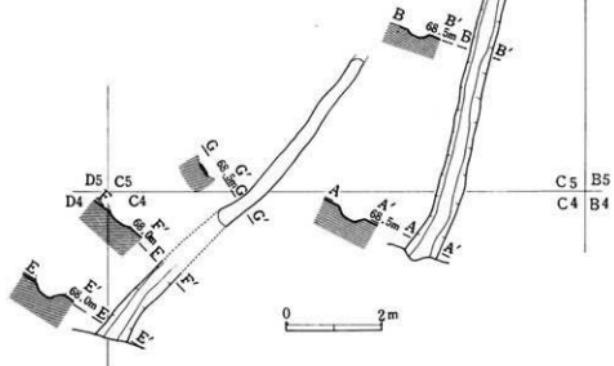
掘立柱建物跡は、3棟検出された。基本的には2間×4間と2間×3間のタイプであるが、柱間の数や庇の有無など、形態はいすれも異なっている。柱穴の埋土には、Ⅱ層に該当する黒



第22図 中～近世遺構配置図



第23図 古道跡実測図



第24図 溝状遺構実測図

色土が混入するが、時期は定かではない。ただ、3号掘立柱建物跡の柱穴のP₁₁に土師器が二個重なって出土しており、貴重な時期の決め手となっている。

1. 1号掘立柱建物跡 (第25図)

1号掘立柱建物跡は、C 5区とD 5区に検出された。2号や3号掘立柱建物跡の略南方向に位置している。

掘立柱建物跡は基本的には2間×4間の規模で、主軸（長軸）をN-65°-Wの方向を向いている。掘立柱建物跡の形態は、西側の桁行柱間が二本欠けるもので、西側の桁行間は2間となっている。

各柱穴は、径約25cm～35cmの範囲の小規模なものである。

柱穴位置での建物規模は、次の通りである。

略南側の梁間間（P₁-P₅）は404cmで、北側の梁間間（P₁-P₁₁）は403cmとほぼ等距離を測る。しかし、中央の梁間間（P₄-P₁₁）は411cmを測り、若干長く中膨らみとなっている。東側の桁行間（P₁-P₄）は636cmで、西側の桁行間（P₄-P₁₁）は640cmとほぼ等距離を測る。しかし、中央の桁行間（P₄-P₄）は666cmを測り、若干長く中膨らみとなっている。このように、ほぼ四隅は、均整な柱穴の配置がおこなわれた建物跡である。

柱間の計測数値は、南側の梁間柱間はP₁-P₄=205cm、P₄-P₅=201cmを測る。中央はP₁-P₁=207cm、P₄-P₁₁=205cmを測り、北側はP₁-P₄=204cm、P₄-P₁₁=200cmを測る。なお、梁間柱間の平均値は、203.66cmとなる。

桁行柱間は、東側はP₁-P₄=164cm、P₃-P₄=151cm、P₁-P₅=163cm、P₄-P₅=160cmを測り、中央はP₄-P₄=347cm、P₄-P₅=320cmを測り、西側はP₄-P₁₁=315cm、P₁₁-P₁₁=325cmを測る。西側に対応した桁行柱間の平均値は、323.83cmを測る。

以上が、1号掘立柱建物跡の柱穴の配置規模であるが、ほぼ均整な柱穴の配列であることが考えられる。しかし、1号掘立柱建物跡は、西側の桁行柱間が1本ずつ欠けるという特殊な柱配列の建物である。

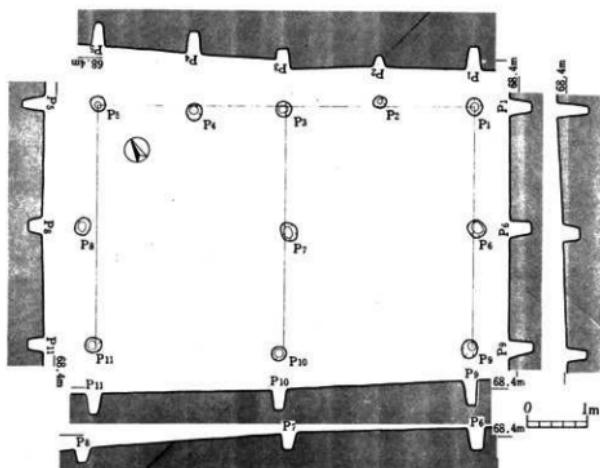
2. 2号掘立柱建物跡 (第26図)

2号掘立柱建物跡は、E 6区とF 6区に検出された。1号掘立柱建物跡の略北方向に位置し、3号掘立柱建物跡とは重なっている。

掘立柱建物跡は2間×3間の規模で、主軸（長軸）をN-28°-Wの方向を向いている。

各柱穴は、径約25cm～40cmの範囲の小規模なものである。

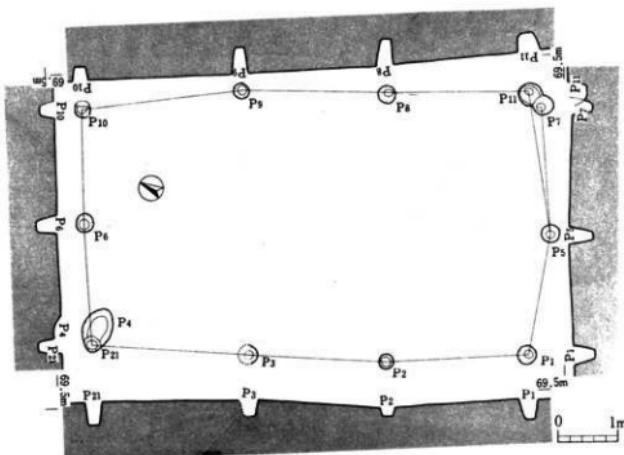
柱穴位置での建物規模は、次の通りである。なお、柱穴P₁とP₁₁は重複しており、立替えの可能性が考えられる。



第25図 1号掘立柱建物実測図

第6表 掘立柱建物1号一覧表

建物番号	1号		P	長径×短径×深さ (level)	P	長径×短径×深さ (level)
主軸方位	N-65°-W		1	28×25×37 (67.87)	10	25×24×34 (68.03)
出土区	C 5, D 5		2	29×26×36 (67.94)	11	32×26×42 (68.12)
埋置柱間	埋置間	桁行柱間	桁行間	3 28×27×53 (68.03)		備考
$P_1 - P_2 = 205$		$P_1 - P_2 = 164$		4 34×20×18 (68.34)		
$P_2 - P_3 = 201$	$P_1 - P_2 = 404$	$P_2 - P_3 = 151$		5 30×27×37 (68.19)		
$P_3 - P_4 = 207$		$P_3 - P_4 = 314$		6 30×25×23 (67.95)		
$P_4 - P_{11} = 205$	$P_3 - P_{11} = 411$	$P_4 - P_5 = 163$		7 34×27×28 (68.17)		
$P_5 - P_6 = 204$		$P_5 - P_6 = 166$		8 32×30×37 (68.18)		
$P_6 - P_{11} = 200$	$P_5 - P_{11} = 403$	$P_6 - P_{11} = 322$	$P_1 - P_{11} = 636$	9 29×25×27 (67.95)		
		$P_6 - P_{11} = 315$				
		$P_{11} - P_{11} = 325$	$P_1 - P_{11} = 640$			



第26図 2号掘立柱建物実測図

第7表 掘立柱建物 2号一覧表

建物跡	2号		P	長径×短径×深さ (level)	P	長径×短径×深さ (level)
主軸方位	N-28°-W		1	32×32×35 (69.00)	9	28×25×44 (69.17)
出土区	E 6区、F 65		2	26×34×15 (69.15)	10	30×26×24 (69.38)
梁間柱間	梁間柱間	桁行柱間	3	33×28×28 (69.25)	11	40×38×32 (69.12)
P ₁ -P ₂ =205 P ₁ -P ₃ =216 P ₁ -P ₁₁ =244	P ₁ -P ₂ =404 P ₁ -P ₁₁ =443	P ₁ -P ₂ =240 P ₁ -P ₂ =230 P ₁ -P ₁₁ =264	4	30×27×39 (69.2)	備考	
	P ₁ -P ₂ =453	P ₁ -P ₂ =782	5	31×30×41 (69.02)		
	P ₁ -P ₂ =445	P ₁ -P ₂ =247 P ₁₁ -P ₂ =220 P ₁ -P ₁₁ =206	6	30×28×34 (69.24)		
P ₁ -P ₂ =304 P ₁ -P ₁₁ =195	P ₁ -P ₁₁ =397	P ₁ -P ₁₁ =769 P ₁₁ -P ₁₁ =750	7	36×32×37 (69.03)		
			8	31×29×43 (69.13)		

略西側の梁間間（ $P_1 - P_{11}$ ）は443cmで、東側梁間間（ $P_4 - P_{14}$ ）は397cmと西側が長い距離を測る。北側の桁行間（ $P_1 - P_4$ ）は732cmで、南の桁行間（ $P_{11} - P_{14}$ ）は750cmと南側が若干長い。しかし、中央の桁行間（ $P_4 - P_8$ ）は782cmを測り、若干長く中膨らみとなっている。このように、若干いびつな柱穴の配置がおこなわれた建物跡である。

柱間の計測数値は、西側の梁間柱間は $P_1 - P_4 = 205\text{cm}$ 、 $P_4 - P_{11} = 244\text{cm}$ を測る。東側は $P_4 - P_4 = 204\text{cm}$ 、 $P_8 - P_{14} = 195\text{cm}$ を測る。なお、梁間柱間の平均値は、212cmとなる。

桁行柱間は、北側は $P_1 - P_2 = 240\text{cm}$ 、 $P_2 - P_3 = 230\text{cm}$ 、 $P_3 - P_4 = 264\text{cm}$ を測り、南側は $P_{11} - P_8 = 220\text{cm}$ 、 $P_8 - P_9 = 216\text{cm}$ 、 $P_9 - P_{14} = 215\text{cm}$ を測る。桁行柱間の平均値は、230.83cmを測る。

以上が、2号掘立柱建物跡の柱穴の配置規模であるが、若干いびつな柱穴の配列であることを考えられる。

3. 3号掘立柱建物跡 (第28図)

3号掘立柱建物跡は、E F 6区とE F 7区に検出された。1号掘立柱建物跡の略北方向に位置し、2号掘立柱建物跡とは重なっている。

掘立柱建物跡は2間×3間の規模で、両梁間には庇が付けられる。主軸（長軸）をN-78°-Wの方向を向いている。なお、柱穴 P_{14} の埋土中から、土師器が二個重なった状態で出土した。建物の時期を決める重要な手掛かりとなる。

各柱穴は、径約25cm-35cmの範囲の小規模なものである。

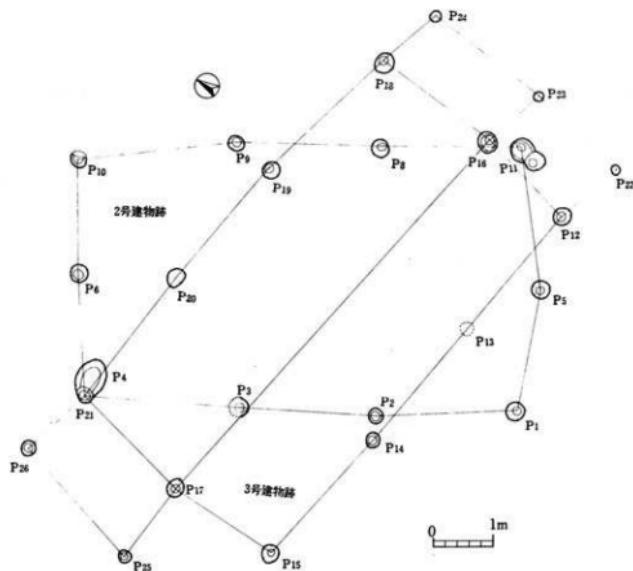
柱穴位置での建物規模は、次の通りである。

略南側の梁間間（ $P_{12} - P_{14}$ ）は400cmで、北側梁間間（ $P_{14} - P_{11}$ ）は412cmと北側が若干長い距離を測る。西側の桁行間（ $P_{12} - P_{14}$ ）は745cmで、東の桁行間（ $P_{14} - P_{11}$ ）は756cmと東側が若干長い。しかし、中央の桁行間（ $P_{12} - P_{11}$ ）は790cmを測り、若干長く中膨らみとなっている。このように、若干いびつな柱穴の配置がおこなわれた建物跡である。

柱間の計測数値は、南側の梁間柱間は $P_{12} - P_{14} = 177\text{cm}$ 、 $P_{14} - P_{11} = 225\text{cm}$ を測る。北側は $P_{12} - P_{11} = 195\text{cm}$ 、 $P_{11} - P_{14} = 220\text{cm}$ を測る。なお、梁間柱間の平均値は、204.25cmとなる。

桁行柱間は、西側は $P_{12} - P_{13} = 247\text{cm}$ 、 $P_{13} - P_{14} = 247\text{cm}$ 、 $P_{14} - P_{13} = 255\text{cm}$ を測り、東側は $P_{12} - P_{11} = 265\text{cm}$ 、 $P_{11} - P_{14} = 243\text{cm}$ 、 $P_{14} - P_{13} = 252\text{cm}$ を測る。桁行柱間の平均値は、251.50cmを測る。

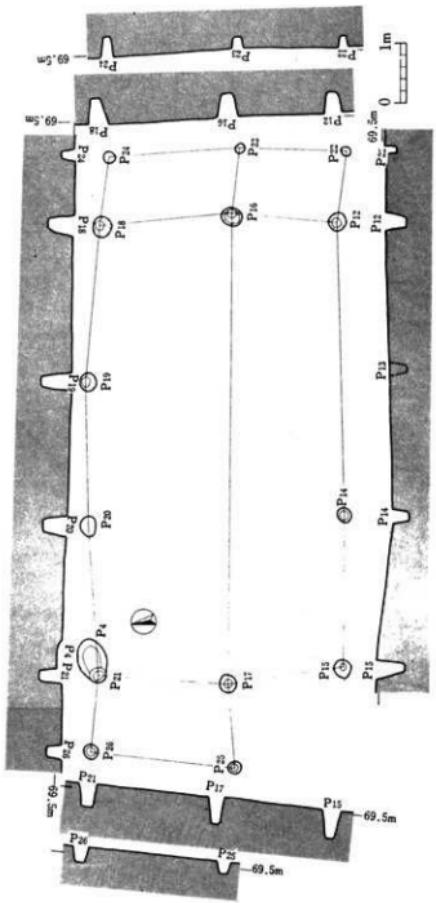
その他に3号掘立柱建物跡には両梁間に庇が付く。南側の庇は、 $P_{12} - P_{13} = 122\text{cm}$ 、 $P_{14} - P_{13} = 111\text{cm}$ 、 $P_{12} - P_{14} = 116\text{cm}$ を測る。南側の庇の平均値は、116.3cmを測る。北側の庇は、 $P_{12} - P_{11} = 143\text{cm}$ 、 $P_{11} - P_{14} = 131\text{cm}$ を測る。北側の庇の平均は137.0cmを測る。このように、北側の庇が南側の庇よりも若干長い。



第27図 2号・3号掘立柱建物配置図

第8表 堀立柱建物 3号一覧表

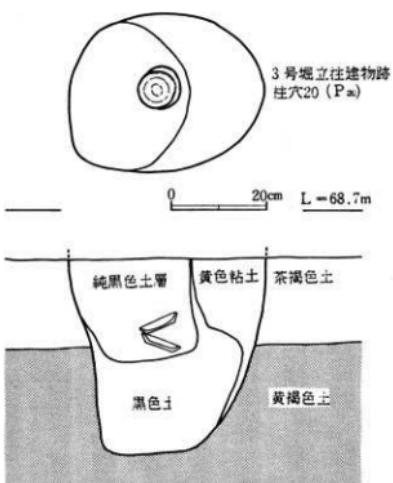
建物跡	3号	P	直径×短径×深さ (level)	P	直径×短径×深さ (level)
主軸方位	N-78°-W	12	32×29×35 (69.10)	23	19×16×20 (69.23)
出土区	EF 6区、EF 7区	13	?	24	30×20×25 (69.28)
梁間柱間	梁間間隔	14	25×22×27 (69.02)	25	23×19×19 (69.40)
P ₁₁ -P ₁₁ =177 P ₁₁ -P ₁₁ =225	P ₁₁ -P ₁₁ =400	15	32×30×48 (69.06)	26	24×22×27 (69.35)
P ₁₁ -P ₁₁ =430	P ₁₁ -P ₁₁ =431	16	36×31×40 (69.08)		備考
P ₁₁ -P ₁₁ =195 P ₁₁ -P ₁₁ =220	P ₁₁ -P ₁₁ =412	17	30×27×45 (69.12)		
P ₁₁ -P ₁₁ =180 P ₁₁ -P ₁₁ =221	P ₁₁ -P ₁₁ =400	18	35×32×43 (69.11)		
P ₁₁ -P ₁₁ =245	P ₁₁ -P ₁₁ =143 P ₁₁ -P ₁₁ =131	19	30×28×53 (69.08)	20	33×25×41 (69.19)
		21	30×27×39 (69.2)	22	15×15×20 (69.26)



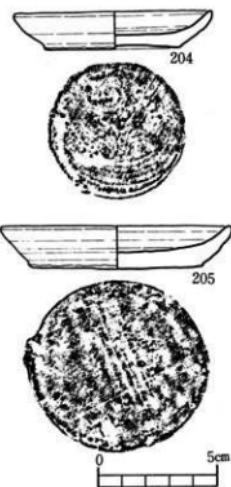
第28圖 3號探管土壤測定圖

以上が、2号掘立柱建物跡の柱穴の配置規模であるが、若干いびつな柱穴の配列であること
が考えられる。

3号掘立柱建物跡の柱穴P₁₄から、土師器の壺が二点出土した。204は、口径8.2cm、高さ
1.65cmで底面は糸切りである。205は、口径9.6cm、高さ1.9cmで底部面はヘラ切りである。



第29図 土師器出土状態



第30図 土師器実測図

第 V 章 発掘調査のまとめ

中ノ原遺跡の今回の発掘調査は、緑地帯保存部分と農道によって削平された部分が多く、弥生時代の遺跡の全体像を把握することは非常に困難であった。しかし、遺跡の分布や遺構の配置から、遺跡はかなり広範囲におよぶことが想定された。

第1節 弥生時代について

弥生時代の遺構は、堅穴住居址が3基検出された。住居址は、いずれもⅣ層からⅤ層のアカホヤ火山灰層を基盤に構築されている。堅穴住居址の時期は、従来、弥生時代中期から後期初頭に位置付けられる山ノ口式土器を伴う時期に該当している。3基の住居址はかなりの距離をもって検出されており、しかも、1号住居址は方形プランを呈し東南隅に張り出し部を持つタイプであり、3号住居址は花弁型の間仕切りを備えた小型の円形住居址であり、形態上の違いが大きい。さらに、住居址からの出土遺物は少なく、時期を限定する遺物はみられない。

1号住居址は、約5m×4.5mの方形プランを呈し東南隅に張り出しを付した形態の一般的な大きさのものである。床面は、中央部が掘りコツ状に一段低くなり、その四隅に四本柱を持つタイプである。この手法は方形住居址でも間仕切りをもつ円形住居址でもよくみられる一般化した方法である。2号住居址は、方形の可能性があるが主体は用地外に延びるため不明である。3号住居址は、直径約4.5mの円形を基調とする比較的小型の花弁形住居址である。住居址内には四ヶ所の花弁状の間仕切りを持ち、中央が一段低くなるタイプである。しかも、間仕切りに対応して柱穴が配置されている。この花弁状の間仕切りをもつ住居址は、王子遺跡（14号住）、中ノ丸遺跡（2号住）、中原山野遺跡（1号住）などでみられるものはいずれも直径7m程度で大型である。中ノ原遺跡の小型の花弁形住居址が時期の違いによるものか、今後の課題である。

出土遺物は、調査区全体から万遍なく出土するが、特にCD1～3区にあたる傾斜面に形成された包含層からの出土が多い。

土器は、大きく甕形土器、壺形土器、鉢形土器、特殊土器に分けられる。中ノ原遺跡では、特に、櫛撻波状文や回線文等の施された特殊土器が比較的多く出土しており、共伴する在地土器の形態と他の遺跡との比較が注目された。関連する調査では中原山野遺跡や前畠遺跡、さらには王子遺跡などのタイプとは若干異なる部分がみられ、鹿屋市高付遺跡^⑨や山川町成川遺跡^⑩と形態的に類似するところがある。

形態の違いが顕著にみられる器形は、甕形土器である。大甕は、口縁部が直線的に長く「く」字状に大きく外反してその屈曲部の直下に台形状の厚い突帯文が巡るタイプである。高付遺跡例も同様である。しかし、中原山野遺跡や王子遺跡等にみられるタイプは、口縁部は短く逆「

L」字状に外反して若干の隙間を置いて突帯文を巡らしている。變形土器は、前烟遺跡や中原山野遺跡では「く」字状口縁の直下に隙間を置いて突帯文が巡らされるのに対し、本遺跡では「く」字状口縁部の屈曲部の直下から数条の突帯文が巡っているものが多い。このタイプは高付遺跡でも顕著にみられる。脚台の底部は、中原山野遺跡や前烟遺跡のほとんどが充実するのに対し、中ノ原遺跡のものは底面が充実するものも含まれるが上げ底状になるものが顕著である。臺形土器にはさほど差異は認められないが、外反するだけの比較的小型の口縁部が存在する。そしてこれらの口縁平坦面には櫛描波状文や凹線文が施されるものもある。そのほか口縁部に鋸歯状沈線を描くものや胴部に円形浮文を貼付するものもみられる。これは高付遺跡や成川遺跡でも同様な傾向で出土している。

このようにしてみると、中ノ原遺跡出土の弥生土器は、高付遺跡や成川遺跡と形態の類似が顕著であり、中原山野遺跡や前烟遺跡とは若干の差異を確認することができる。この差異が、現在問題にされている山ノ口式土器の細分の決め手になるか判断はできないが、移入土器を含めて在地土器の形態の移行期であることが察知される。ここでは、中期終末期の形態としてとらえておきたい。

第2節 中・近世について

中世～近世の遺構は、古道・溝状遺構・掘立柱建物跡等がある。古道は、F～G 5区に南北方向に検出され、幅1.5mを測る比較的しっかりした道路跡である。おそらく、この時期のこの地域の幹線道と考えられる。そのほか断片的に溝状遺構が確認されている。農地整備や開畠のため途中が削平を受けているが、小道としての機能があるものと考えられる。

掘立柱建物跡は3棟検出されたが、1号建物は2間×4間の掘立柱建物跡であり、桁行間が一つ飛の2間となっている。車庫状の特殊な柱間を持つ掘立柱建物跡として注目される。

中世では、2棟の掘立柱建物跡が検出された。共に2間×3間の建物跡で、梁間に庇の付くタイプである。建物跡は重複しており、1棟の建物の柱穴には糸切り底の土師器の环の完形品⁽⁴⁾を2個埋納した注目すべき事実も得られた。この土師器の埋納は、建物建立の地鎮・鎮壇遺構⁽⁵⁾の可能性が強い。

註

- (1) 鹿児島県教育委員会 1985 「王子遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』(34)
- (2) 鹿屋市教育委員会 1984 「高付遺跡」『鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書』(2)
- (3) 鹿児島県教育委員会 1983 「成川遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』(20)
- (4) 中村耕治 1986 「弥生時代」『鹿児島考古』第20号
- (5) 都城市教育委員会 1989 「都之城本丸跡」『都城市文化財調査報告書』(10)

図 版
PLATES



1. CD1・2区Ⅲ層の発掘調査風景



2. 1号住居址検出状況（北から）

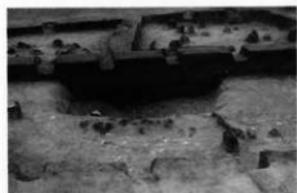
図版2



1. 検出状況（北から）



2. 掘り下げ状況（東から）



3. 埋土状況（北から）

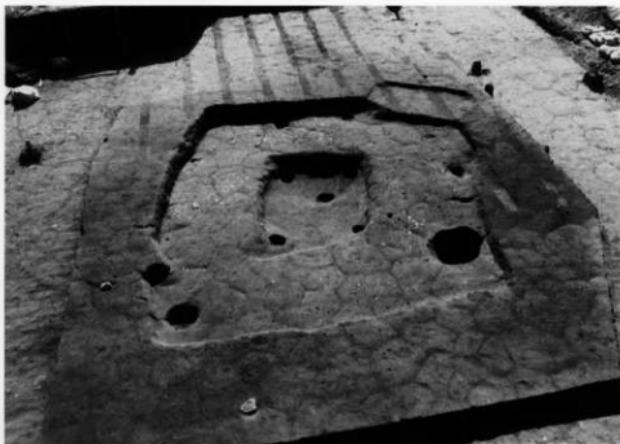


4. 埋土状況（東から）



5. 1号住居址検出状況（東から）

図版3

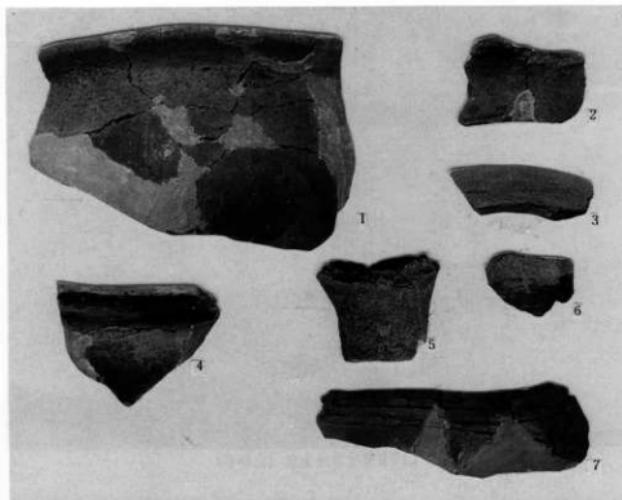


1. 1号住居址全景（北から）

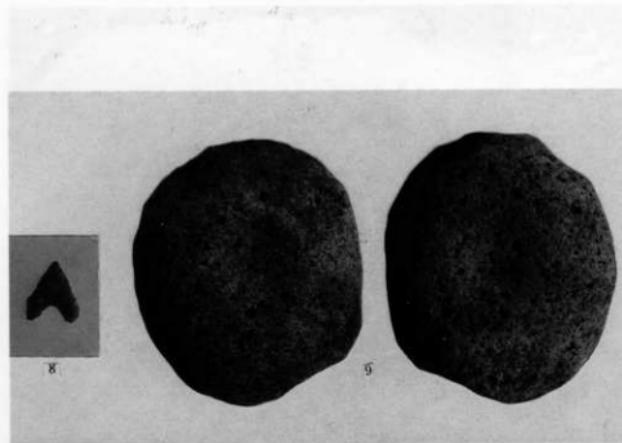


2. 1号住居址全景（北から）

图版4



1. 1号住居址出土遗物（土器）



2. 1号住居址出土遗物（石器）



1. 2号住居址全景（東から）

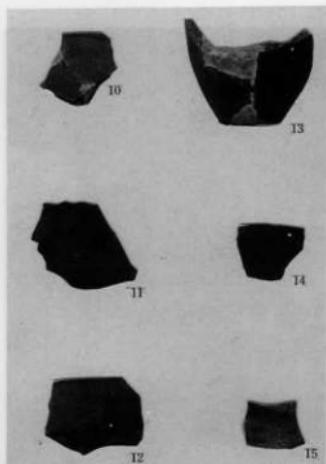


2. 3号住居址検出状況（東から）

図版6



1. 3号住居址全景 (東から)



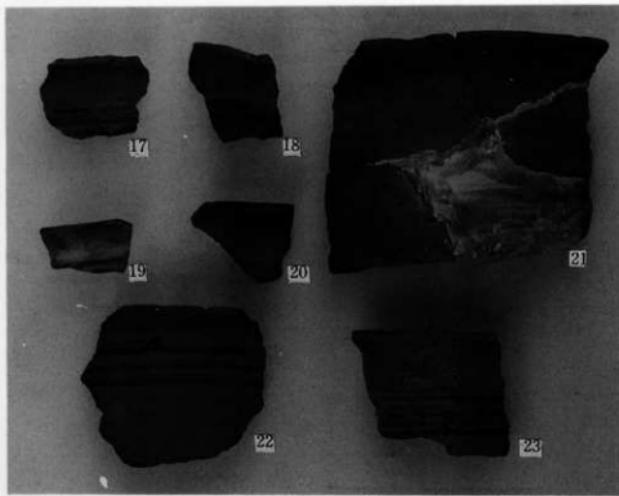
2. 3号住居址出土遺物



3. 完形土器出土状況 (149)

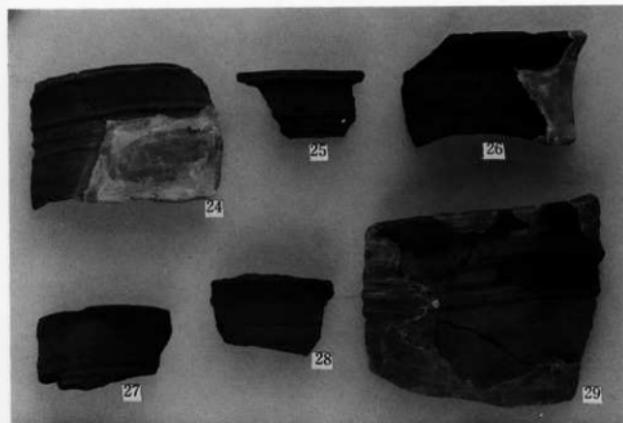


1. 弥生土器 (1)

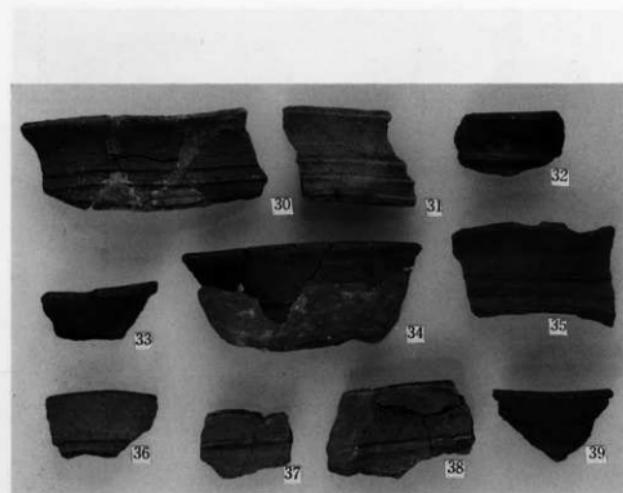


2. 弥生土器 (2)

圖版 8

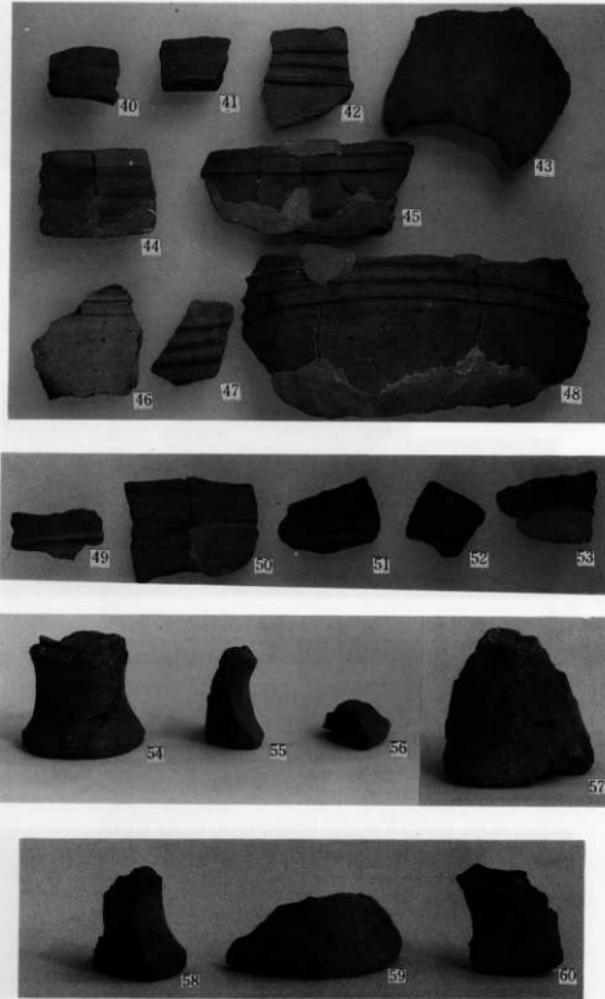


1. 弥生土器 (3)



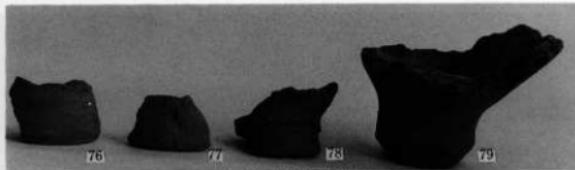
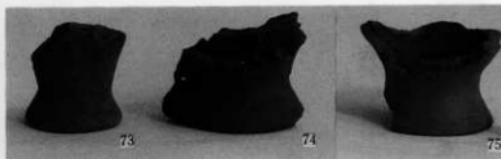
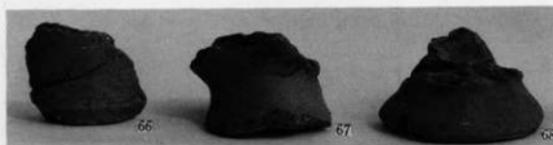
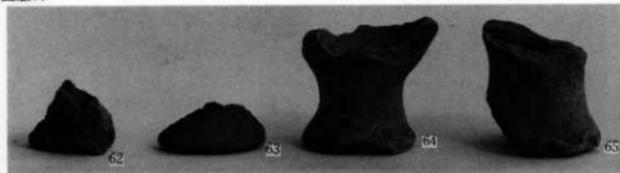
2. 弥生土器 (4)

図版9

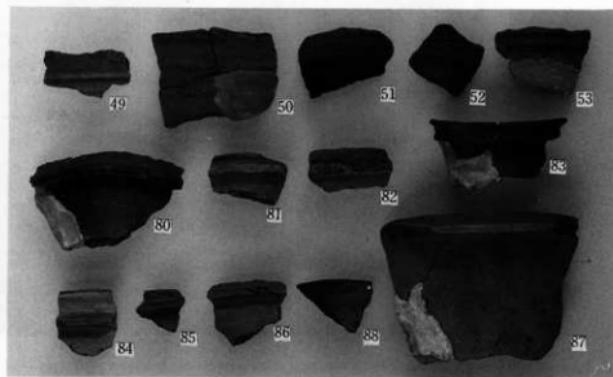


1. 弥生土器 (5)

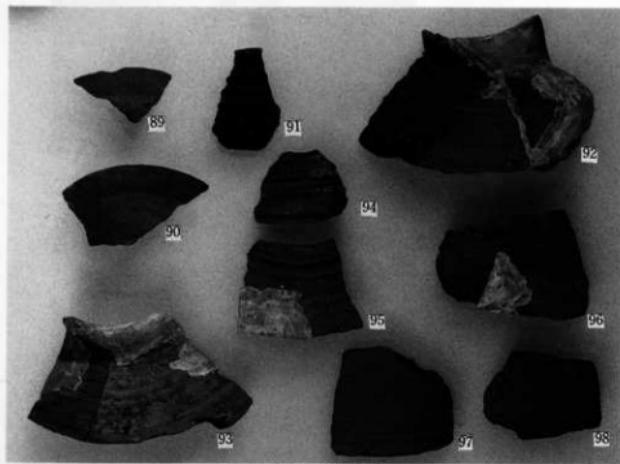
圖版10



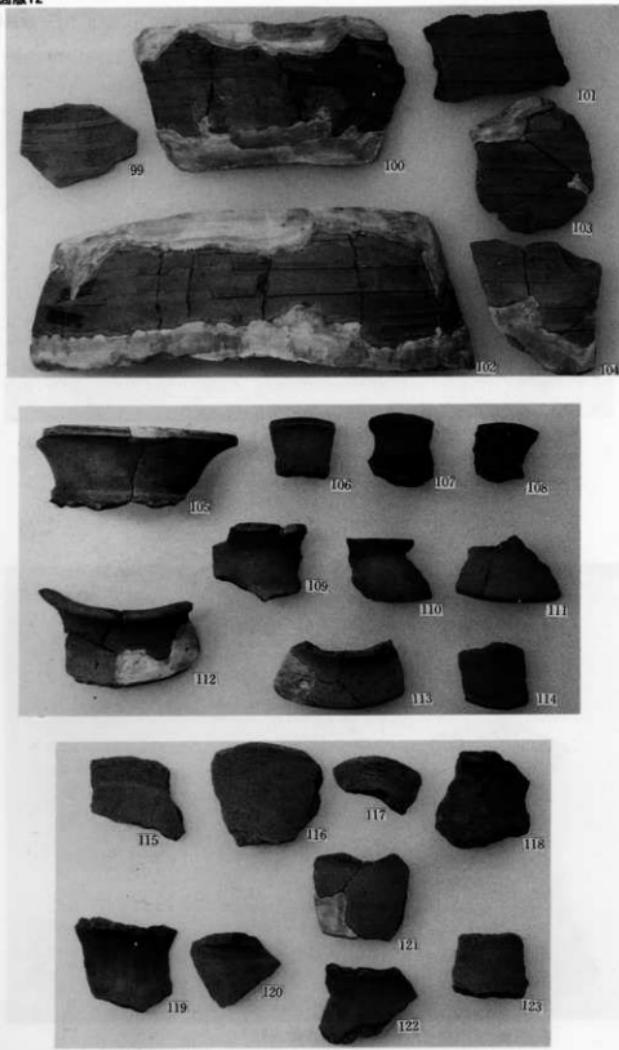
1. 弥生土器 (6)



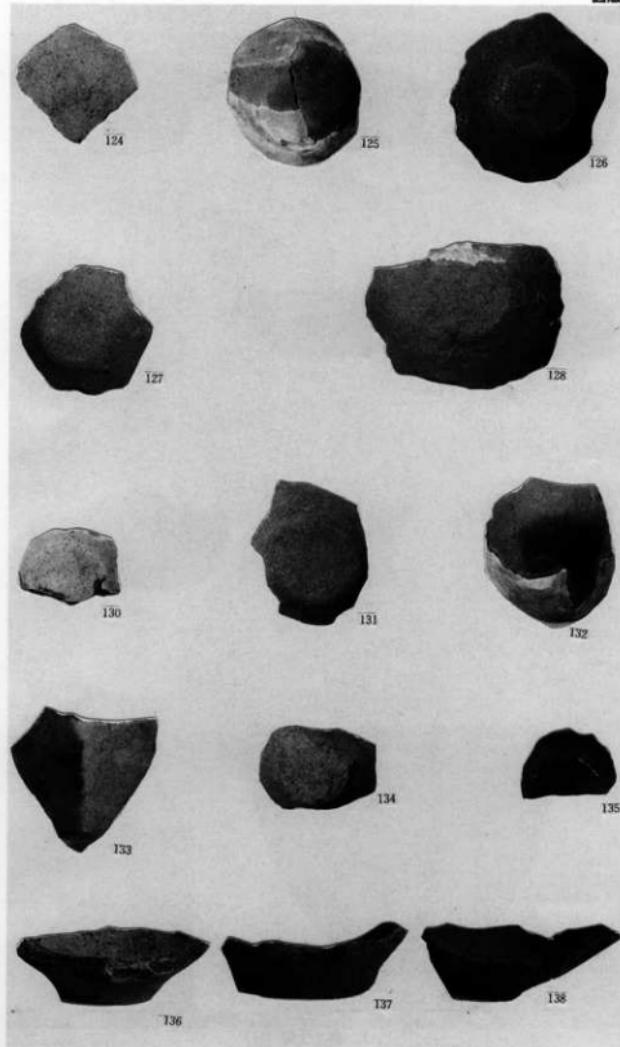
1. 弥生土器 (7)



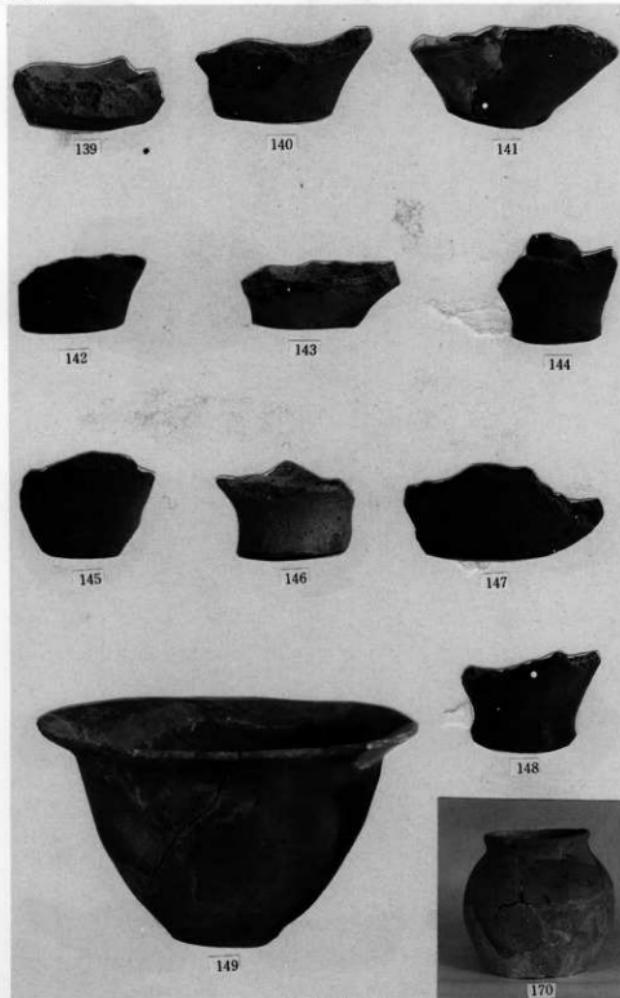
2. 弥生土器 (8)



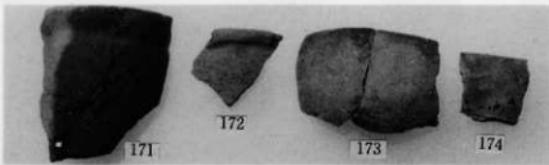
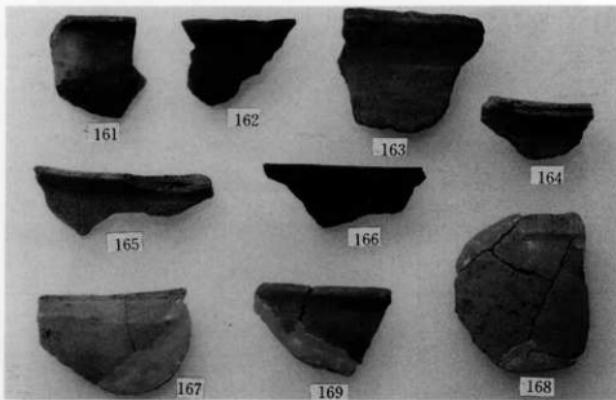
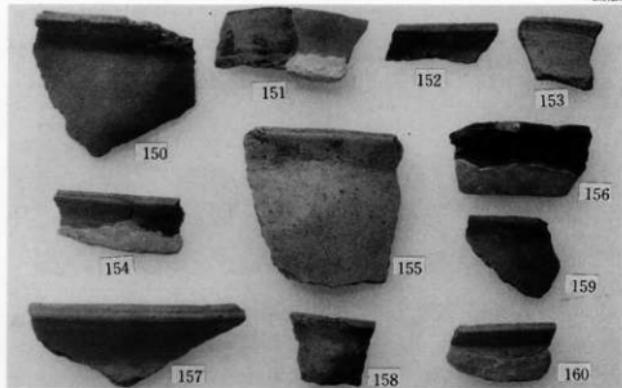
1. 弥生土器 (9)



1. 异生土器 (10)

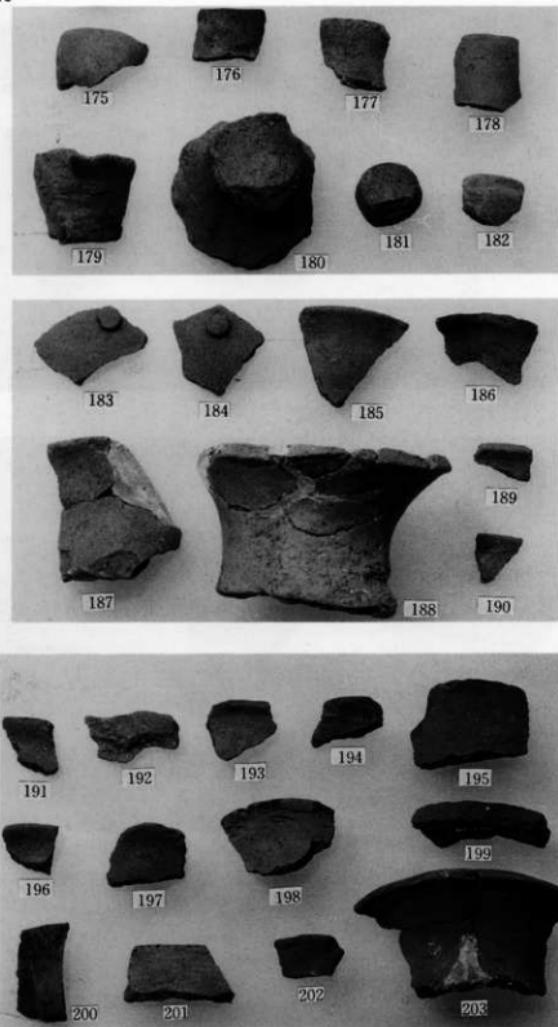


1. 弥生土器 (11)



-59- 1. 弐生土器 (12)

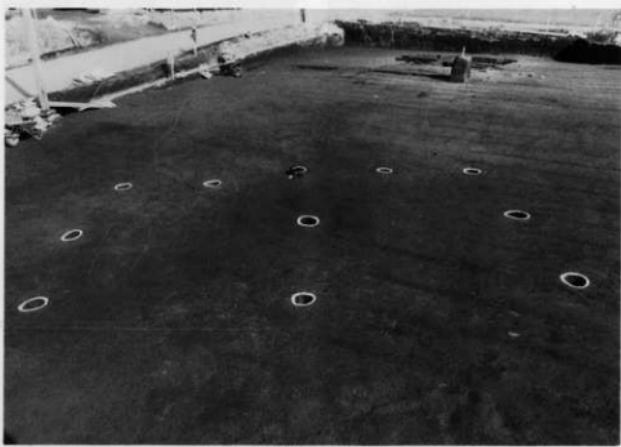
圖版16



1. 莎生土器 (13)



1. 1号掘立柱建筑物状况

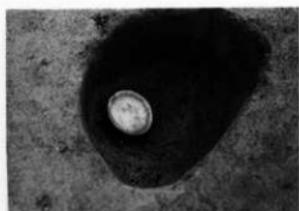


2. 1号掘立柱建筑物全景

图版18



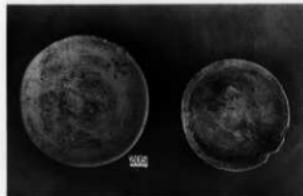
1. 2号·3号据立柱建物全景



2. 土筛器出土状况（柱穴）



3. 土筛器出土状况（柱穴）



4. 出土土筛器（内面）



5. 出土土筛器（底面）

中原山野遺跡



例　　言

1. この報告書は、一般国道220号鹿屋バイパス建設に伴う大浦・郷之原地区的発掘調査「中原山野遺跡」の調査報告書である。
2. この報告書は、鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(52)の「中原山野遺跡」(第6分冊)である。
3. 中原山野遺跡は、鹿屋市郷之原町(旧字名中原山野)に所在する。
4. 発掘調査は、建設省九州建設局大隅工事事務所からの受託事業として鹿児島県教育委員会が実施した。
5. 発掘調査は、中原山野遺跡は昭和62年6月15日～昭和63年3月9日と昭和63年4月27日～8月31日に実施した。整理作業は、平成元年度に実施した。
6. 発掘調査に当たっては、鹿屋市教育委員会や郷之原町内会の協力・援助を得た。
7. 本書で用いたレベル数値は、すべて海拔高である。
8. 現地調査に関する実測及び写真撮影は、調査担当者(新東晃一・前追亮一・梅北浩一・八木澤一郎・中村和美)で行った。
9. 出土遺物の実測・製図は八木澤一郎・新東が行ない、本書の執筆は、新東が担当した。
10. 本書の編集は、鹿児島県教育庁文化課で行い、新東がこれを担当した。

本 文 目 次

第 I 章 中原山野遺跡の概要.....	1
第 1 節 調査の経緯.....	1
第 2 節 調査の方法と経過.....	1
第 3 節 発掘調査の概要.....	4
第 4 節 遺跡の層位.....	4
第 II 章 碑文時代の調査.....	11
第 1 節 調査の概要.....	11
第 2 節 X層の調査.....	11
第 3 節 V層の調査.....	18
第 III 章 刀生時代の調査.....	20
第 1 節 調査の概要.....	20
第 2 節 III層の調査.....	20
第 IV 章 発掘調査のまとめ.....	39

挿 図 目 次

第1図 中原山野遺跡の地形とグリッド配置図	2
第2図 大浦・郷之原地区の基本的層序と中原山野遺跡の層位	5
第3図 中原山野遺跡の層位図（1）	7
第4図 中原山野遺跡の層位図（2）	9
第5図 X層の遺構と遺物分布図	12
第6図 1号集石実測図	13
第7図 1号集石の石塊の最大長と重量比	13
第8図 土器実測図（1）	15
第9図 土器実測図（2）	16
第10図 土器実測図（3）	17
第11図 石器実測図	17
第12図 V層の遺物分布図	18
第13図 土器実測図	19
第14図 石器実測図	19
第15図 III層の遺構と遺物分布図	21
第16図 1号住居址の遺物分布図	23
第17図 1号住居址の遺物出土状況図	24
第18図 1号住居址実測図	25
第19図 1号住居址出土遺物実測図（1）	27
第20図 1号住居址出土遺物実測図（2）	28
第21図 1号住居址出土遺物実測図（3）	29
第22図 1号住居址出土遺物実測図（4）	30
第23図 1号住居址出土遺物実測図（5）	31
第24図 1号住居址出土遺物実測図（6）	32
第25図 1号住居址出土の破碎礫出土状況	32
第26図 1号住居址出土の破碎礫	33
第27図 出土遺物実測図	35

図 版 目 次

図版 1	1. 中原山野遺跡遠景（西から）	43
	2. 確認調査風景	
図版 2	1. D区列発掘調査状況（東から）	44
	2. B14区以東確認調査状況（西から）	
図版 3	1. 裸文土器（早期）	45
図版 4	1. 石器（早期）	46
	2. 中原山野遺跡の層序	
	3. D10区付近のⅤ層谷部状況	
図版 5	1. 裸文土器（Ⅵ層）	47
	2. 石器（Ⅵ層）	
図版 6	1. 1号住居址掘り下げ状況（北西から）	48
	2. 1号住居址遺物出土状況（北から）	
図版 7	1. 1号住居址全景（北から）	49
	2. 1号住居址全景（北から）	
図版 8	1. 1号住居址出土遺物（1）	50
図版 9	1. 1号住居址出土遺物（2）	51
図版10	1. 1号住居址出土遺物（3）	52
図版11	1. 1号住居址出土遺物（4）	53
図版12	1. 弥生土器（1）	54
	2. 弥生土器（2）	

第 I 章 調査の概要

第1節 調査の経緯

中原山野遺跡は、郷之原台地の中央を通る県道郷之原～西原線の東側の平坦地に位置し、前畠遺跡に隣接している。

昭和59年度の分布調査では、ほぼ中央部の庭木生産畑地で遺物の散布がみられたため、これを第5地点とした。

建設省大隅工事事務所と鹿児島県教育委員会との協議に基づき、昭和60年4月確認調査を実施した。確認調査は、遺物散布地部分は庭木生産畑地のためにトレンチは設定できず、その東側の畠地に1本設定した。確認調査の結果、この部分は丁度谷状の凹地となっており、その黒色の腐植土中に堆積した状態で土器片が出土した。この出土状態から、遺跡は、その西側に存在することが想定された。

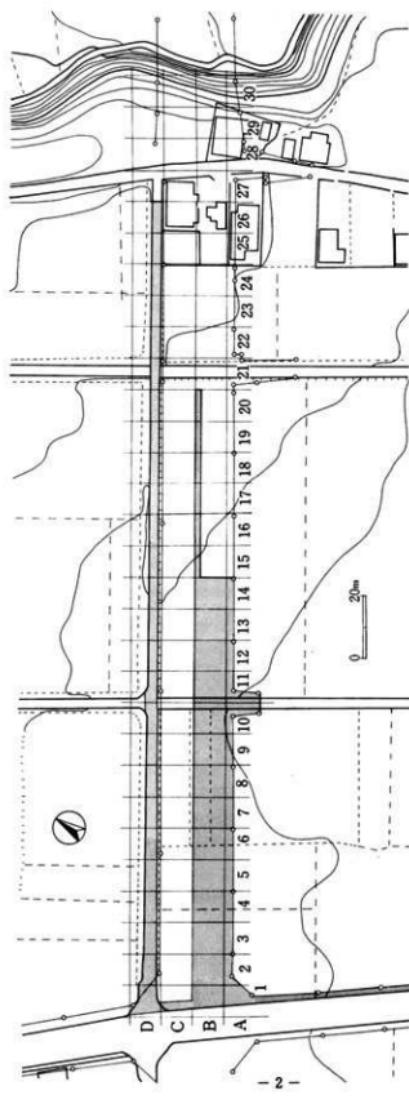
建設省大隅工事事務所と鹿児島県教育委員会との協議の結果、この第4地点は、昭和62年度に再度確認調査を実施することとした。

第2節 発掘調査の方法と経過

中原山野遺跡の再度の確認調査は、昭和62年6月15日から7月15日の1ヶ月間、前畠遺跡の確認調査と並行して実施した。遺跡の想定をもとに、工事用センター杭No.407とNo.410を基準に10m×10mのグリッド網を確認調査対象区に被せ実施した。そして、グリッドは、西端から1～10区と南からA～C区として、各グリッドはA1区……A10区、B1区……B10区などと呼称することとした。そのグリッドの東側に2m×10mの確認調査トレンチを1グリッド毎に設定した。しかし、A B13区以東は未買収地のため、用地買収後さらに実施することとし一応確認調査を終了した。

昭和62年度の中原山野遺跡の発掘調査は、用地買収完了部分の確認調査と配水溝建設部分・上水道埋設部分等の確認調査及び発掘調査を実施した。発掘調査は、昭和62年6月15日から昭和63年3月9日に実施したが、工事との関係で前畠遺跡と並行して実施せざるを得なかった。本道部分は、本年度は用地買収完了部分の確認調査だけで調査は終了した。排水溝建設部分・上水道埋設部分（通信ケーブル・電線ケーブルを含む）の調査は、まず確認調査後、続けて本調査を実施した。

昭和63年度の調査は、AB1区・AB2区の縄文時代早期の調査とAB7区～AB14区付近の弥生時代の調査を行なった。その結果、AX10区・AX11区に約7m級の大型住居址を検出して発掘調査を終了した。以下、発掘調査の経過は日誌抄をもって説明する。



第1図 中原山野遺跡の地形とグリッド配置図

【昭和62年度の調査】

(昭和62年 6月15日～7月14日、昭和62年10月19日～昭和63年1月26日)

6月15日から発掘調査の準備及び調査の開始。調査事務所等を建設し調査区を設定して、トレンチ4からトレンチ9の確認調査。その間、前畠遺跡の確認調査も並行する。

7月は、トレンチ11・12の掘り下げに入る。A B12区以西の確認調査トレンチの掘り下げ作業に終始。未買収地があるため14日で確認調査を一旦終了する。

10月19日、調査再開。A B 1区～A B 4区付近の本調査に入る。誘導路の発掘。清掃・写真撮影。28日、排水溝工事の現農道の新規発掘調査に入る。

11月は、D 1区～D 26区までの確認調査を実施。戦跡遺構や道路、ピットなどが確認される。確認トレンチの断面図や戦跡遺構の検出に終始。

12月は、D 1区から南の県道西原～郷之原線に沿った上水道埋設工事及び電話・電気埋設工事に伴なう調査に終始。戦跡遺構と繩文時代早期の包含層を検出。年度末は25日で終了。

1月は6日から発掘調査開始。D 8区～D 14区の弥生時代包含層の調査。D 11区からD 12区付近が最も低く谷状になる。さらに、弥生時代の下層に黄褐色軽石粒混暗褐色土層の火山灰類似の層が厚く確認され、その下の黒褐色土層から繩文時代晚期の土器片を検出。平面に広げて晚期層を調査。26日、本年度の中原山野遺跡の調査は終了する。

【昭和63年度の調査】 (昭和63年4月27日～8月31日)

4月は、発掘調査の準備及び調査の開始。昨年度の残部から調査を始める。前畠遺跡から調査に入り、中原山野遺跡には若干遅れて27日から入る。A B 7区～A B 8区の表土剥ぎ作業から開始。前畠遺跡と並行して調査を進める。

5月は、前半はA B 7区～A B 8区の遺構検出。前畠遺跡の調査との関係で一時中断し、23日からA B 14区以西のトレンチ調査を再開。その結果、A B 14区までの弥生時代包含層が確認され、中原山野遺跡の範囲が確認される。弥生時代以降については削平を受けている。

6月は、A B 10区～A B 14区の平面調査。表土剥ぎから弥生時代包含層の掘り下げ作業。12日は「古代探訪」開催。中原山野遺跡と前畠遺跡で遺跡発掘実践活動。その後は、前畠遺跡へ移動し、中原山野遺跡の調査は休止。

7月は、前半A B 7区～A B 14区の遺構検出作業を行い前畠遺跡の都合でしばらく休止。月末C 1区～C 4区の誘導路部分の拡張区の調査。

8月は、A B 10区付近の旧道と取り付け道路部分に入る。表土剥ぎから弥生時代包含層に達する。17日、A X 10区～A X 11区に弥生時代住居址検出。約7m級の大型の間仕切りを持つタイプの住居址。主居址の掘り下げ、実測、写真撮影等の作業を月末まで継続。B C 11区～B C 14区の最終の検出作業。下層確認の深掘りを完了し、住居址1号の最終実測・写真撮影を終了。31日、中原山野遺跡の発掘調査を終了する。

第3節 発掘調査の概要

中原山野遺跡の本道部分の確認調査は、A～B26区まで実施した。その結果、戦跡造構及び弥生時代遺物包含層、縄文時代（晚期・早期）遺物包含層が確認された。

A～B1区からA～B4区までの全面調査を実施したところ、幹線にあたる誘導路（戦跡造構）が検出された。誘導路は、約17m 幅を測り、両脇に排水溝を備えたものである。誘導路は中央に、鹿屋市荒平産の採石を數いた大規模な道路である。両脇の排水溝内には、戦時中の遺品が多量に出土している。なおB7区付近から以東については、農地整備や耕作のために削平されている。

弥生時代の遺物包含層は、AB7区～AB14区にかけてⅢ層に存在する。そして、AB10区の取付道路付近で、花弁状の間仕切りを持つ竪穴住居址が検出された。直径約7m の円形住居址で、内部からは遺物がかなり出土している。住居址は一基だけの発見であったが、集落は南側の用地外に延びる可能性がある。

そのほか、AB1・2区付近やそれ以南の上水道埋設部分から縄文時代早期の包含層が検出された。確認調査の結果、中原山野遺跡の早期包含層は、AB2区以東には確認されなかった。包含層の広がりは前畠遺跡へ延びており、前畠遺跡の縄文時代早期包含層に包括される状態である。

排水溝建設部分の確認調査及び本調査の結果、D1区～D26区にかけて道路や溝やピットなどの戦跡造構が検出された。さらに、D8区～14区にかけては弥生時代（中期）の遺物包含層と縄文時代（晚期）の遺物包含層を発掘調査した。

中原山野遺跡の層位では、特に弥生時代包含層の下部にみられる黄白色土層に注目される。この層は、二次堆積の可能性も強いが、他の遺跡でも弥生時代包含層の下層に確認される無遺物層であるところから、この時期の鍵層となることが考えられる。

第4節 遺跡の層位

中原山野遺跡の層位は、発掘調査対象区が約300m に長さに及び、しかも中央部に大きな谷部が形成されるため大きな変化がみられる。提示した層位柱状図は谷部近くのB16区付近であるが、この付近はⅣ層が最も厚く整然とした堆積がみられる。Ⅳ層は、中ノ原遺跡や前畠遺跡でみられた弥生時代包含層の下位に確認された火山灰状の層にあたり、中原山野遺跡でその層の実態が明かとなった。しかも、普通弥生時代の竪穴住居址はアカホヤ火山灰（罹層）を床面として構築されているが、本遺跡ではこのⅣ層を床面として構築されている。非常に興味ある事実を確認したことになる。

挿図の第2図～第3図は、中原山野遺跡の層位断面図である。層位断面図の作成にあたっては、発掘調査対象区が道路建設で東西に長く延びるため、南北に延びた台地を輪切りにした形

でB区別の北側断面図を1本通した。そして、東側に原則として2グリッド毎に層位図を作成し、東側断面図を提示した。

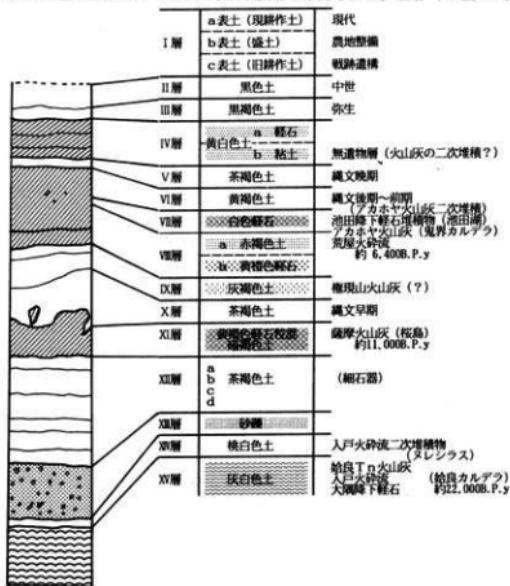
中原山野遺跡の層位は、ほぼ大浦・郷之原地区の基本的層位に対応している。各層は、順次みると次のようになる。

I層は、旧地形が凹部ため比較的良好に残存している。b層（農業基盤整備時の盛土）やc層（旧耕作土）も比較的良好に残存しており、農業基盤整備以前の旧道路等も確認される。

II層は、黒色土層でAB7区～AB14区付近は良好に残存しているが、これに伴なうと考えられる遺構・遺物は確認されていない。

III層は、黒褐色土層でAB7区～AB14区付近にみられ、弥生時代包含層を形成する。そして、AX10区～AX11区には、約7m級の大型の竪穴住居址が検出された。竪穴住居址は、下層のIV層を基盤に築かれている。III層の弥生時代包含層は、ほぼ中央の北側の用地外には谷部が形成されているところから、この住居址や包含層はその北限と考えられ、その中心は南側の用地外に延びることが想定される。

IV層は、黄白色土層の40cm～60cmの厚い堆積層で確認される。上層（a層）は軽石層を形成



第2図 大浦・郷之原地区の基本的層序と中原山野遺跡の層位

し、下層（b層）は堅い粘質土層である。中ノ原遺跡や前畠遺跡などで弥生時代包含層下に確認される火山灰状の黄白土層がこれに当たり、中原山野遺跡では軽石層と粘質土層に区分された厚い堆積土層を形成している。従来、アカホヤ火山灰層を基盤にして床面が築かれる弥生時代の整穴住居址は、本遺跡ではこのIV層を床面としている。このIV層は、それほど厚くしっかりした堆積層となっている。

V層は、茶褐色土層～黒褐色土層を呈する層で、D8区～D10区では縄文時代晩期の土器を包含している。特に、上層のIV層が厚い本遺跡では、若干黒色が強い傾向がみられる。

VI層は、黄褐色土層で下層（Ⅴ層）の白色軽石層でやっと区分される。VI層は、従来、縄文時代前期～後期の遺物包含層を形成する場合が多いが、中原山野遺跡では遺物は包含していない。

VII層は、VI層とⅤ層の間に見られる軽石層であり、白色軽石粒が浮遊した状態で看取され、明瞭な層の形成はみられない。軽石層は、池田湖の噴出物で「池田降下軽石」と呼ばれているものである。

Ⅷ層は、赤褐色土層と下位に黄橙色軽石層を含むもので、鬼界カルデラ噴出の「アカホヤ火山灰」に相当する。Ⅷ層は非常に堅いⅨ層の赤褐色土層が大部分を占め、「幸屋火碎流」に比定されるものである。これまでこの「幸屋火碎流」直下の炭化木から得られた¹⁴C測定年代値は約4,400B.P.yで、これが「アカホヤ火山灰」の降灰年代とされている。

IX層は、中原山野遺跡では部分的に確認され、全体的には見られない。この層は、「権現山火山灰」と呼ばれるものに相当する。

X層は、茶褐色土層の粘質土で縄文時代早期の包含層を形成する。この縄文時代早期包含層は、A B1区～A B2区にかけて確認されており、基本的には前畠遺跡の包含層の領域に含まれるものであろう。

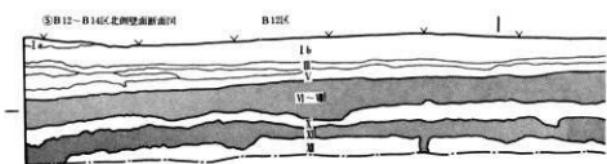
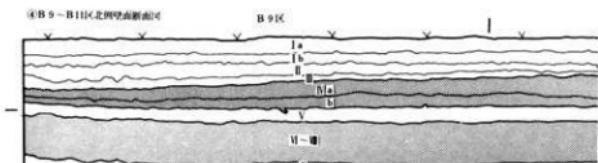
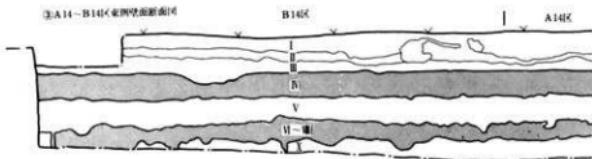
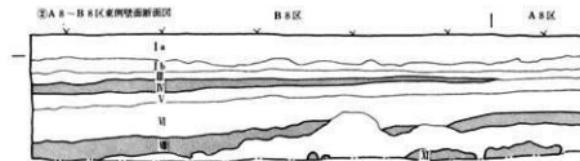
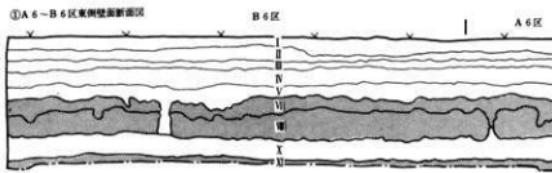
XI層は、黄褐色軽石粒混暗褐色土層で「薩摩火山灰」と呼ばれる火山灰堆積物である。中原山野遺跡では、部分的にブロック状に止切れる部分もあるが、ほとんどが層形成されて残存している。この「薩摩火山灰」は、¹⁴C測定年代値によって約11,000B.P.yの降灰とされている。

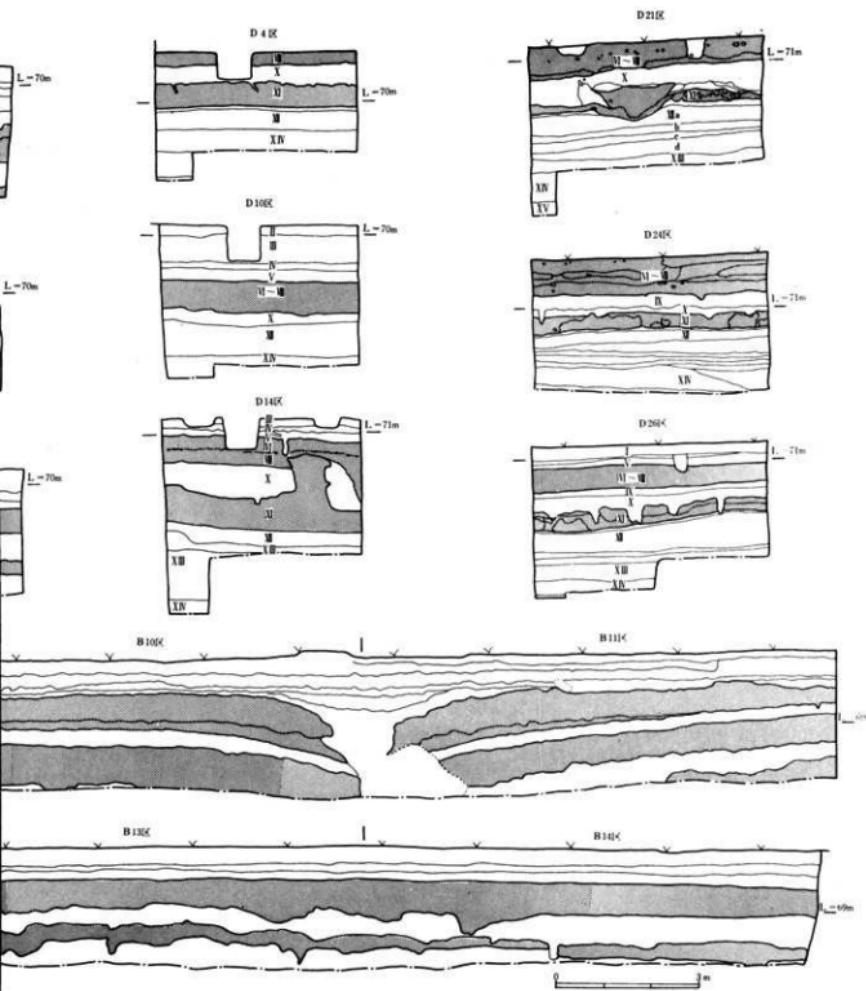
XII層は、茶褐色土層の粘質土層である。この層は南九州ではチョコレート層と呼ばれ一般的には細石器が含まれるが、中原山野遺跡では細石器包含層は確認されていない。

XIII層は、砂礫層である。中原山野遺跡では、砂礫混土層を含めて東側の台地先端部に形成されている。梗田下遺跡や中ノ丸遺跡でも東側台地先端にみられ、同様な傾向で形成されるようである。

XIV層は、桃白色土層の通称「スレシラス」と呼ばれる「入戸火碎流」の二次堆積物である。

XV層は、「入戸火碎流堆積物」で通称「シラス」と呼ばれている。本県では、通常数m～數十 mの厚い堆積がみられる。本遺跡では基盤層となっている。





第3図 中原山野遺跡の層位図（1）

第Ⅱ章 繩文時代の調査

第1節 調査の概要

縄文時代の調査は、確認調査の結果をもとに上層の中・近世～弥生時代の調査終了後に行なつたが、建設工事の進行と年度毎の進捗状況によって各区の調査行程は若干異なっている。

中原山野遺跡の縄文時代は、X層（アカホヤ火山灰下層）に早期に該当する時期（Y～D区-1～2区の範囲）と、V層に晚期に該当する時期（D8区～D10区の範囲）の2時期の包含層が検出された。

調査は、該当層の遺物包含層の掘り下げ作業後、遺物の検出作業、出土状態の写真撮影・実測作業、遺構検出作業の順の行程で進行した。

縄文時代（X層・V層）の確認調査については、AB2区～AB14区までは20m毎に2m×12mの南北トレンチで確認調査を実施し、AB15区以東についてはB区北側に東西のトレンチ調査を実施した。その結果、X層の包含層はY～B1区からAB2区に確認され、V層の包含層はD8区～D10区に確認された。そして各々の全面調査を行なった。

X層は、総数232点の遺物のほか集石遺構1基が検出されている。V層には、総数11点の遺物の出土がみられた。

第2節 X層の調査

1 X層の概要

X層で早期包含層が確認されたのは、本道建設部分のA～B1～2区と県道西原～郷之原線の水道管理設工事部分のY～Z1区の範囲である。このことから包含層の分布範囲は西側の県道西原～郷之原線に沿った僅かな部分であり、基本的には西側に隣接する前畠遺跡の早期包含層に包括される可能性が強い。X層の包含層からは、集石遺構1基（A2区）のほか総数232点の遺物が出土している。

X層の出土遺物は、調査地点が遺跡の末端部に位置し、さらに包含層の広がりが狭いことから、比較的少ない。出土土器は総数229点を数え、1点（Ⅱ類土器）を除きほとんど同形態であることが考えられる。これらは、断片的な資料ではあるが前畠遺跡の主体をなす土器群に類似している。このことからも前畠遺跡との関連が考慮される。石器は、打製石器（2点）と磨石のわずか3点と少ない。

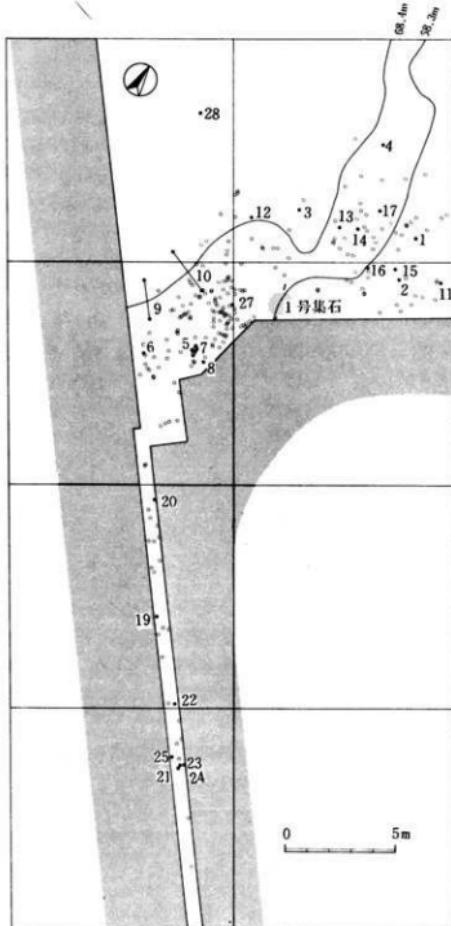
2 遺構

遺構は、X層下面に集石遺構が1基検出された。集石遺構の時期は、共伴する確かな遺物はみられないが、遺物の層位的な出土傾向から包含層の形成された時期に該当することが考えら

れる。遺跡は、包含層の検出状態から南側の用地外から前畠遺跡へと広がることが想定される。

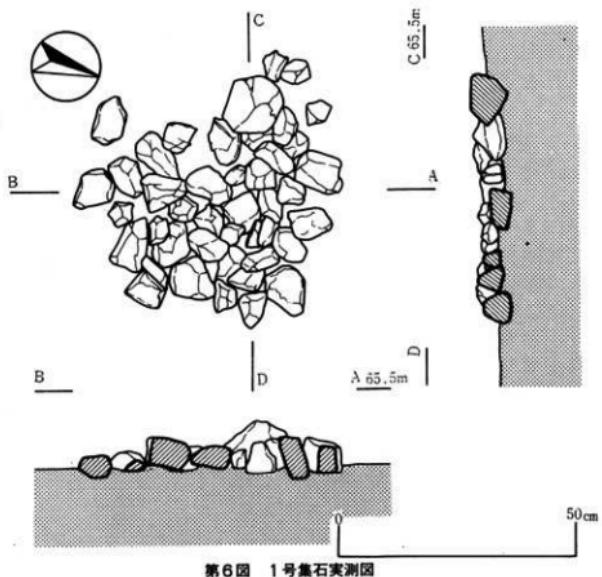
集石1号（第6図）

集石遺構1号は、A2区の用地外に近い位置に検出されている。集石1号は、径60cm×60cmの円形プランを呈した小規模なものである。集石は、掘り込みはみられず平坦面に集められた状態である。集石の石材はすべて輝緑岩で、総数47個で、ほとんどが角礫で構成されている。集石に使用された輝緑岩は、遺跡の北方の高隈山系（現在の採石場と同じ岩）に産する礫岩と考えられる。礫は、火を受けたためか若干赤味を帯びている。石礫の大きさと重さの内訳は、次のようになる。大きさは、5cm未満のものが2個と10cm以上のが6個で、他の39個は5cmから10cm内に納まる大きさである。重さでみると、0~100g=5個、101~200g=15個、201~300g=8個、301~400g=12個、401~500g=3個、

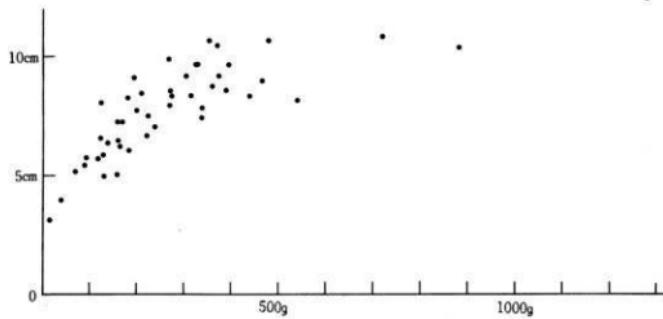


第5図 X層の遺構と遺物分布図

501 g 以上
= 4 個で、
100~400 g
の重さに集
中している。
第7図は大
きさ・重さ
の重量比を
現わしたグ
ラフである
が、大きさ・
重さとも比
較的小振り
な礫を使用
しているこ
となる。



第6図 1号集石実測図



第7図 1号集石の石塊の最大長と重量比

3 出土遺物

X層出土の遺物には、土器と石器がある。土器は、総数229点を数えるが、大部分が細片で文様などは明確でなく保存状況は比較的悪い。石器は、打製石鏃（2点）と磨石の計3点と少ない。

① 土器

X層出土の土器は、総数229点の出土があり、そのうち実測可能なものは25点である。

出土土器は、本道建設部分のA～B 1～2区と県道西原～郷之原線の水道管理設部分のY～Z 1区に分かれるが、18（D11区出土）の1点を除けばほぼ類似する形態である。このため、本道建設部分のA～B 1～2区出土の1～17と県道西原～郷之原線の水道管理設部分のY～Z 1区出土の19～25をI類土器に類別する。そして、形態が若干異なるD11区出土の18は、II類土器に類別して説明する。

I類土器（第8図～第10図-1～17・19～25）

I類土器は、A～B 1～2区とY～Z 1区にかけて総数228点の出土がみられ、そのうち24点が実測可能なものであった。基本的には、口縁部は「く」字に外反して波状口縁をなすタイプである。1・2のように凹線文と円形刺突連点文で文様を構成するものが考えられるが、5・6に代表されるように器形は類似するが文様が施文されない無文のタイプが比較的多いのが本道跡の特徴といえる。以下、個別に説明する。

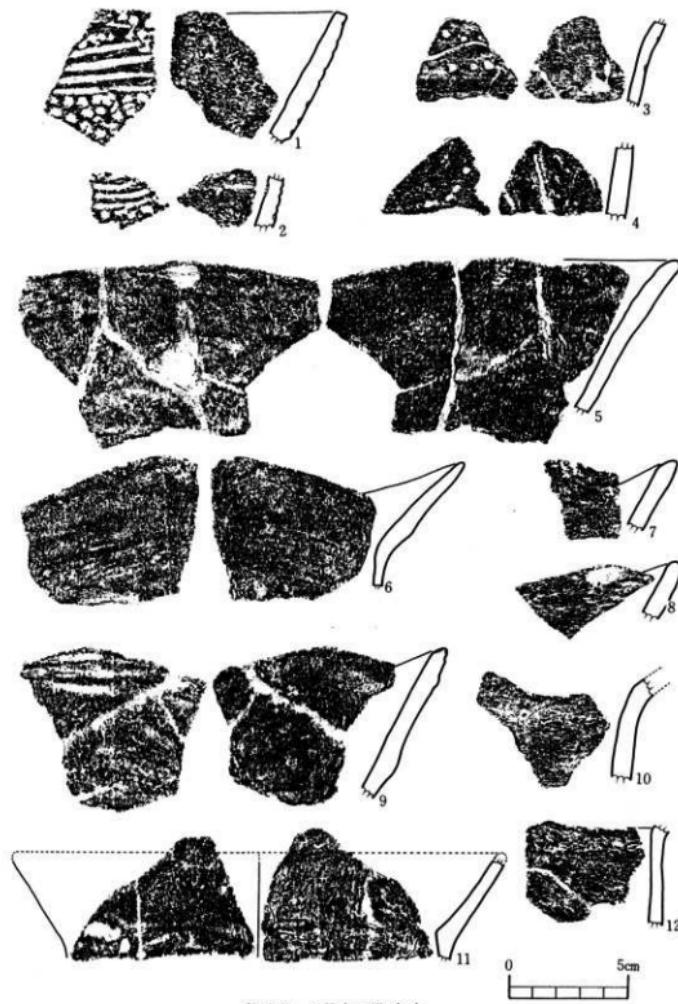
1・2は、同施文形態で同一個体と考えられるもので、外反する口縁部片である。口唇部は平坦に納め、その平坦面には刻目を施す。口縁外面には、平行凹線文と円形刺突連点文を施す。

3は、頸部から口縁部付近の外反する部位で、2列の円形刺突連点文間に波状の凹線文が施文される。4は、保存が悪く拓本が鮮明に打ち出されていないが、円形刺突連点文が幾何学的に施文されるタイプである。

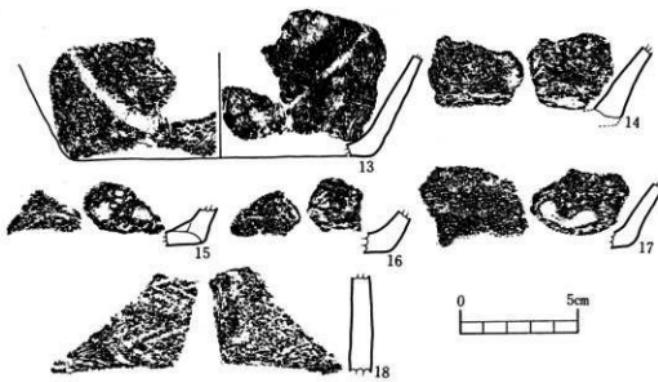
5～11は、口縁部付近の破片で無文のタイプである。5は平縁口縁が看取されるが、6～9は波状口縁を呈する。口縁部は、二重口縁状の屈曲をもって大きく外反する。ほとんどが無文であるが、9の波頂部には僅かに施文がみられる。波頂部の口唇平坦部には刻目が施され、口縁外面の波頂部下位には横位に突帯文が貼付される。そのほかの器内外面はいずれも無文である。

「く」字口縁をなす頸部の状態を観察できるものは少ないが、6・10は丸みをもって屈曲している。11・12は鋭く屈曲して内面に棱をつくる。この違いは型式の違いが考えられるが、いずれも器面が無文のため不明である。

13～17は、底部片である。いずれも平底の底部から胴部へ大きく外反して立ち上がる。13は底径が観測できるものであるが、約12.8cmと比較的大きい底径をもつ。器面は摩滅が強いが、



第8図 土器実測図 (1)



第9図 土器実測図(2)

丁寧なナデ整形が看取される。

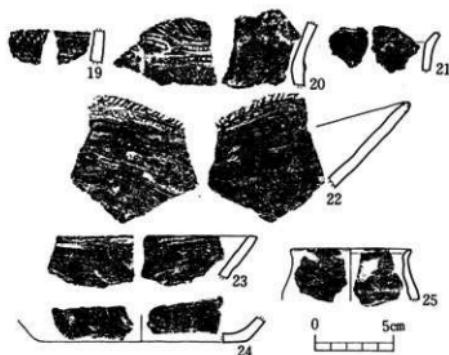
19～25は、県道西原～郷之原線の水道管埋設部分のY～Z 1区出土のものである。

19は細片であるが、縄文の施文が看取される。20は、頸部の屈曲部付近である。内面には稜はみられず比較的柔らかく屈曲し、屈曲部分の外側には突帯文を施し、その上には刺突文が施されるが、全体に摩耗が激しいため不明瞭である。突帯文の上部には凹縞文が施文されるが、これも摩耗のため不明瞭である。21も頸部屈曲付近である。頸部が鋭く屈曲するため内面には稜をつくる。22・23は、口縁部片である。22は波状口縁の波頂部で、口唇部付近に施文がみられる。口唇部の外側の稜部には斜位に刻目が施文され、口唇部の内側と外側の刻目の直下には半截竹管状の施文具の刺突文が施文されるだけで、他の器面は無文で放置される。23も無文の口縁部片であるが、口唇部は平坦面をつくる。細片のため平縁口縁状にみられるが、波状口縁の可能性も強い。24は、底径約13cmが推測される底部片である。

25は、口縁部が縮まった臺形の器形を呈する細片である。内外面はナデ整形で仕上げた無文の臺形土器で、口径約7.5cmの小形である。

Ⅱ類土器（第9図-18）

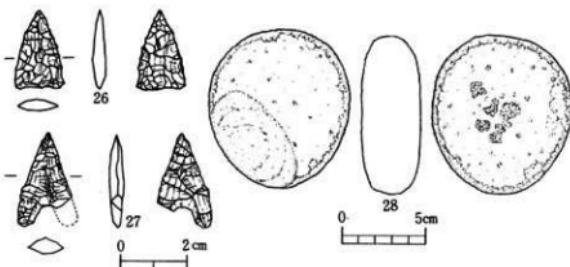
18は、D11区のⅢ層出土の胸部片である。Ⅱ類土器は、Ⅰ類土器とは出土区が全然異なり、また、出土層位もⅢ層の弥生期の包含層に混入して出土している。さらに、摩耗が激しく、土器片の表面は剥落している。しかし、胎土には長石や石英粒を多量に含み、非常に堅緻な焼成である。器面には、貝殻腹縁の刺突文が羽状に施文されている。



第10図 土器実測図（3）

② 石器（第11図-26～28）

石器は、打製石鎌2点と磨石1点の計3点の出土である。26は、D1区のX層出土の打製石鎌である。長さ2.3cm、幅1.2cm、重さ1.0gを測る平基式のタイプである。石材は、石英である。



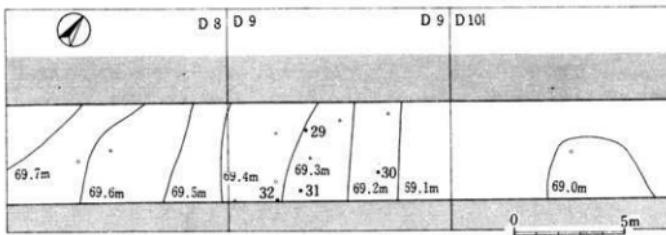
第11図 石器実測図

27は、A 1区のⅩ層出土の打製石鏃である。長さ2.8cm、幅1.6cm、重さ1.4gを測る凹基式のタイプである。石材は、黒耀石である。

28は、B 1区のⅩ層出土の磨石である。長さ9.5cm、幅8.3cm、重さ410gを測る。石材は、花崗岩である。

第2節 V層の調査

V層の調査は、確認調査の各トレンチにおいて包含層の確認を行なった。その結果、D 8区～D 10区において遺物包含層が確認され、この部分を拡張して調査を行なった。遺物総数は7点で、すべて土器である。土器は、研磨仕上げの精製土器と条痕仕上げの粗製土器があり、4点が実測可能であった。V層包含層からは、そのほかに6点の礫が確認されている。V層出土の土器は、その形態から縄文時代晚期に該当するもので、層位的にも符合するものである。V層出土の土器を、Ⅲ類土器とする。なお、周辺のV層該当層やⅢ層から磨製石斧1点と打製石斧2点が出土している。



第12図 V層の遺物分布図

① 土器

Ⅲ類土器 (第13図-29～32)

V層出土の縄文時代晚期に該当する土器は7点出土し、そのうち4点が実測可能であった。いずれも細片のため、器形等は不明である。

29・30は、研磨仕上げの精製土器である。29は、若干膨らみをもって厚くなり口唇部を丸く納める口縁部片である。30は、内面に外反するとき生じた稜をもつ頭部付近の破片である。

31・32は、器内外面を条痕で仕上げるタイプで、特に外面の条痕は強く深い。

② 石器 (第14図-33～35)

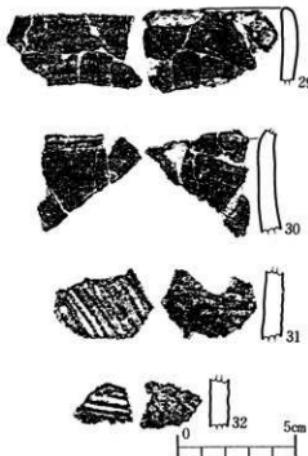
石器は、V層該当層やⅢ層（弥生時代包含層）から磨製石斧片1点と打製石斧2点が出土し

ている。縄文時代後期から晩期に該当するものと考えられる。

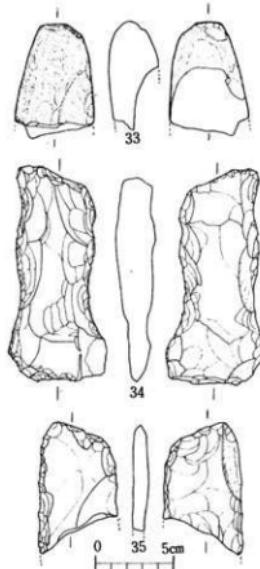
33は、D22区のV層出土の磨製石斧片である。乳棒状石斧の形態で、大きく破碎された基部だけの残存部と考えられる。石材はホルンフェルスである。

34は、表掲資料の打製石斧である。上下端を僅かに欠くがほぼ完形に近いものである。中央より下半に有肩状のえぐりをもつものである。石材は、粘板岩である。

35は、D12区の弥生時代包含層から出土した打製石斧の半截品である。石材は、粘板岩である。



第13図 土器実測図



第14図 石器実測図

第Ⅲ章 弥生時代の調査

第1節 調査の概要

中原山野遺跡は、確認調査では、AB7区～AB14区間に弥生時代の遺物が散発的に出土した。

本調査の結果、弥生時代包含層は後世の削平を受け辛うじて残存する形であったが、AB10区の取り付け道路付近に花弁状の間仕切りを備えた竪穴住居址が検出され、弥生時代の遺構の存在が確認された。

弥生時代の地形はB11区を中心にして北側に向けて大きく凹地を形成しており、今回の本線調査区部分は中原山野遺跡の北端に位置していることを窺い知ることができる。すなわち、AB10区で検出された住居址はこの集落の最北端の遺構として捉えることができ、中心は南側の用地外に存在することが想定される。

本遺跡で注目すべき成果のひとつに、弥生時代包含層や遺構（住居址）の基盤となっているIV層の火山灰状の軽石・粘土層の存在である。この軽石・粘土層は、アカホヤ火山灰層に酷似している。これまで、中ノ原遺跡や中ノ丸遺跡、前畠遺跡などにおいてはⅣ層のいわゆるアカホヤ火山灰を基盤として弥生時代の各遺構が存在しているが、本遺跡ではⅣ層に酷似した土質のIV層上に遺構が存在している。このことは、地層と弥生時代の遺構との問題に新たな視点を与えてくれた。

第2節 遺構

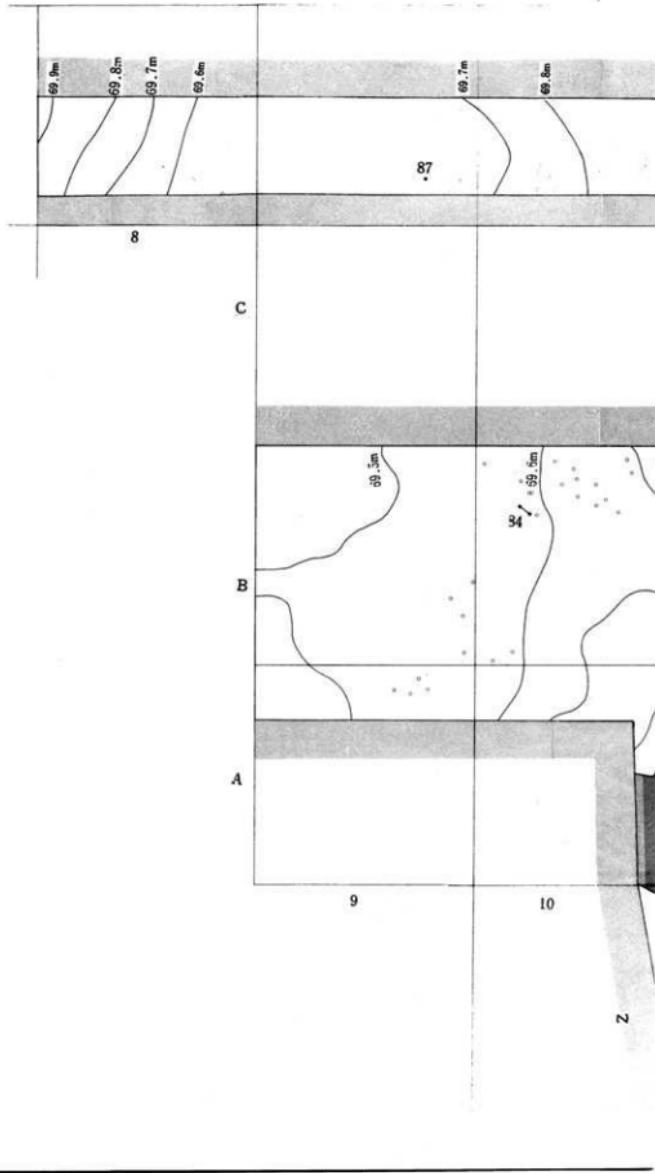
弥生時代の遺構は、A10区を中心に検出された竪穴住居址が1基のみで他の遺構はみられない。しかし、今回の発掘調査によって、中原山野遺跡の北端を確認することができ、遺跡の中心は南側の用地外に広がることが判明した。

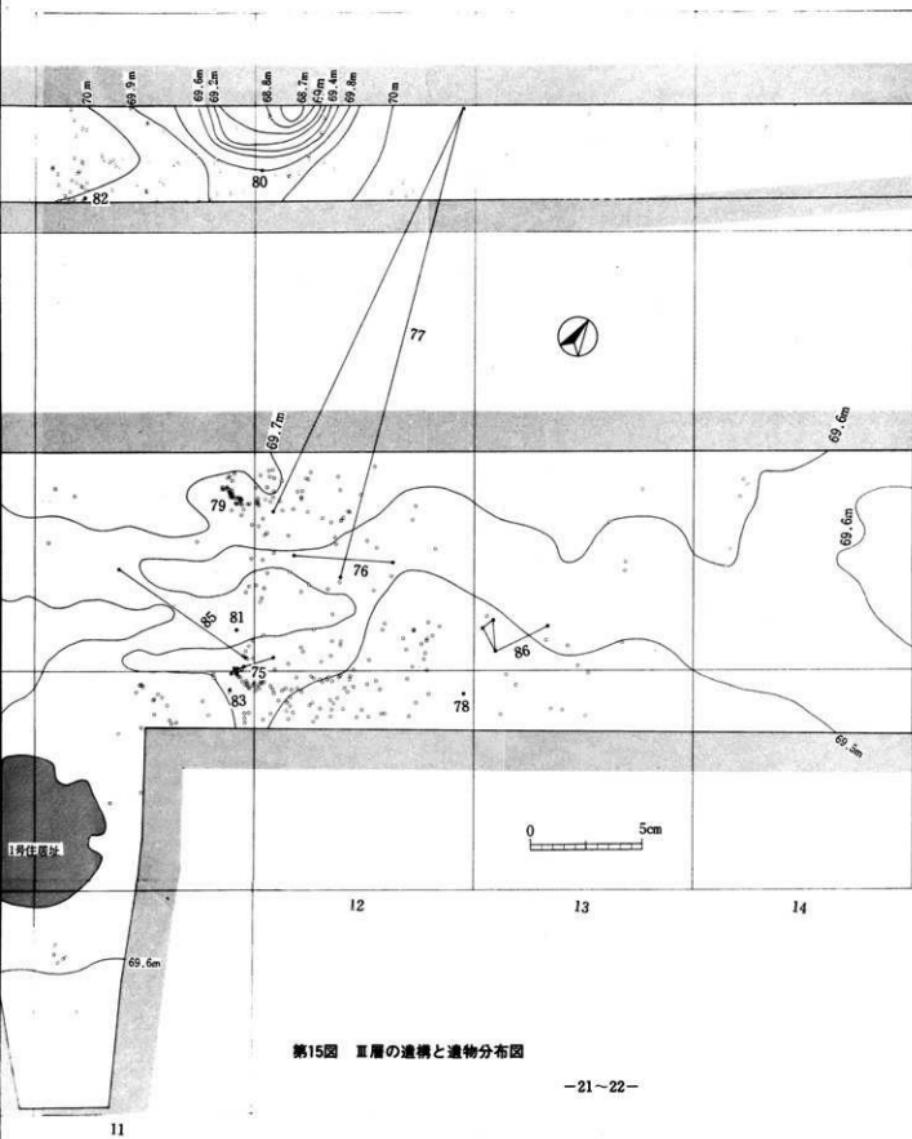
1号住居址は、A10区を中心とした取り付け道路付近に検出され、住居址の一部は西側のA9区へ延びている。なお、B区別の本道調査区では出土遺物はみられるものの遺構は検出されないところから本住居址は、本遺跡の北限の遺構と考えられる。発掘調査の結果、住居址の内部構造は次のようである。

1 1号住居址 （第16図～第18図）

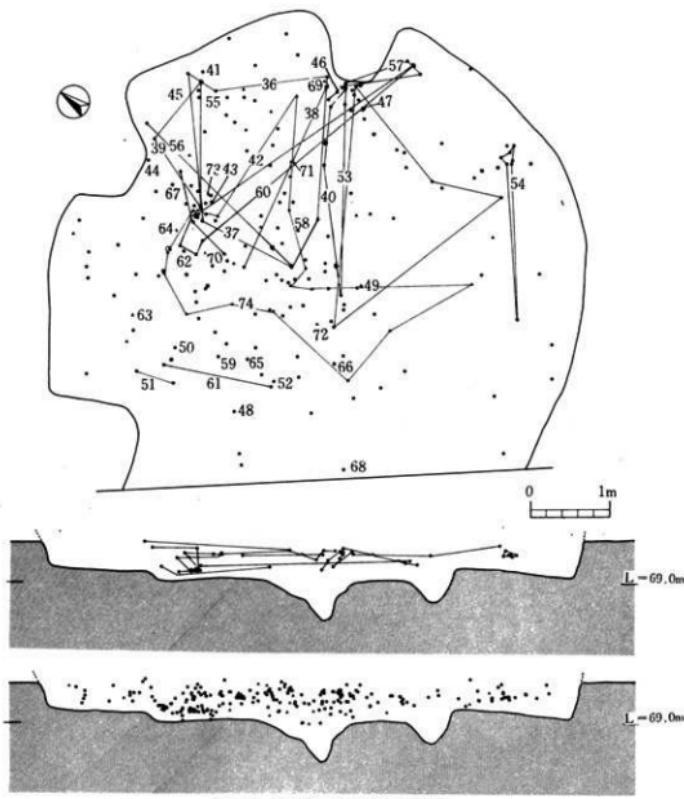
1号住居址は、ほぼ円形のプランで検出され、西側は一部用地外に延びる。住居址は、IV層の火山灰堆積層に掘り込まれ、この火山灰堆積層の下部を床面にしている。

検出面での住居址の平面プランの直径は、6.90mから7.20mを測り、約7m程度の規模である。住居址の周壁は、北西側と北東側と東側の三ヶ所に住居址の内部へ延びた間仕切りをつく

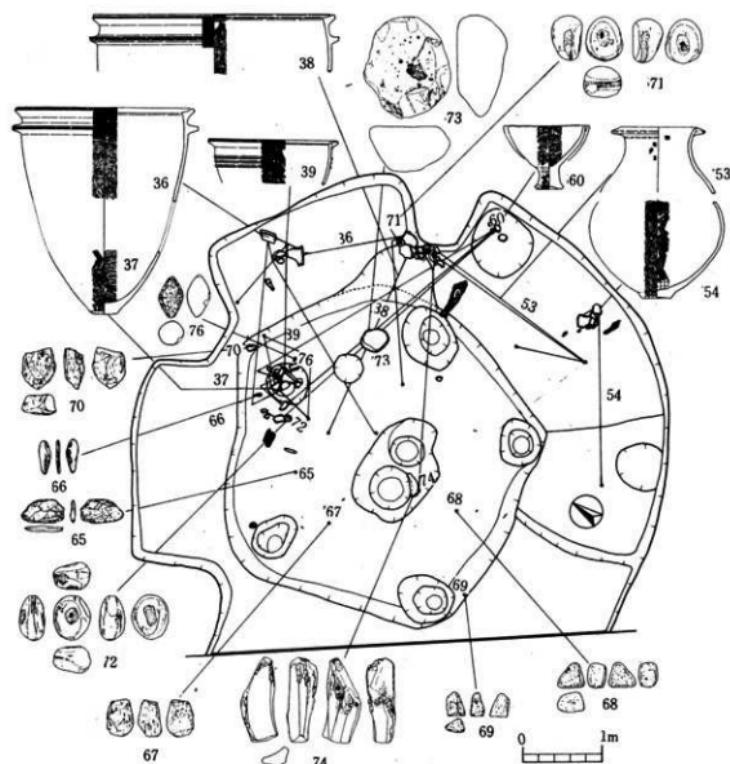




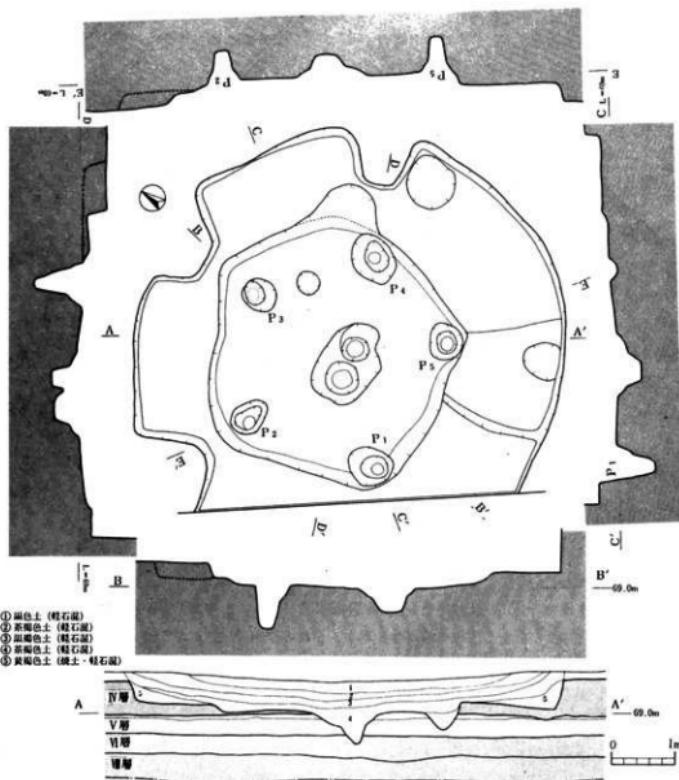
第15図 三層の遺構と遺物分布図



第16図 1号住居址の遺物分布図



第17図 1号住居址の遺物出土状況図



第18圖 1号住居址実測図

る。いわゆる花弁型住居址のタイプに属する。

住居址の床面は、中央が掘りコタツ状に一段低くなるタイプである。一段低い中央床面の深さは、約20cmを測る。そして、この中央の一段低くなった床面の隅には五本の主柱が位置している。主柱間の距離は、P₁～P₂は2.20m、P₂～P₃が2.05m、P₃～P₄が2.00m、P₄～P₅が1.80m、P₅～P₁が2.25mを測る。各柱穴は、ほぼ均一に配置している。住居址中央には、1.40m×0.90mの楕円形の掘り形をもつピットが存在する。そして、ピット内はさらに二つのピットに分かれれる。ピットの深さは、床面から約0.50m～0.60mを測る。ピット内の埋土には、灰が多量に存在しており、炉穴の可能性が強い。

柱穴の規模は、P₁は径55cm×深さ60cm、P₂は径50cm×深さ50cm、P₃は径60cm×深さ70cm、P₄は径75cm×深さ75cm、P₅は径50cm×深さ60cmを測り、いずれも規模は大きい。

周壁から延びる間仕切りは、約0.7m～0.8m程度、住居址内部へ張り出し、また、この三ヶ所の間仕切りの延長上には住居址の柱穴が位置している。この間仕切りに囲まれた部分は、一種のベッド状造構となる。検出面の間仕切り上部から床面の格差は、25cm～30cmを測る。間仕切り間の距離は、P₂～P₃間は約2.60m、P₃～P₄間が2.70mとほぼ同幅を測る。これは住居址の柱穴の均等な配置に対応したことが考えられる。柱穴P₅に対応する間仕切りは無く、この部分で西側に傾斜したわずかな段をつくる。これは、間仕切りが存在したものが住居址内のその後の利用の仕方で取り払われた可能性が考えられる。柱穴P₁に対応する間仕切りは、周壁が用地外に延びるため不明である。

2 1号住居址の出土遺物 (第19図～第24図・第26図-36～74)

住居址内の出土遺物は、土器や石器など多彩が多い。特に、柱穴P₃とP₄の付近から周壁にかけて集中している。

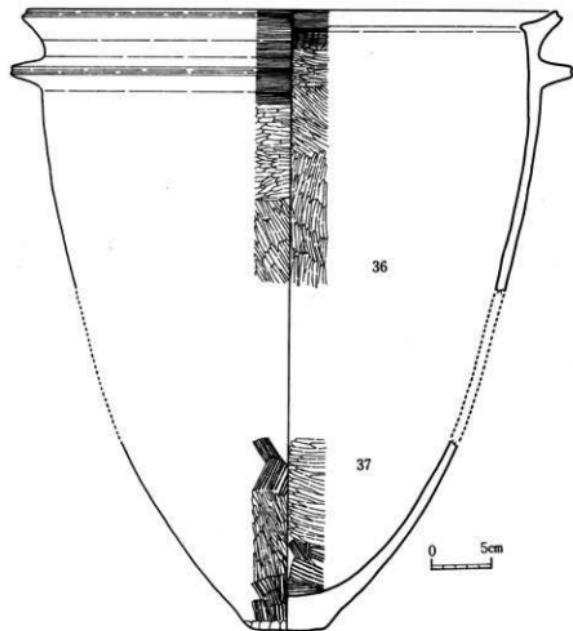
また、出土遺物と共に、比較的大きな炭化木が存在している。柱穴P₄から南東に向いて検出された炭化木は、大木で主柱の可能性が高い。一種の焼失家屋であろう。

出土土器は、大甕、甕、壺、台付き鉢など多種の器形がみられる。石器は、スクレーパー、軽石製品、凹石、台石、砥石などである。そのほか、特異な遺物に、柱穴P₃付近から土製の投弾が出土している。

土器は、大甕、甕、壺、台付き鉢の器種に分けられる。

36・37は、口径46.8cmを測る大型の變形土器である。形態・胎土が類似するところから同一固体とした。口縁部はわずかに内湾し、端部は「く」字形に外反する。口縁部端面は、凹めて仕上げる。口縁内面は、わずかに内部に張り出す。口縁部外側直下には、断面台形状の太い貼付突帯文を巡らす。突帯文の端面は凹めて仕上げる。底部は平底で、外方へ大きく立ち上がり胴部へ続く。外面は、口縁部から貼付突帯まで横位のていねいな刷毛ナデの整形が施され、それ以下の突帯から底部までヘラ磨きで整形成される。

38も大型の變形土器である。口径は、61.3cmと大きい。口径の大きさは異なるが、形態は36

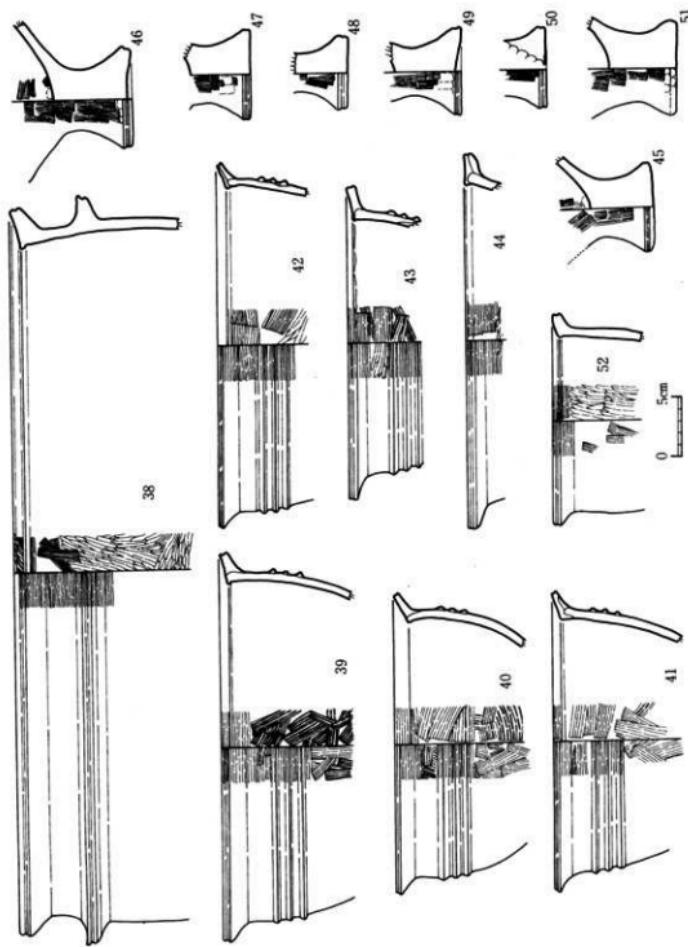


第19図 1号住居址出土遺物実測図(1)

ほとんど同じである。

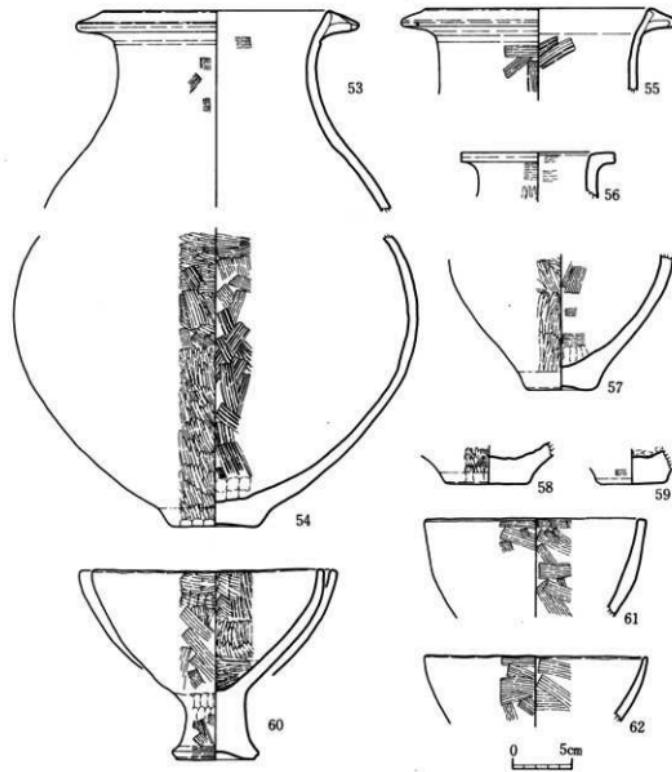
39~51は、變形土器である。39~43は變形土器の口縁部で、45~51はその底部である。口縁部は、「く」字状に外反するタイプで頸部には三条程度の貼付突帯文を巡らす。39・40のように胴部は球状に丸味をもって張るものと、42・43のように直線的な胴部がある。口縁部と突帯文間は横位のていねいな刷毛ナデ整形が施されるが、その他の部分は縦・横・斜位の粗い刷毛目がみられる。底部は、裾部が若干広がり、底面が充実した脚台である。一般的には底面は平坦な平底を呈するが、46・49のように上げ底状の凹面をつくるものもある。底部裾部の端部は面取りがおこなわれ、凹線状の凹みが施される。中には、51のように面取りをせざる仕上げるものもある。44は口縁部は平坦に外方に拡張するが、細片のため定かでない。52は、口縁部を「く」字状に外反させるタイプであるが、口径は18cmと小さく鉢状の器形を想定させる。

新20圖 1號住居址出土遺物示意圖（2）

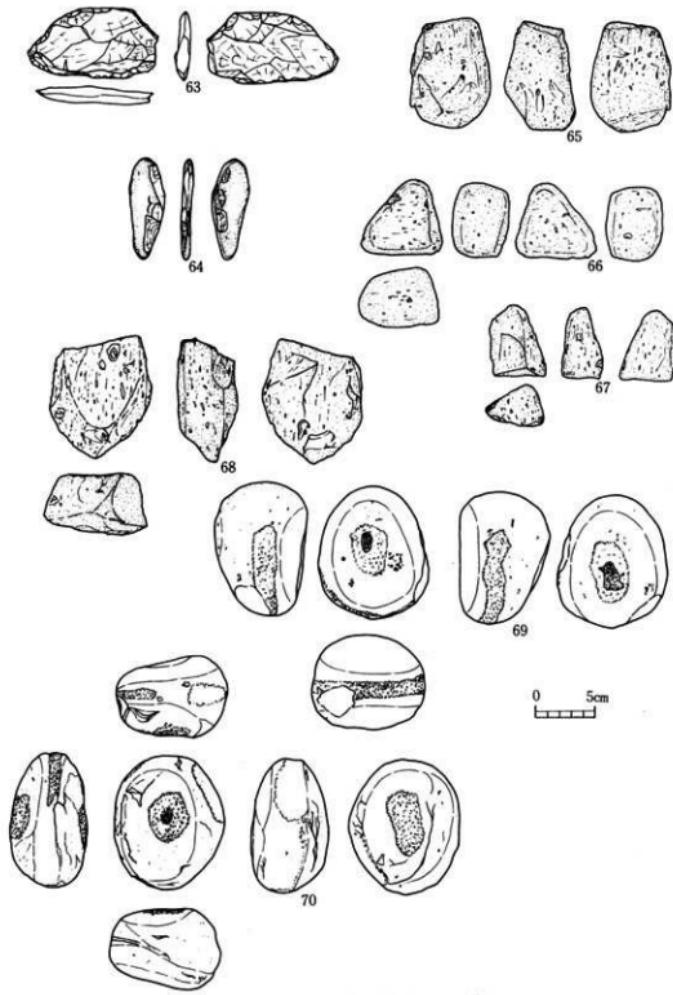


53~59は、壺形土器である。53・55・56は口縁部片で、54・57~59は底部片である。53・55の口縁部は、頸部から直線的に立ち上がりわずかに外反して逆「L」字状の拡張部をつくる。拡張部は、先端が丸味をなす三角形状のタイプである。56は、頸部から直線的に立ち上がり口縁は逆「L」字状に外反する。口径は13cmと小さく、小型壺の器形であろう。口縁部は丁寧な刷毛ナデ整形仕上げで、頸部は刷毛仕上げである。

54・57~59は、壺形土器の底部である。底径は、5.6~8.0cm程度の小型の底部である。小さ



第21図 1号住居址出土遺物実測図（3）



第22图 1号住居址出土遗物实测图(4)

い底部から大きく外反して立ち上がり、胸部は球状に膨らむ。胸部は刷毛目仕上げで、それ以下底部付近はヘラ磨き整形が施される。

60～62は、鉢形の器形を呈する。60は完成品であるが、鉢に脚台を付けた特殊な器形を呈する。口径は18cm×21cmを測り、平面形は楕円形を呈する。器高は、16cm程度の高さを測る。底部から外反して立ち上がり、口縁部付近はわずかに内湾し、口縁端部は平坦におさめる。60の脚部は、裾部が若干折り、底面が充実した脚台である。底面は、上げ底状のわずかな凹面をつくる。變形土器の底部に類似する。

出土石器は、スクレーバー、軽石製品、凹石、台石、砥石などである。

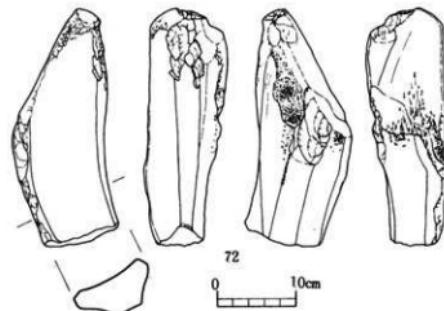
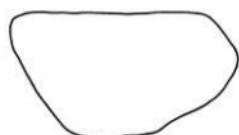
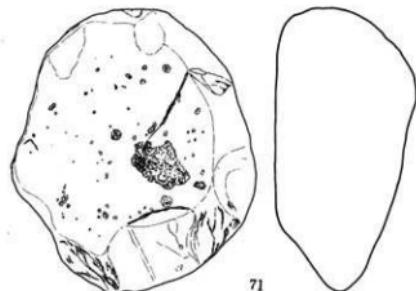
63は、粘板岩製の横刃形のスクレーバーである。

64は細長い扁平な自然礫であるが、横位置に剥離が施される。

65～68は、軽石である。部分的に擦り面が観察される。

69・70は、凹石・敲石である。69は、安山岩を使用した凹石であるが、敲石にも利用している。

長径11.1cm、短径9.3cm、厚み7.6cm、重さ1,070gを測る。表裏とも、浅く広い凹みが存在する。側縁には敲打痕がみられ、敲石にも使用されている。70は半花崗岩を使用した凹石であるが、敲石にも利用している。長径11.2cm、短径9.3cm、厚み6.3cm、重さ865gを測る。表には浅く広い凹みが存



第23図 1号住居址出土遺物実測図(5)

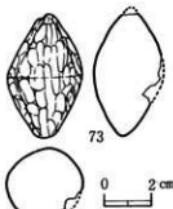
在し、裏面にはわずかに凹んだ敲打痕跡が残る。側縁には敲打痕がみられ、敲石にも利用している。

71は台石で、柱穴P₃の北側に出土した。長径36.1cm、短径31.0cm、厚さ18.0cmを測る。平坦面は滑らかになって、部分的に敲打痕が確認される。石材は、砂岩質ホルンフェルスである。

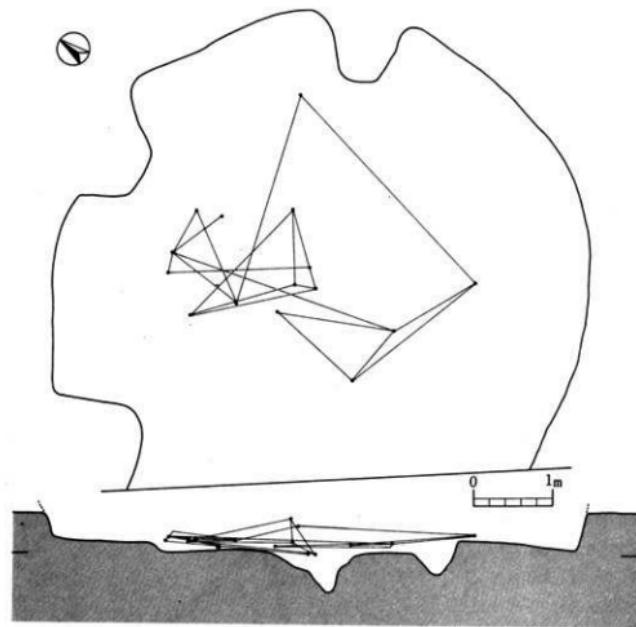
72は砂岩製の砥石で、住居址の中央ピット内からの出土である。最大長30.0cm、最大幅11.6cm、重さ3,600gを測る。自然礫面を多く残すが、よく使用され5面から6面にかけて研ぎ面がみられる。

そのほか、特異な遺物に、柱穴P₃付近から土製の投弾が出土している。

73が土製の投弾で、紡錘形（ラグビーボール状）を呈するが、先端部をわずかに欠損している。



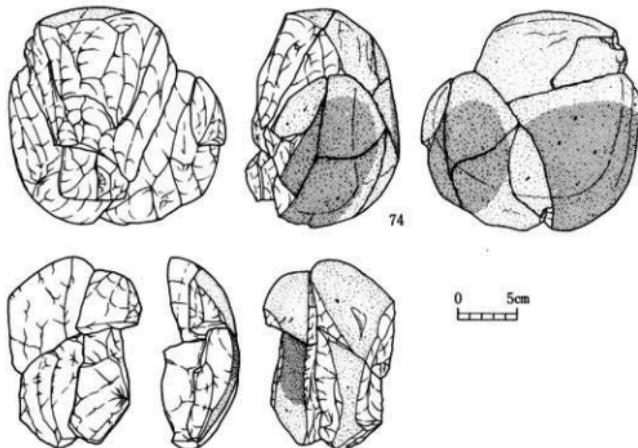
第24図 1号住居址出土遺物実測図(6)



第25図 1号住居址出土破碎縁分布図

る。長さ5.1cm、厚さ3.2cm×2.9cm、重さ37gを測る。投弾は紡錘形で、最大径はほぼ中央に位置し、堅く焼きしめられ、先端の一部と最大部の一部がわずかに剝離欠損している。

74は、破碎礫である。この破碎礫は、人工的に打撃を加えて破碎した痕跡はみられない。住居址の中央部の床面を中心に出土した破碎礫が、接合されたものである（第25図）。本来は一固体のものであるが、破碎礫が若干不足するため二固体となっている。接合礫は直径約13cm程度の円形に近い形の河原石で、表面は滑らかである。砂岩質である。接合礫を観察すると、火を受けた痕跡が強く残っている（第26図の網目部分）。つまり、火力で破碎した可能性が高い。



第26図 1号住居址内出土の破碎礫

第3節 出土遺物

中原山野遺跡では、1号住居址を除けば包含層から一般の出土遺物は少ない。A B 7区～A B 14区にかけて土器片が総数約1,100点出土した程度で土器以外の出土がみられない。

1 土器 (第27図-75～87)

1) 錐形土器

75～80は、錐形土器である。75は、口縁部は「く」字状に外反するタイプである。胴部は膨らみをもち、口縁部直下で胴部のやや上部に三条の貼付突帯を巡らせる。76は口縁部が同じく「く」字状に外反するタイプであるが、75とは形態が若干異なる。「く」字状の口縁端部は、同じ厚さで力強く平坦におきめ、端部の平坦面には凹線状の凹みをつける。口縁下の貼付突帯文は、台形状のしっかりしたもので端部は口唇状に凹む。このタイプは、平底の錐形土器の可能性もある。いずれも、口縁部や突帯間は、横位の丁寧な刷毛ナデ整形が施され、その他の部分は、刷毛目仕上げである。77・78は細片のため定かでないが、口縁部が逆「L」字状から水平に拡張するタイプである。79・80は、錐形土器の底部である。底部は、裾部が若干広がり、底面が充実した脚台である。底面は、平坦な平底を呈する。底部裾部の端部は面取りがおこなわれ、凹線状の凹みが施される。81は、低い脚台で裾部も広がらず裾端部の面取りもおこなわないもので、一般的な錐形土器の底部とは若干異質な器形を呈する。

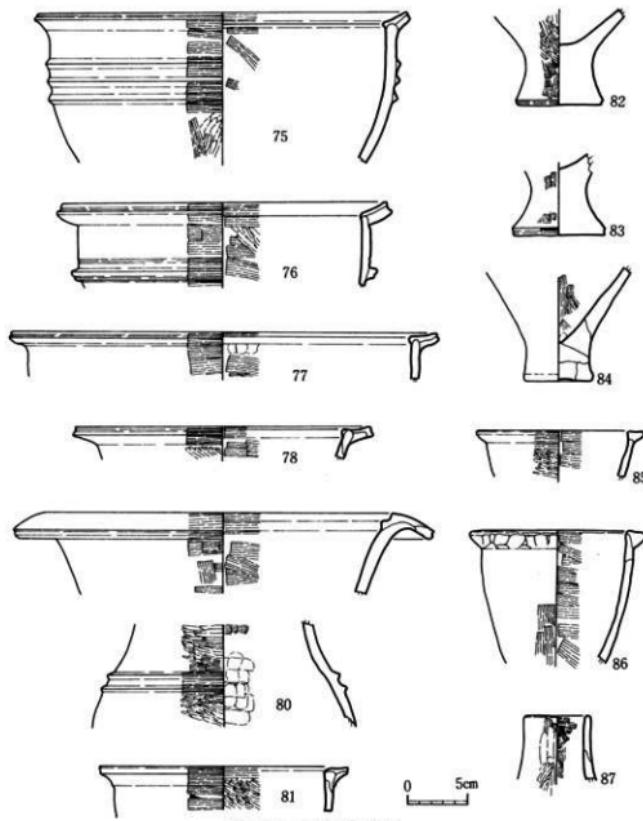
2) 瓢形土器

82・83は、瓢形土器である。82は、大きく外反した口縁部は外方に垂れ下がり氣味に拡張する。口径は大きく、35cmを測る。口縁内面には、削り出した突帯文を巡らせている。83は、頭部から肩部で、肩部には二条の突帯文を巡らせている。

3) 鉢形土器

84～86は、鉢形土器である。口径は、84は20.7cmと大きいが、85は14.0cmで86は14.6cmを測る一般的な大きさを呈する。胴部は直線的に外反し、口縁部は逆「L」字状に短く拡張する。86は、口縁拡張部を指頭で貼付した痕跡を残す。

87は、口径 5.6cmを測る直行口縁部片である。



第27図 出土遺物実測図

第1表 進跡出土遺物一覧表

番号	類別	標高	区・單	器種	部 位	法量(径・高・厚)	胎 土	調 整	焼成	色 調	備 考
1	I	70.35	2-B	X 深鉢	口縁部	器壁厚 0.65~0.9	長石・石英	ナ デ	良好	暗褐色	
2	*	69.28	A-2	*	胴 部	* 0.7~0.8	*	*	*	茶褐色	
3	*	69.545	B-2	*	*	* 0.5~0.6	*	*	*	*	
4	*	69.34	*	*	*	* 0.85	*	*	*	*	
5	*	69.53	他 A-1	*	口縁部	* 0.6~0.8 長石・石英 角 四 石	*	*	*	*	
6	*	69.46	*	*	*	* 0.35~0.8 長石・石英 粗 棒	*	*	*	無 文	
7	*	69.36	*	*	*	* 0.7~0.8	*	*	*	*	
8	*	69.555	*	*	*	* 0.65~0.8	*	*	*	*	
9	*	69.395	他	*	*	* 0.7~0.85	*	*	*	*	
10	*	69.59	*	*	口縁部 近 <	* 0.75~0.85	*	*	*	黃茶褐色	
11	*	69.345	A-2	*	*	L1 径 20.4 長石・石英 粗 棒	*	*	*	茶褐色	
12	*	69.51	B-2	*	*	* 0.5~0.65 長石・石英 粗 棒	*	*	*	*	
13	*	69.39	*	*	底 部	底 径 12.8 長石・石英	*	*	*	赤褐色	
14	*	69.465	*	*	底 部 近 <	器壁厚 0.5~1.1 長石・石英 粗 棒	*	*	*	黃褐色	
15	*	69.275	A-2	*	底 部	* 0.75~1.0 長石・石英 粗 棒	*	*	*	茶褐色	
16	*	69.31	*	*	*	* 0.7~1.0 長石・石英 粗 棒	*	*	*	茶褐色	
17	*	69.41	B-2	*	*	* 0.5~0.75 長石・石英	*	*	*	赤褐色	
18	II	70.0	D-11	*	胴 部	* 0.8~0.9 長石多量 石英	*	*	*	茶褐色	器皿は全体 的に黒褐色 の状態で 表面に剥離 や剥落が見 られる。
19	I	69.145	Z-1	*	*	* 0.65~0.75 長石・石英	*	*	*	*	純文施文
20	*	69.155	*	*	*	* 0.55~0.9 長石・石英 粗 棒	*	*	*	*	
21	*	69.015	Y-1	*	口縁部 近 <	* 0.4~0.6 長石・石英 粗 棒全表面	*	*	*	*	
22	*	68.985	Z-1	*	口縁部	* 0.5~0.7 長石・石英 粗 棒	*	*	*	*	
23	*	69.08	Y-1	*	*	* 0.6~0.7 砂 粒 を 含まない	*	*	*	*	
24	*	69.085	*	*	底 部	底 径 13.0 長石・石英 粗 棒	*	*	*	*	
25	*	68.945	*	*	口縁部	L1 径 7.5 長石・石英 粗 棒	*	*	*	*	
29	曉	69.42	D-9 V	*	器壁厚 0.5~0.65	*	*	*	*	*	経磨上部
30	*	69.135	*	*	口縁部 近 <	* 0.5~0.8 長石・石英	*	*	*	*	
31	*	69.275	*	*	胴 部	* 0.7~0.8 長石・石英・多粒	*	*	*	*	
32	*	69.44	*	*	*	* 0.75 砂 粒 を 含まない	*	*	*	*	
36	斧	69.29	魚 I	刃 住 壁 元	口径44.0 厚 52	復元高 石英・長石 砂 粒 を 含まない	② 2.8 ② ハーネデ	*	② 暗黄褐色～黒褐色 ③ 暗黄褐色～黒褐色	スヌ付着	

第2表 遺跡出土遺物一覧表

番号	類別	標高	区・層	器種	部位	法量(径・高・厚) cm	胎土	調 營	焼成	色 調	備考	
37	甕	69.36	地	I 号 住	壺 備 元 底 径 6.4 厚 6.4	復元高 52	石英・長石 黒 薔 母	④: ガキ ④: ケ→ナデ	良好	茶褐色 沙黒褐色		
38	*	69.35	地	*	I口縁部	II 径 61.3	長石・石英 黒 薔 母	④: ナデ・ハケ目 焼成いいかげ	*	茶褐色		
39	*	69.455	地	*	I口縁部 ～側部	*	32.4	*	④:	*	茶褐色～暗茶褐色 スス付着	
40	*	69.2	地	*	*	*	24.8	*	*	*		
41	*	69.495	地	*	*	*	24.6	*	*	*	茶褐色 沙暗茶褐色 スス付着	
42	*	69.1	*	*	*	*	30.2	*	*	*		
43	*	69.175	*	*	*	*	25.0	*	*	*	茶褐色 沙暗黃褐色	
44	*	69.56	*	*	*	*	26.4	*	④: ケ目 内 *	*	茶褐色 沙暗茶褐色	
45	*	69.34	*	*	底 部	底 径 7.5	*	④: ナ・ハ今日 ④: ナ	*	*	茶褐色 沙暗黃褐色	
46	*	69.4	地	*	*	*	8.8	*	*	*	茶褐色	
47	*	69.745	地	*	*	*	7.8	*	*	*	茶明黃褐色	
48	*	69.245	*	*	*	*	6.0	④: ケ目 ④: ナ	*	*	茶暗茶褐色 沙暗茶褐色	
49	*	69.365	*	*	*	底 径 7.5	長石・石英 黒 薔 母	④: ハクズツナデ ④: ケ目・ナデ	良好	茶暗黃褐色 沙暗黃褐色		
50	*	69.245	*	*	*	*	7.0	④: ケ目・ナデ ④: ナ	*	*	茶暗茶褐色 沙暗黃褐色	
51	*	69.38	地	*	*	*	8.0	長石・石英 黒 薔 母	*	*	茶暗黃褐色 沙暗茶褐色	
52	*	69.39	*	*	I口縁 ～側部	II 径 18.0	*	④: ケ目・ナデ ④: *	*	*	茶褐色 沙暗茶褐色 スス付着	
53	*	69.305	地	*	壺	*	18.7	長石・石英 黒 薔 母・砂粒	④: ケ目 沙 *	刺落	茶暗黃褐色	
54	*	69.35	地	*	*	側 径 33.8 底 径 8.0	*	④: ガキ ④: ケ→ナデ	良好	茶褐色～暗茶褐色 沙暗褐色～暗黃褐色		
55	*	69.305	*	*	I口縁部	II 径 18.3	長石・石英 黒 薔 母・砂粒	④: ケ目	刺落	茶暗茶褐色		
56	*	69.51	地	*	*	*	13.0	長石・石英 黒 薔 母	④: ハ目・ナデ ④: *	良好	茶褐色 沙暗茶褐色	
57	*	69.23	地	*	底 部	底 径 6.4	*	④: ガキ・ナデ ④: ケ目・ナデ	*	*	茶暗茶褐色 沙暗褐色	
58	*	69.255	*	*	*	*	6.6	長石・石英 黒 薔 母・砂粒	④: ケ目・ナデ 沙刺落	*	茶褐色 沙暗茶褐色	
59	*	69.14	*	*	*	*	5.6	*	④: ケ目 ④: ユビナデ	*	茶褐色	
60	*	69.275	地	*	縁 備 元	I口 径 18.0 復元高 16.0	*	④: ケ→ナデ ④: *	*	*	茶褐色～暗茶褐色 沙暗褐色～暗茶褐色	
61	*	69.21	地	*	I口縁 ～側部	II 径 17.6	長石・石英 黒 薔 母	④: ハケ目 ④: ケ目・ナデ	刺落	茶褐色 沙暗茶褐色 スス付着		
62	*	69.145	*	*	*	*	18.6	*	④: ケ目・ナデ 沙 *	*	茶暗茶褐色 沙暗褐色	*
75	*	69.53	地	A-11 Ⅲ	壺	*	31.5	*	*	*	茶褐色 沙暗茶褐色	*
76	*	69.595	地	B-12 Ⅲ	*	*	28.0	長石・石英 黒 薔 母・砂粒	*	*	茶褐色～茶褐色 沙暗茶褐色	
77	*	69.58	地	*	*	*	35.8	長石・石英 黒 薔 母・砂粒	*	*	茶褐色 沙暗茶褐色	
78	*	69.425	A-12 Ⅲ	*	*	*	25.0	長石・石英 黒 薔 母・砂粒	*	*	茶暗褐色～暗茶褐色 沙暗茶褐色	

第3表 遺跡出土遺物一覧表

番号	種類	標高	区・層	品種	部位	法量(径・高・厚) mm	胎土	調整	焼成	色調	備考
79	甕	69.715	地	B-11	底 部	底 径 7.4	灰石・石英 黑雲母・輝鉄	ハケ目・ナデ ○ +	良好	淡茶褐色 沙茶褐色	
80	*	69.87		D-12	Ⅲ	*	*	*	7.8	*	*
81	*	69.67		B-11	Ⅲ	*	*	*	7.8	*	*
82	*	70.03		D-11	Ⅲ	*	口縫部	口 径 35.0	*	ハケ目・ナデ ○ +	*
83	*	69.59		A-11	Ⅲ	直	胴 部	胴 径 22.0	灰石・石英 黑雲母	ハケ目・ナデ ○ + ユビダ	*
84	*	69.58	地	B-10	Ⅲ	*	口縫部	口 径 20.7	*	ハケ目・ナデ ○ +	*
85	*	69.87	地	B-11	Ⅲ	直	*	*	14.0	*	*
86	*	69.58	地	B-13	Ⅲ	*	口縫部	*	14.6	ハケ目・ナデ 内側ハケ目	*
87	*	69.64		D-9	Ⅲ	*	口縫部	*	5.6	ハケ目・ナデ ○ +	*

第4表 出土石器一覧表

番号	品種	出土区	層	標高	石 材	最大長 mm	最大幅 mm	重さ kg	備 考
26	石 錐	D-1	X	69.53	石 英	2.3	1.25	1.01	
27	*	A-1	*	69.255	黒輝石	2.8	1.6	1.41	
28	磨 石	B-1	*	69.595	花崗岩	9.5	8.3	410.0	
33	磨製石斧	D-22	Ⅵ	72.735	ホルンフェルス	7.3	5.0	120.0	
34	打製石斧		表		粘板岩	13.8	6.3	270.0	
35	*	D-12	Ⅲ	70.055	*	7.7	4.9	55.0	
63	横刃形石器	1号住		69.345	*	5.9	10.9	108.27	
64	バ ンチ	*		69.12	*	8.4	2.9	23.00	
65	軽石製品	*		69.32	軽 石	11.3	6.8	85.38	
66	*	*		69.11	*	6.3	6.9	48.97	
67	*	*		69.15	*	11.3	8.5	87.75	
68	*	*		69.355	*	6.0	4.8	17.58	
69	凹石・敲石	*		69.15	安山岩	11.1	9.3	1070.0	
70	*	*		69.175	半花崗岩	11.2	9.3	865.0	
71	台 石	*			砂岩ホルンフェルス	36.1	31.0		
72	砥 石	*			砂 岩	30.0	11.6	3600.0	
73	投 弾	*		69.15	土 製	5.1	3.2	37.06	
74	礫 (接合)	*		69.12	砂 岩	13.0	12.8	1510.0 340.0	

第 IV 章 発掘調査のまとめ

中原山野遺跡は、上層から戦跡遺構、弥生時代文化層、縄文時代文化層の三時代に及ぶ成果が得られた。調査区の幅が狭いことによって断片的な資料ではあるが、用地外に延びる遺跡の在り方に重要な示唆を与えてくれた遺跡といえる。

第1節 縄文時代早期について

Ⅹ層はA～B 1～2区に遺物の分布は限定され、遺跡は用地外の南側から西側の前畠遺跡に延びることが推定される。

Ⅹ層はアカホヤ火山灰層直下に位置し、早期に該当することが想定される。A 2区の用地外寄りの位置に集石が1基検出された以外は、遺物の出土だけである。集石は、角礫総数僅か47個を保持するもので非常に小規模である。遺構は、遺物の分布からみると、南の用地外に拡がることを考えられる。

出土遺物には土器と石器があるが、石器は僅か3点と断片的である。土器は二類に細分され、本遺跡ではⅠ類を中心に出土しているが、Ⅱ類は僅か1片の出土で、しかもⅢ層に混入して発見された早期後半の土器である。

Ⅹ層出土の主な土器は、Ⅰ類土器である。Ⅰ類土器は、紋様を有するものは少なく、その形態から、ほぼ一型式とすることができる。

第8図-1、2のように、数条の凹線文帯の両側に円形刺突文を施し幾何学的な紋様を構成するもの、円形刺突文間に波状凹線文を施すもの、口縁部に突帯文を貼付するものがある。これらの形態は、早期後半の平底式土器に比定することができる。その他の口縁部の形態は、6、9のように、大きく外反し、途中で屈曲部をもったいわゆる二重口縁状を呈するタイプである。しかし、本遺跡出土の土器の特徴は、口唇部に刻目を施すだけで器面は無文のタイプがほとんどである。無文ではあるが、口縁部、頸部、胴部、底部の形態は、平底式土器に類似し、平底式土器の範囲に属するものと考えられる。⁽¹⁾

さらに、注目すべきは、25の器形である。僅か1点で細片ではあるが、深鉢にはみられない器形である。口縁部が内傾して細まり、深鉢にはみられない特殊な器形となる。この時期、前畠遺跡では臺形の器形が存在しており、平底式土器の段階では顕著に器形変化を起こす時期と考えられる。今後の資料の増加を待ちたい。

Ⅱ類は、保存が悪いが貝殻腹縁刺突文で羽状文を施すタイプで、下剣峰式土器に比定されるものである。⁽²⁾

Ⅴ層については包含層が僅かに残存し少量の遺物を出土するが、今回の調査区においてはその中心を捉えることはできなかった。

第2節 弥生時代について

本調査の結果、弥生時代包含層は後世の削平を受け辛うじて遺存する形であった。さらに、A B10区の取り付け道路付近に花弁状の間仕切りを備えた竪穴住居址が一基検出され、弥生時代の遺構の存在が確認された。そして、住居址内からは多量の遺物が出土しており、土器編年上、一括資料としての価値が高い。

弥生時代包含層はB11区を中心にして北側に向けて大きく凹地を形成しており、今回の本線調査区部分は中原山野遺跡の北端に位置していることを窺い知ることができる。すなわち、A B10区で検出された住居址はこの集落の最北端の遺構として捉えることができ、中心は南側の用地外に存在することが想定される。

本遺跡で注目すべき成果のひとつに、弥生時代包含層や遺構（住居址）の基盤となっているⅣ層の火山灰状の軽石・粘土層の存在である。この軽石・粘土層は、アカホヤ火山灰層に酷似している。これまで、中ノ原遺跡や中ノ丸遺跡、前畠遺跡などではⅣ層のいわゆるアカホヤ火山灰を基盤として弥生時代の各遺構が存在しているが、本遺跡ではⅣ層に酷似した土質のⅣ層上に遺構が存在している。このことは、地層と弥生時代の遺構との問題に新たな視点を与えてくれた。つまり、竪穴住居址の床面の位置が、如何に火山灰層と密接な係わりがあるかということである。本遺跡のⅣ層は、Ⅳ層のアカホヤ火山灰と性質・厚さとも酷似している。そのため、竪穴住居址の床面として最も条件の良いⅣ層中に床面が選定されたことを窺い知ることができ。同様なことは、喜入町下大原遺跡においても成川式土器期の住居址が薩摩火山灰層を床面にした珍しい例が存在している。このことは、住居址床面の選定においては、その土地の地層をある程度選択していることが窺い知れる。

本遺跡では、竪穴住居址は一基のみの発見であったが、ほぼ円形のプランで直径は約7m程度の大型住居址の部類にはいるものである。住居址は三ヶ所に間仕切りをつくる花弁型住居址で、床面は、中央が掘りコタツ状に一段低くなりこの中央の一段低くなった床面の隅には五本の主柱が位置している。住居址中央のピット内の埋土には、灰が多量に存在しており、炉穴の可能性が強い。

周壁から延びる間仕切りには、柱穴が位置している。この間仕切りに囲まれた部分は、一種のベッド状遺構となる。

柱穴P₅に対応する間仕切りは無く、この部分で西側に傾斜したわずかな段をつくる。これは、間仕切りがあったものが住居址内のその後の利用の仕方で取り払われた可能性を考えられる。

住居址内の出土遺物は、土器や石器など多彩であり多い。特に、柱穴P₃とP₄の付近から周壁にかけて集中している。

また、出土遺物と共に、比較的大きな炭化木が存在している。柱穴P₄から南東に向いて検

出土された炭化木は、大木で主柱の可能性が高い。一種の焼失家屋であろう。

出土土器は、大甕、甕、壺、壺、台付き鉢など多種の器形がみられる。石器は、スクレーパー、軽石製品、凹石、台石、砥石などである。そのほか、特異な遺物に、柱穴 P₃付近から土製の投弾が出土している。

土器は大甕、甕、壺、台付き鉢などの器種に分けられるが、住居址内出土で一括資料としては一級の資料といえる。但し、山ノ口式系の在地土器だけの組み合わせであり、器種の組み合わせは補強されるが、編年の決め手とは成りえない。

平底の大型の變形土器や脚台付きの變形土器は、王子遺跡でもセッテで出土しており、形態上もほぼ同時期であることが考えられる。⁽⁴⁾ 壺形土器は出土量は少ないが、形態上は王子遺跡でもこの期に伴うタイプである。さらに、脚台付き鉢形土器の出土がある。脚台は、變形土器の脚台と同様な形態であり、高環形土器を持たない山ノ口式系文化においてはその役目を果たした可能性もある。

出土石器は、スクレーパー、軽石製品、凹石、敲石、台石、砥石などがある。特に、凹石や敲石は、前回報告の中ノ丸遺跡や王子遺跡などでは必携の住居址出土遺物であり、この地方の大きな特徴といえる。また、住居址に頻繁にみられるものに台石があり、これも凹石同様、この集落の生産形態を知る一助となろう。

そのほか、特異な遺物に、土製の投弾が出土している。従来、本県での出土例では金峰町松木園遺跡に次いで二件目である。⁽⁵⁾ この紡錘形（ラグビーボール状）を呈する投弾は、北部九州や東九州で出土するタイプと同類であり、移入品の一つと考えられる。

さらに、特異な出土遺物に熱破碎砕がある。住居址内に散乱していたものが、接合されたものである。意図して熱破碎されたものか、偶然熱破碎されたものか、また、接合に不足するものは石器などに利用されたものか、興味ある課題である。

中原山野遺跡の構造や出土遺物は、弥生時代中期終末期に位置付けておきたい。

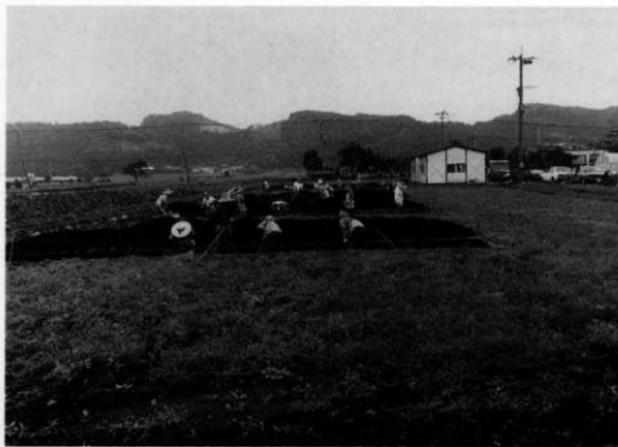
註

- (1) 河口貞徳 1972 「塞ノ神式土器」『鹿児島考古』6号
- 新東晃一 1989 「塞ノ神・平裕式土器様式」『縄文土器大観』1
- (2) 西之表市教育委員会 1978 「下剣原遺跡」『西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書』1
- (3) 喜入町教育委員会 1988 「下大原遺跡」『喜入町埋蔵文化財発掘調査報告書』(4)
- (4) 鹿児島県教育委員会 1985 「王子遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』(34)
- (5) 本田道輝 1983 「松木園遺跡出土の土弾」『指宿史談』 第3号

図 版
PLATES



1. 中原山野遺跡遠景（西から）



2. 確認調査風景（東から）

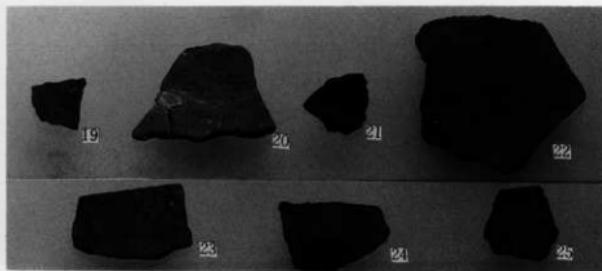
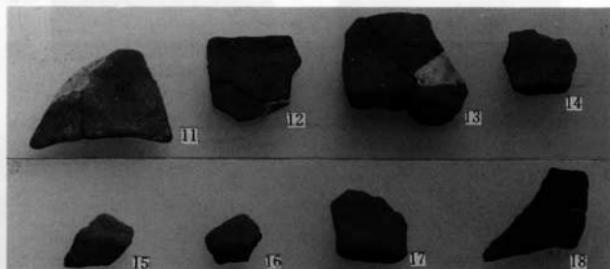
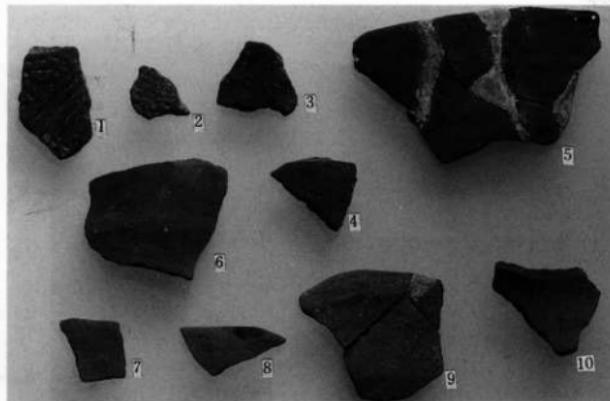
図版2



1. D区列発掘調査状況（東から）

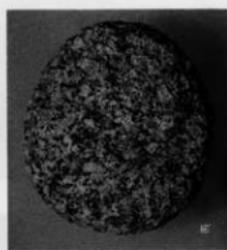
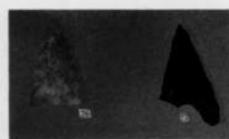


2. B14区以東確認調査状況（西から）

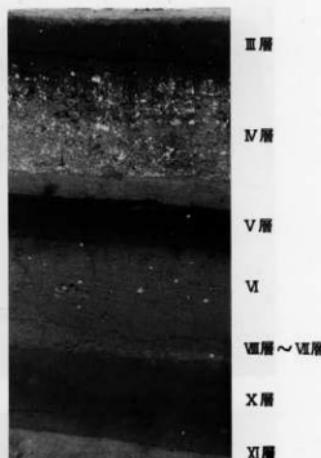


1. 純文土器（早期）

図版4



1. 石器（早期）



2. 中原山野遺跡の層序



3. D10区付近のVI層谷部状況